

— デザートセンター探索特集 —

UFO contactee

SINCE 1961
GAP JAPAN NEWSLETTER



UFO/超能力/宇宙哲学

コンタクティー

巨大宇宙船、デザートセンター上空に出現!
地球救済活動を続ける異星人 (2)
飛行機を助けた謎のUFO
奇跡を起こす反復思念とイメージ法
善だけを探し求めてテレパシーが発現
ジョージ・アダムスキーと異星人(完)

SUMMER
1992

117



〈巻頭言〉 真実と隠蔽	1
巨大宇宙船、デザートセンター上空に出現!	2
〈写真〉 奈良市上空のUFO	山岡龍夫 17
地球救済活動を続ける異星人(2)	秋山真人 18
飛行機を助けた謎のUFO	23
奇跡を起こす反復思念とイメージ法	久保田八郎 24
〈予告〉 チリ・アルゼンチン・イースター島宇宙ロードの旅	27
科学—SCIENCE	30
GAP短信	32
善だけを探し求めてテレパシーが発現/ひとりで物品が動く現象	小川隆志/大嶋順子 33
思いどおりに出現するUFO	中島直仁 34
〈写真〉 UFOを東京タワーより撮影	佐々木八郎 35
高松支部UFO写真展	36
〈予告〉 大阪支部特別月例会/日本GAP本部UFO観測会	37
ジョージ・アダムスキーと異星人(完)	アリス・ボマロイ 38
〈投稿欄〉 ユーコン広場	46
本誌/バックナンバー掲載記事目録	48
英文版第7号/編集後記	49
〈広告〉 新アダムスキー全集	50
〈広告〉 GAPグッズ	51
日本GAP全国月例研究会案内	52



金星人からジョージ・アダムスキーに伝えられた金星のシンボルマーク。2個の図形の内、左側は宇宙の父性原理(陽)、右側は母性原理(陰)を意味する。円は宇宙をあらわしている。

GAPについて

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基いて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来るべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コスミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界(惑星)から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題に関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大國政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト(接触)しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

〈紙張写真〉

南カロライナ州の円盤②

1980年4月4日、午後5時半から6時までのあいだ、ビル・ハーマンという人が原野の上空に出現した直径約12メートルの円盤に仰天し、手にしていたカメラで連続数枚撮影した。円盤は木の葉運動を繰り返していたが、ブーンという音を出すこともあった。これは前身表紙に掲載した写真の連続をなすもの。円盤を追いかけたために下方の森林地帯がボケている。これは動く列車を追って撮影すると後方の風景が流れて写るのと同じ原理。

ある重要人物から聞いた話だが、日本人の宇宙開発関係コンサルタントをしておられるM氏が、昨年所用あつてアメリカのNASA（米航空宇宙局）を訪れた際、そこに秘蔵してあるアポロ計画関係の月面写真を大量にみる機会を得た。これらの写真類は一九六〇年代の終わりから七〇年代初頭にかけて実施されたアメリカの月探索有人宇宙飛行で月に到達したアポロ宇宙船から月面を撮影したものである。

写真は数ランクに分けてあり、A、Bあたりはいつでもよいようなもので、

真実と隠蔽



Cランクぐらいになると奇妙な物体が月面に見られる写真、Dランクになると驚異的な光景を示す極秘の写真であるという。M氏が見たものは、なんと月面世界に別な惑星から来た大母船や円盤が着陸している、この世のものとも思えぬ物凄い写真類で、驚愕した氏はそれ以来心境に大変化を起し、それまで信じていなかったUFOの実在を認識し、精神的な面でも大きく変化したということだった。

こうした写真類はNASAの高級将校とコネがあれば見せてもらえるもの

らしく、アポロ計画極秘の写真類を見た日本人は他にもいるらしい。編者はその重要人物を通じてM氏に会い、詳細を聴取しようと企画していたが、M氏が体験の公開を拒絶しているため、会見はまだ実現していない。

当然のことながら、そのような極秘の写真が存在することを公表しようものなら、たちまちM氏はオーソドックスの学界から猛反撃を被り、下手をすると職業を失いかねない。したがって写真類を見た他の日本人もすべて黙秘していると思われる。

NASAが月ばかりか別な惑星に関する凄惨な情報をすべて隠蔽しているという事実は、ダニエル・ロス著『UFO—宇宙からの完全な証拠』（中央アト出版社）で明らかにされているが、M氏の件はまさにそれを裏付ける有力な傍証である。ということはアダムスキーの言う月面の異星人基地の存在も確認されたことになる。しかもこれはUFOを全く信じていなかった日本人科学者によるのだ。

さあ面白くなってきたではないか。アダムスキー否定派が何を言おうと、事実はあくまでも事実として存在し、それは次第に洩れてくるのだ。月面ばかりか我々の太陽系の別な惑星群に偉大な文明が存在する事実も、たぶん来世紀になれば日常茶飯的な知識となつて、地球人の対宇宙意識も大きく変化するだろう。

現在NASAは惑星群に関する重大な知識を蓄えているはずだが、すべて隠蔽しているといわれている。公表することによって社会に大混乱が発生するのを防止するためだ。

地球人は未知の物事に対して恐怖しやすい。今、NASAが「別な惑星群に偉大な文明が存在し、その人々は素晴らしい進化を遂げている」と発表しようものなら、世界中の人間が大喝采と歓声で迎えると思いきや、恐怖心によつて大変なデマが流れ、世の中は大混乱に陥るだろう。これはソ連の崩壊のそれどころではなく、世界中がハチの巣をつついたような騒ぎになることは目に見えている。

だからNASAの隠蔽策は正しかったのだと編者はこの頃思うようになった。世界の人間がもつと宇宙に目を向けて対宇宙意識を発展させ、自己の卑小な存在感を希薄にし、宇宙との一体性の方向に覚醒するようになるまでは、別な惑星群の大文明の存在を隠蔽しておくほうがよいだろう。隠蔽とは必ずしも悪徳ではない。

今、人間個々にはあまりにも弱すぎる。巨大な体制の一歯車として噛み合っているうちはロボットと化し、はみ出ると根無し草になつてしまふ。マスメディアに乗せられてあらゆる面で流行のとりことなり、電車内では立派な服装の青年がマンガに熱中する。今年一月にロサンゼルスで聞いた話によると、

ビバリーヒルズでティファニーが開店した日、日本人が二〇〇人も集まつて物笑いのタネになつたという。

しかし悲観的想念を起さないのが宇宙哲学による重要な生き方だ。建設的な良い面のみを求めて「すべてが良いくなる」というpositive thinking（積極思考またはプラス思考）で良き信念波動を放射するならば、それは必ず周囲に良き影響をもたらすだろう。この姿勢を強化し続けて人間の心に明るい希望の光をもたせられるようにしながら宇宙的な意識を高揚させることが、別な惑星の大文明の導入よりも先立つ必要があると思われる。

NASAを信じよう。そして全人類による宇宙時代の幕明けが来世紀に始まることを確信したい。そのような根拠はあるのだ。具体的に言えば二〇二〇年ないし三〇年頃には別な惑星群の大文明が地球人に恐怖感なしに受け入れられるようになり、異星人との交流が行なわれるようになるだろう。その頃にはアダムスキーが二〇世紀最大の偉人として世界的に浮上するだろうし、日本人秋山眞人氏の名も伝播するだろう。

しかし最重要なのは個々の人間がアダムスキーの言う「宇宙の意識（宇宙の創造パワーと英知）」の存在を認識し、限りなくそれに接近することにあるようだ。来世紀は人類がそのことに気づくようになるだろう。（久）

巨大宇宙船、デザートセンター上空に出現!

今年一月下旬、米カリフォルニア州デザートセンターを訪れた日本GAP第五次調査団は、二七日午後、巨大な葉巻型物体が上空に出現して飛翔するのを約三分間目撃、驚喜と感動の声が大砂漠に広がった。この他にもしばしばUFOが出現し、帰国途中、海上に展開した不思議な現象を飛行機の窓から全員目撃、異様な興奮に包まれた。以下は久保田八郎、篠芳史、松村芳之、田中淳、加藤純一による報告である。

① 久保田八郎

すでに何度も本誌に記事を掲載したとおり、日本GAP本部は一九八八年一月に第一回デザートセンター調査を実施して以来、昨年まで四回に渡ってこの調査行を続けている。

デザートセンターというのは一九五二年一月二〇日、ジョージ・アダムスキーが、この砂漠地帯で金星のスカウトシップ（円盤）から降り立った金星人とコンタクトした場所として知ら

れている。詳細は彼の著書『Flying Saucers Have Landed』に出ている。

〔注〕日本語訳は中央アート出版社刊「新アダムスキー全集第一巻『第二惑星からの地球訪問者』」に収録。英文原書は絶版、入手不可能）

詳細な経緯は右の書を参照されるとよいが、簡単に述べると、今を去る四〇年前、アダムスキーはUFO観測を目的として六人の同行者とともにこの大砂漠を訪れた。ここはロサンジェ

スから約四〇〇キロのカリフォルニア州南部のモハービ砂漠の一角で、アリゾナ州に近い辺鄙な土地である。

アダムスキー、金星人に会う

一行はデザートセンターの中心部からパーカー街道を一一マイルほど進行して下車し、ここで休憩中、上空に巨大な母船が出現するのを目撃、直ちにアダムスキーは助手のルーシー・マクギニスの運転する車でアル・ベイリーとともに半マイルほど元の方向へ戻り、そのまま道路から砂漠地帯へ入りこんで停車した。

すると前方半マイルの高い岩山の馬の鞍状の所に一機の円盤がいるのが見えた。アダムスキーは携行した六インチ反射望遠鏡に手札判カメラを装着してそれを撮影した。

続いて彼がコダックのブローニーマラで馬の鞍状の所にいる円盤を撮影

したあと、前方約四分の一マイルの谷間の所に一人の人間がいて、彼を手招きした。ゆつくりと接近して行ったところ、相手はスキー服に似た特殊な服を着た男で、英語が話せないらしく、手真似でいろいろと話しかけてきた。

アダムスキーはすぐに相手が別な惑星から来た人間であることを悟って、驚喜しながらやはり手真似とテレパシーで相手と会話を交わした。その内容はきわめて興味深いものだが、詳細は前記の邦訳版に出ている。

約一時間話を続けた後、相手は地面にわざと両足の靴の跡をつけた。靴の底に刻まれている特殊な図形が砂地に残ったのを、同行者の一人、ジョージ・ウィリアムソン博士が石膏にとった。

アダムスキーと金星人の二人が会話を行なっている光景は、遠方から双眼鏡で観察していたアリス・ウェルズ女史がスケッチした。このスケッチをもとにして女流画家ゲイ・ベッツがアダ

ムスキーの助言をもとに油絵を描いた。いずれの絵も私は現物をビスタのアダムスキーの家で見たことがある。それは一九七五年一月で、当時健在だったウエルズ女史が見せてくれた。

このとき私はオーシャンサイドに滞在して三日間ビスタへ通い、アダムスキー問題について徹底的に女史から聞いた。その結果、アダムスキーの体験が真実そのものであることを知ったのである。このときのウエルズ女史との対談も新アダムスキー全集第八巻『UFO・人間・宇宙』に掲載してある。

世界各地に出現したアダムスキー型UFO

さて、そのデザートセンターを私達が毎年のように調査したのは、アダムスキーが金星人とコンタクトしたという現場を検証して、彼の体験の信憑性を打ち出そうという意図にもとづくものである。徹底した実証主義者の私は、現地を探索して完全な裏付けを発見することが最重要であると考えていた。大体に彼が最初の著書を出した当時は轟々たる非難攻撃的になった。彼がパロマー山で六インチ反射望遠鏡を用いて撮影した異星の円盤や母船にしても、模型をぶら下げて撮影した偽造写真だというのが大方の反アダムスキー派の言い分だった。

しかし実際には彼が撮影した円盤や母船と全くおなじタイプのUFOが世

界各地で目撃されているし、写真にまで撮られているのだ。たとえば、日本でも一九七四年一月一日、広島県尾道市の高校生・藤松和彦君がアダムスキー型円盤と母船の写真を撮影して衝撃を与えた。この事件も私は当時わざわざ本人宅を訪れて会話し、周囲の関係者達にもあたって徹底的に調査したが全くの真実の出来事であった。それまで同君はアダムスキーのことを全然知らなかったのだ。

岩山に刻まれた不思議な曲線

話をもどすと、私達の第一次調査では、まずコンタクト地点を突き止めることにあつた。実はそれ以前にもアメリカの或るグループの案内によつて、「ここがコンタクト地点だ」という場所へ何度も行つたことがあるのだが、それは後になって約三〇キロも離れた違う場所であることが判明したのである。アダムスキーは「パーカー街道を進行した」と述べているのに、その米人グループはデザートセンターの中心部をなすガソリンスタンドからいつも左折して西の道を行つていた。これはパーカー街道とは全然違う方向なのだ。

そこでなんとかして我々自身で真実のコンタクト場所を突き止めようと思ひ立ち、小人数の調査団を編成して第一回目の探索行を実施したのは一九八八年（昭和六三年）の一月である。

しかしこのときも不成功に終わった。一名で現地を訪れたのだが、今度は確実にパーカー街道を前進して、それらしい丘へ登つたけれども、特定はできなかった。

だが岩山の低い丘へ登つたときに非常に不思議な物を発見したのである。長さ数メートルに及ぶ凄く美しい曲線が岩盤に刻まれていたのだ。巨大な曲線定規を用いて刻んだのかと思われるような見事な曲線を、こんな砂漠地帯の奥地の岩山に誰がつけたのだろうか？これは計算すると直径約一〇メートルの完全な円の一部分ということになる。

私達がそこへ来ることを予知していた異星人が、前夜円盤で降下し、タツチダウンして回転（自転）しながら痕跡をのこしたのだろうか。これに関する詳細な記事は本誌一〇四号に出ている。

真実のコンタクト地点を発見

第二次調査は翌年すなわち八九年一月のことで、私、坂本貢一・茂子夫妻、篠芳史、ダニエル・ロス・パメラ夫妻の六名である。

このときは偶然とは言い難い何かの導きによつて真実のコンタクト地点を発見した。アダムスキーコンタクト時の同行目撃者の一人であるウィリアムソン博士が後に出した書物『Other Tongues-Other Flesh』の中に掲載さ

れている写真が絶大な役割を果たしたのだ。これは金星人が円盤で飛び去つたあと、砂地に残つた足跡の図形を人類学者のウ博士がしゃがみこんで石膏にとつている場面を、同行者の一人（たぶんアル・ペイリー？）が6×6センチ判の二眼レフで撮つたもので、これこそアダムスキーのコンタクト地点を示すものとして貴重きわまりないものであり、またアダムスキーの体験の真実性を裏付ける証拠写真として最高の価値を有するものである。私がこの写真のコピーを片手でかざしながら探索するうちに全く同じ光景を示す場所に出くわしたのだ。

その反対方向の斜面の円盤の一部が着地していた場所にアダムスキーが立っていた写真もウ博士の本に出ているが、この位置も写真と照合して難なく発見した。以上が第二次調査の成果である。この詳細も本誌一〇五号に掲載されている。

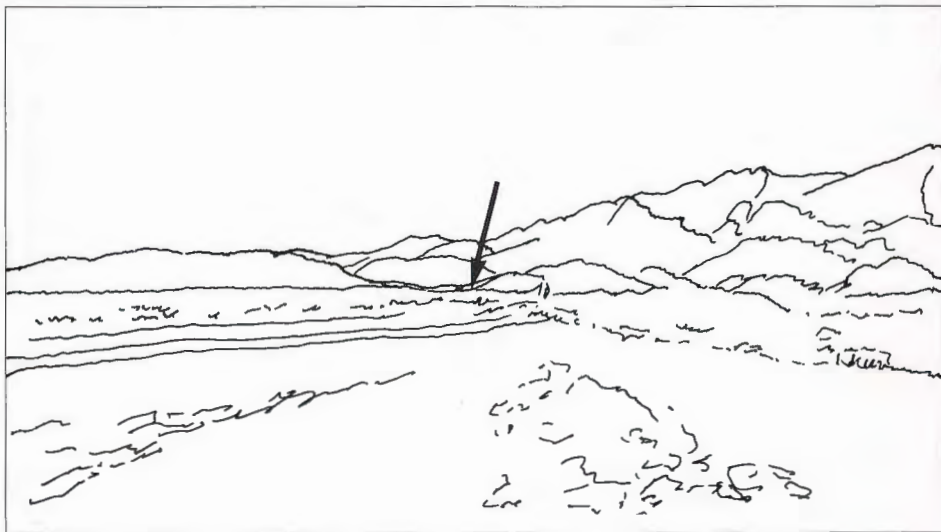
だが、アダムスキーがコンタクト直前に撮影した『馬の鞍』状の凹部に黒い円盤が機体を半分のみせた写真と一致する場所はどうしても見つからず、第三次、四次の調査でも不発に終わったが、失望はしなかった。私達は「信念の力、希望の力、絶対にあきらめない力」をアダムスキーの著書によつて学び、実践しているからだ。したがって発見するまでは毎年探索を続けようとして役員間で話し合つていたのである。



●デザートセンター (Desert Center)

撮影/久保田八郎 ウィスタ45 VX/フジノン 90 mm f8/フジクローム 100 Dプロ

下の図の矢印の位置がアダムスキーと金星人とのコンタクト地点。上の写真はパーカー街道の道路ぎわから撮ったもので、ここからコンタクト地点まで590 mある。



出発時からの予感的的中

そこで今年一月にまたも第五次の調査を決定した。同行者は前記の四名である。渡米に一月末をよく選ぶのは、この時期が一年を通じて団体の旅行費用が最も安いからだ。四泊六日の米西部までの往復航空運賃とホテル代は一人分合計一二万九千円。国内旅行より安い。これが八月になると同じ旅でも約三倍の三八、九万円にはねあがる。海外旅行の費用は年間不変でないこと



▲撮影中の久保田八郎 撮影/松村芳之

を知っておく必要がある。

一月二五日に勇躍成田を出発した一行は、ロサンジェルズでダニエル・ロス氏と合流して六名となり、ホテルのホリデイ・イン・ハリウッドを二六日早朝に出発。レンタカーのプリムス七人乗りワンボックスをしばらくロス氏が運転し、郊外に出てからは田中君が交替する。『UFO』宇宙からの完全な証拠(中央アート出版社刊)の著者であるダニエルは私の親友だから、彼がひとくちにデザートセンターといっ

▼砂漠地帯の一行 撮影/松村芳之



ても東京から名古屋へ行くほどの距離があるので、かなりの長丁場だ。何度走ったか知れない片側四車線のサンベルナルデイノ・フリーウェイを時速一二〇キロで疾走するのは快適だが『馬の鞍』が気になって落ち着かない。だが今回は出発時からかつて感じたことのない特殊なフィーリングがあったて、何かどえらいことが発生しそうな予感めいたものがあつた。そしてそのとおりになつたのである。

途中二度休憩して現地に着いたのは午前一一時頃である。もはやわが家の庭みたいに熟知しているデザートセンター一帯だが、一応アダムスキーの記事述に従ってガソリンスタンドから一マイルほどパーカー街道を歩き、さらに半マイル引き返して砂漠地帯へ入った。そして直ちに全員が写真を片手に馬の鞍の探索にはいった。

脱落した文章と崩れた岩山?

だが、アダムスキーの記述にはどうも腑におちない箇所がある。それは彼が最初に六インチ反射望遠鏡に手札判のイハゲー・ドレスデン・グラフレスという木製カメラを取り付けて半マイル彼方の高い岩山の窪みにいた円盤を撮影してから、次にブローニーカメラ



を取り出してその円盤を撮影したという部分だ。

彼が使用した六インチ反射望遠鏡は彼と親交のあったパロマー天文台の職員ジョンソン博士の母堂がアダムスキーに贈ったもので、母堂はアダムスキーの弟子であった。

この望遠鏡の焦点距離は不明だが、六インチ反射は大体に九〇〇ミリが多用されているので、そうだと仮定して、これに手札判カメラを取り付けたとす

れば、三五ミリカメラに換算して約四五〇ミリレンズを装着したのと同じになる。かなりの望遠だ。

ところがアダムスキーはその直後に、コダックのプロローニーカメラを取り出して『馬の鞍』の円盤を撮影したと述べている。このプロローニーカメラというのは戦前の昔、米コダック社が製造販売していた6×9センチ判のカメラの一つなのだろうが、当時は蛇腹付きの組み立てカメラからボックス型に至

▲上は一九五二年二月二〇日、アダムスキーと会見した金星人の足跡を石膏に取るウィリアムソン（右端）。下は今年一月二六日、同じ場所に並んだ調査団。遠い山脈の輪郭が一致している。左から加藤、松村、久保田、ロス、田中、篠。撮影 松村芳之



▶上は金星の円盤が接地した場所に立つアダムスキー。下は同じ場所を撮影した写真。山々の輪郭が完全に一致している。コンタクト地点より二〇メートル近く奥になる。撮影 久保田八郎

る多種類のものを出しており、ドイツコダック社からもテッサールレンズ付きのコダック・リージェントという優秀なプロローニーカメラを出していたから、そのどれを意味するのか不明だが、レンズ交換の効かない当時のプロローニーならばレンズは一〇五ミリの標準にきまっているから、そうだとすれば、このカメラで半マイル彼方の馬の鞍に機体を半分のみかせている円盤の写真を撮ることは不可能だ。コダックの写真はどう見てもすぐ眼前に展開している風景を撮ったものとは思えない。

そうすると、最初に望遠鏡で撮った『馬の鞍』とそのあとプロローニーカメラ

で撮った『馬の鞍』は別物でなければならぬ。つまり円盤は最初、はるか高い岩山の馬の鞍にいて、次に眼前の低い位置の別な馬の鞍へ移動したということになる。これは篠さんとロス氏の意見でもあった。この二人の説明はあとで掲げるので、それを読みたい。

以上のようにみると、アダムスキーの記述には何行かの脱落した箇所があるのではないかとというのが私の持論であった。つまり円盤は最初、半マイル彼方の高い岩山の馬の鞍にいて、それをアダムスキーが望遠鏡で撮った直後に、今度はすぐ眼前の別な馬の鞍まで

降下して停止したところをコダックで撮ったというスジにならねばならない。その所の文脈が途切れているような印象を受けるのだ。何かの都合によって出版社が文章を削ったか、またはアダムスキーが削除したかのいずれかにちがいない、としか思えないのである。

大体にアダムスキーのコンタクト時には想像を絶する光景が展開したらしいが、これについては彼の著書に書いてないのである。このことはウィリアムソンが生前そのことを私にほのめかしていた。別な情報筋によると、コンタクト時には上空に数千機の円盤が出現したと伝えられている。これは二千年前に地球でイエスと呼ばれた人が転生を経て金星人としてデザートセンターへ飛来したのであり、昔、ゴルゴタの丘で彼を最後まで救出しようとしたヨハネが同じく転生を経て今生でアダムスキーという人になって、その二人が二千年ぶりにデザートセンターで再会したというので、それを祝福して上空に無数の円盤が出現したというのである。

六名の目撃証人達は当日の凄まじい光景を知っていながらすべて極秘にしてこの世を去つたらしい。アダムスキーが重大事を秘したのは宗教界からの攻撃を警戒したからだろう。

さて私達は日が落ちるまで懸命に探索したけれども、馬の鞍を発見できず、翌日を期して引き揚げた。といつても

ロサンジェルスまで引き返すわけにはゆかぬので、車で五〇分のアリゾナ州との州境にあるブライズという町で宿泊した。ここは以前にも来たので様子は分かっている。モーターシックスの大きな部屋を借りて一人一泊二ドル(二七〇〇円)。東京のホテルに比べればタダみたいなものだ。その他物価の安いことは話にならない。この夜は田中君の部屋に集まってロス氏を囲みワインを飲みながら愉快に語りあったがこれは最高に楽しいひとときだった。

葉巻型大母船が出現!

翌日もデザートセンターへ飛ばす。雲一つない快晴。砂漠地帯は温かく、摂氏二四度。日本の五月上旬の気温だ。またも手分けして馬の鞍を探索する。一同真剣に歩き回るが、なかなか見つからない。

午後一時半頃に車の所へ集まって昼食をとる。私は腹がすかないので水だけを飲む。大砂漠のど真ん中で碧空を

仰ぎながら大宇宙瞑想を行なうと爽快この上ない。心身ともに宇宙に溶け込むようなフィーリングがわきおこる。

このときフト双眼鏡を出したくなってきた。ピクセンのダハプリズム付き八倍二〇ミリの小型ポケット用だが、性能は優秀である。

以前の探索では双眼鏡をバッグに入れていながら全く使用しなかったのに、なぜか取り出して胸にぶら下げたのだが、これがまもなく絶大な威力を発揮することになった。



◀上はコンタクト直前のアダムスキー(右)と助手のルーシー・マクギニス。下はルーシーと同じ場所と思われる位置に立つ篠(左)と加藤。徹底的な調査の結果、同時刻の日照角度とバックの地形から見、上の写真の位置はここしかないと断定した。上の写真はアル・ペイリーが撮影。

撮影：久保田八郎



食事後、一同は探索を再開。写真片手にしきりに歩き回る。

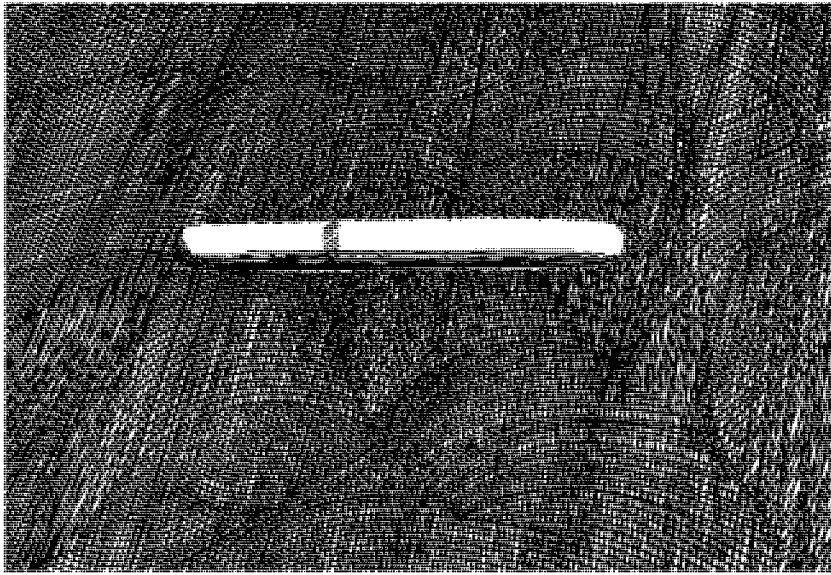
「今回見つからねば、わしは切腹ものじや」とつぶやくと、「そのときは私が介錯（かいさく）しましょう」と加藤君が軽口をたたく。

「でも刀がないなあ」

「円盤から落としてくれるとよいですね」

こんな冗談も言えるほど一応リラックスはしていた。

二時少し前に私のカメラバッグと取り杵（フィイルムホルダー）その他の雑品を入れたバッグがおいてある場所へ



▲1992年1月27日午後2時3分、デザートセンター上空に突如出現した巨大な宇宙船。左の西方から右方へ進行。久保田が8倍双眼鏡で観察した結果、翼がなく、胴体の中央より少し後方の位置に縦に黒いスジがついていた。他の4名（田中、ロス、篠、加藤）もこの物体を目撃したが、証言内容は一致している。イラスト／久保田八郎

行ってみた。ここはアダムスキーが望遠鏡とともに座り込んでいる場所である

ことを私が写真により実証したので、加藤君がその場にバッグをおいていたのである。

ここには篠さんが立っていて、馬の鞍はどうもあれらしいと言いながら、前方の低い岩山を指さして他の人達に説明している。

一見、アダムスキーの写真の丘とは輪郭が相違するが、篠さんの説明によると、岩自体がかなり崩れたために地形が変わっているという。写真中に見える左側の黒いバンク（斜面）も雨による鉄砲水のために地形が大きく変化しているのだろうと言う。

ところで午前中はこの上空を飛行機は全く飛ばなかったのに、午後は頻繁に戦闘機が長い白雲を吐きながら飛び交う。日課の訓練なのだろうと気にせずにはいたが、これが実は重要な意味をもつことが分かってきた。

二時過ぎ、左方にいた加藤君が叫んだ。

「あれは何ですか？」

「あつ、おかしな物体だ」一同口々に叫ぶ。

「何？ 何だ？ 見えないぞ。わしは目が悪いなあ」

だが、私もすぐに肉眼でキャッチした。急いで双眼鏡を取り上げて観測する。

見ると、丸みを帯びた白く輝く非常

に細長い物体が、仰角四五度ないし五〇度の碧空を西から東へ飛んでいるではないか！ その左下の離れた位置に一機の戦闘機が飛行機雲を残しながら並行に飛んでいる。

物体には翼がない。長い胴体の中心より少し左寄りのあたりに、縦に黒いスジのようなものがついている。尾翼らしきものも見当たらない。

「やーっ、母船だ！」

一同は双眼鏡を目から離さずに騒ぐ。物体は戦闘機よりもうんと上方を飛んでいるのに、はるかに大きいから、よほど巨大な物なのだろう。

このUFOは二時三分から六分まで約三分間見えていたが、やがて右手から別なジェット機が物体の方へ飛んで来たとなんに不思議にも消えてしまった。

ところが後に加藤君が話したところによると、昼食前に彼はこれと酷似した物体が無音で飛ぶのをもっと大きく見たという。そうするとこのUFOはすでに上空に来ていたのだろうか。

篠さんが馬の鞍はここだと説明していた頃に、田中君が「この場所がそうなら、なにとぞサインをみせて下さい」と上空にテレパシーで想念を送ったところ、まもなく物体が出現したのだという。

大体に昼頃からしきりに戦闘機が飛び交うようになったのは、同一のUFOがたびたび上空に出没するのを付近

の空軍基地のレーダーがキャッチしてスクランブルをかけたのではないかという気がするのだが、これは一同の意見でもあった。こうまで戦闘機が乱舞するのはただ事ではない。

一同は欣喜雀躍した。ついに母船が出現した！ 別な場所にいた松村君を除いて五名全員が目撃し、うち四名は双眼鏡で確認した。加藤君だけは眼視観測である。ロスさんまでが「翼がなかった！」と興奮気味に言っていた。

田中君のテレパシーに応じて出現したとすれば、私達がかたまって立っていた場所はアダムスキーが撮影した場所であり、篠さんの言うようにその場所からすぐ北方に見える低い岩山が馬の鞍と関係のある山なのだろう。この件はロスさんの写真説明を参照されたい。

馬の鞍の丘が崩れてく？

篠さんの言う馬の鞍に相当する丘は、多年何かの理由によってかなり崩れており、アダムスキーの撮った写真と一致する輪郭は大まかな形を残すのみという。ここは砂漠地帯といってもアフリカのサハラ砂漠のような美しい微細な砂の海ではなく、固い地面に石ころが散在し、あちこちに低い灌木が生えている、どうしようもない不毛地帯だ。しかもときには雨が降って鉄砲水が出ることもあるので注意せよという

▼上はアダムスキーがコンタクト直前にコダックのブローニーカメラで撮影した「馬の鞍」状の部分に、黒い円盤の機体が半分のぞいている光景。下は1月27日に撮影した写真。中央の小高い丘がかなり崩れていると結論づけた。この撮影位置はアダムスキーが望遠鏡のそばに座っている場所と思われる位置。アダムスキーは望遠鏡のそばから立ち上がり、もう少し左前方へ歩いてからコダックカメラで撮影したと思われる。撮影/ダニエル・ロス



標識がどこかに出ていたのを以前見たことがあるので、あるいは四〇年間に度重なる鉄砲水によって地形が変化したのかもしれない。だからあちこちに小さな川の流れの跡が残っているのだ

ろう。

だがもう一つの可能性がある。それはアダムスキーが第一著を出して、これが全米で有名になったとき、このデザートセンターへ連日数千の人が押し

かけて、そのために飲食物を売る屋台店まで出たという話がある。その見物人達によって丘が荒らされ、岩石などがひっくり返されたと考えられなくもない。そうなると丘の輪郭も変化する

だろう。正確なコンタクト地点はウィリアムソンが著書を出すまでは誰にも分かるはずはない。手がかりはアダムスキーの第一著の馬の鞍の写真だけだ。これを手にした群衆が似たような地形の丘に登って踏み荒らせばどうなるかは想像に難くない。

だがデザートセンターと呼ばれるこの地域、すなわち厳密にいうと、ガソリンスタンドからパーカー街道を一〇・五マイル行った所で車を降りて、そこから山側へ五九〇メートルはいった低い丘の斜面の裾の砂地が、一九五二年一月二〇日のアダムスキーと金星人の歴史的な会見地であることは絶対に間違いない。五回に渡る調査で断言できることである。

海面の不思議な現象

私達は一月二九日に予定どおりロサンジェルスからシンガポール航空機で帰途についたが、約一時間後、サンフランシスコ沖合の海上に異様な現象を発見してまたもひと騒ぎ起こした。海面に物凄く長い黒い影が映っているのだ！

当初は海中に何かの突起物があるのかと思っただが、その長い直線状の影は私達の旅客機と等速度で移動しているのである！これはかなり長時間見られた。

やがて旅客機は海面の大半が白雲で



▼ダニエル・ロス氏による見解 Comment by Daniel Ross

下の写真中、アダムスキーは最初①の地点にいて、ここからコダックカメラで『馬の鞍』の写真を撮った。その後②の位置に金星人が現れて手招きした。そこでアダムスキーはそこまで歩いて行って、そこで長時間テレパシーによる会話を行ない、オーソンは地面に足跡をつけた。これはあとでウィリアムソンが石膏にとった。それからオーソンとアダムスキーは④の位置の丘の裏の斜面に停止している円盤の方へ歩いて行った。円盤は丘の斜面に対してフランジの端を着けているだけで、機体の大部分は空間に浮かんでいた。 撮影/ダニエル・ロス



覆われている地域にさしかかったが、今度は雲の表面にその長い影が映っているのだ！これは絶対に飛行機の影ではなくて細長い物体の影であり、し

かもその長さは数十キロに及ぶものである。一体、何なのか？謎は深まるばかりであった。高空にいる母船が特殊な方法で海面に巨大な影を拡大投影

したのであろうか。他の乗客は気づいていない。目撃したのは我々だけである。後日秋山真人氏に写真を見せたら、針型大母船の影ではないかと言っていた。

▼サンフランシスコ沖合の海面に写った不思議な直線状の黒い影。飛行機と等速度で移動し、雲海でもしばらく黒い影が見えていた(下)。突き出ている半島はレイズ岬。 撮影/松村芳之



雄大なアメリカに足を踏み入れてから二日目、デザートセンターで、『馬の鞍』の調査にはいった。まず田中淳氏と二人で『第二惑星からの地球訪問者』の記述にある砂漠の調査箇所周辺を巻尺で徹底的に実測した。それからアダムスキー撮影の写真を手に、合致する地形を捜したが、夕方になっても発見できず、その夜はアダムスキーゆかり

付記 今回の調査行にはきわめて意義深いものがあつた。全員が一致協力して誠実に行動し、和気あいあいたる雰囲気の中にも真剣な決意がみなぎっていた。想念レベルにおいて完全に一体化していったといえるだろう。

私は今回、4×5インチ判大型カメラを携行したためにカメラバッグだけで重量は一〇キロ近くになり、その他の荷物類で身動きできぬ状態だったが、全員が手分けして担いでくれたために大助かりした。人間の善意と奉仕精神の尊さをあらためて実感した次第であ

る。

一方、同行の諸君は英語の重要性を痛感したと言っていた。だが一同はあちこちである程度英語で用を足していたから一応勉強はしてきたらしい。必要にせまられるとやる気を起こすものだということを感じた次第。

また、UFO問題を本格的に研究するには光学機械に関する高度な知識をもち、あざやかに使いこなす技術を習得することも大切だと思う。アダムスキーも望遠鏡、カメラ等の光学機械操作の大ベテランであつたからこそ、あ

れだけの証拠写真を残すことができたのだ。ただし私は今回の母船出現時に撮影する余裕はなかつた。双眼鏡で追跡するのが精一杯だったからだ。

そして最重要なのはテレパシクな直感力である。上空から送られるテレパシーを感知する能力は絶対に必要である。私はこれによつて数年前にコンタクト地点へ導かれたと信じている。

まだ説明したいことは山ほどあるが、紙数が尽きたので同行諸君の手記を掲げることしよう。これは到着順に掲載したもので順不同である。

『馬の鞍』の発見

② 篠 芳史

このたびのデザートセンター第五次調査で久保田先生に同行させて頂いたが、大変素晴らしい有意義な成果があり、私達日本GAPのメンバーが先生のご指導のもとにアダムスキー哲学を学ぶことの重要性とその誇りを痛感した。

今までの調査には毎回参加させて頂いたが、新アダムスキー全集第一巻『第二惑星からの地球訪問者』の巻頭に出てくるアダムスキー撮影になる山の『馬の鞍』状の部分にスカウトシップ(円盤)が半分見える写真と一致する場所がどうしても発見できなかった。

今回私は大変リラックスしていたし、今年も新年になってから充実した気分になり、一月八日の夜は心の暖まるような光体を見たので、デザートセンターでは必ず素晴らしい出来事があると確信していた。

のプライズに宿泊した。

翌三日目、一時過ぎにデザートセンターに到着。この時間はアダムスキーが撮影した時間と最も合致した時間として重要である。まず写真の影を分析、理解し、その影と合う方向を決め、その方向を向きながら並行移動した。

すると、昨日距離測定した或るポイントに来たとき、大変写真に似た位置に出会った。その場所は今までに何度も注目された場所であったが、山のカーブが多少違うために首をかしげながら通り過ぎていた場所である。しかし念のため他の場所を歩き調べても影が合う場所はここだけである。ダニエル・ロス氏が来て、写真と景色の両方を示し、「写真の右上の部分は遠い向こうの山で、写真の中央全体は手前の丘である。写真のフォーカス（ピント）が違う」と言った。私は片言の英語の単語をつなげながら二人で写真と実際を比較確認し、次のような結論に達した。

●アダムスキーが写真を撮影した時刻はほとんど同時刻である。影の方向は一致している。

●写真のフレームには入っていないが、アダムスキーの言う「半マイル彼方の馬の鞍」は右上の部分である。

●写真のスカウトシップの位置の真下は金星人とアダムスキーがコンタクトしたとき、スカウトシップが着陸していた場所である（着陸場所はすでに確

認されている）

以上の意見はロス氏と私の二人共一致した。早速久保田先生に報告し、先生も納得された。

正午を過ぎて昼食を済ませたあと、再度写真と景色を確認し、フレームをはずれて写真に写っていない部分の馬の鞍にそっくりな山の形を見て久保田先生がうなずいた瞬間、葉巻型大母船が出現した！一瞬、体の内部から歓喜が噴出したような感じを受けた。

真つ青で雲一つない大空に、一機のジェット機と並行に飛ぶ巨大な物体がある。肉眼でもはっきり見える。細長く銀色に輝く大母船であった。双眼鏡ではつきりと確認できた。もちろん翼はなかつた。後にビデオカメラで録画したときの時間を見ると、二時三分から六分頃までの三分間であった。しかしビデオカメラはオートフォーカスにセットしてあり、青空にピントが合わぬために物体を捕らえきれなかったが、皆の喜びに満ちた感動の声は録音されていた。

前方にバームスプリングズの町を見ながらロサンゼルスへ向かっていた午後四時二〇分頃、丸い大きなオレンジ色の光体を田中氏と見た。二人とも円盤であったと確信した。

一月二十九日、ロサンゼルスを出発して帰途についた。二時一七分頃、サンフランシスコ湾が見えてきたとき、海上に細長い巨大な棒のような黒いもの

が見えた。私達の飛行機と等速度で移動している。一見、海中にある物体が潜行しているように思えた。その状況が約一〇分間継続してから二時二八分、進行方向の海上に雲が一面に立ちこめて、黒い棒は見えなくなったが、数分後、全く同じ大きさの黒い影が今度は雲海にシルエットとして再び現れた。飛行機の飛行速度から推測して計算した結果、長い影は約二〇キロ以上もあり、幅は二〇メートルぐらいと思われた。

「馬の鞍」については久保田先生がいつも「ここにそれは必ずある。われわれは何か基本的なことを見逃しているのではないか」とおっしゃっていた。地形の変化については、毎回デザートセンターを訪れるごとに微妙に変化していることが分かった。アダムスキーが写真を撮影した位置を特定できると「第一惑星からの地球訪問者」の文章がすべて現地と合ってくる。大母船が現れたのは、現地ですべての再確認をし、久保田先生がうなずかれた瞬間であったことを強調したい。田中淳氏は「この位置が正しければサインをお願いします」と想念を送っていたとのこと。この大母船出現は久保田先生の「信念と希望と忍耐」の大成果であり、その祝福にご一緒させて頂いていると思うと、その瞬間、大感動した。

決してあきらめないで追求を続けるならば、いつか必ず報われるのである。

アダムスキー哲学の応用

③ 加藤純一

一月二七日快晴。デザートセンター二日目。二時三分頃のこと。最後の謎であった馬の鞍状の写真を写せるポイントを探していた一行の上空に母船が現れた。そのポイントについてはそれまで半信半疑であった私には彼らの声がなくとも聞こえたように思えた。「よく見つけましたねー」と。

私はその時出現した母船と同じだろうと思われる物体を四〇分ほど前に目撃していた。原著の写真の中で円盤着陸跡に立っているアダムスキー氏の背後の山の上空である。二時に一行が目撃したのと同様白い胴体に黒い縦線が入っている。かなり大きく見えたので今でも強く印象に残っている。近くにいた松村氏を呼ぶともう見あたらない。その間ほんの数秒。北東からやってきたように思った。松村氏に話すと氏も私とは別な場所と同じような体験をしたとのこと。とにかく二時には皆で確認出来たので大きな確信と喜びをわかち合えた瞬間でもあった。

また、今回の調査では馬の鞍状のポイントと同時にアダムスキー氏が望遠鏡と共に座っているポイントも確認出来た。これはこの地にこの調査だけで五度も足を運ばれた久保田先生の集大成とも言える発見であると思う。先

生、本当におつかれ様でした。一日中あの砂漠の中を重いカメラを持って歩くのは体力のいることである。私も実感したし、逆にいつか一人でも来てみたいとも思った。

さて、この日三度目の目撃はロサンゼルスへ向けて帰る車中でのこと。眠っていた私が起きて前方を見るとオレンジ色の光体が出現していた。五時頃のこと。高速で進行中だが結構良く見える。三分ほど前にも出現していたらしい。

夜は一行の最高の笑顔を見ることが出来た。先生も五回の調査中あんな母船が出現したのはこれがはじめてだとおっしゃっていた。明けて二八日ロス氏と別れる。名前を覚えて下さってありがとうと英語で話したかったが言葉が出ない。力強く握手を交わして笑顔で見送った。その日は一日観光。例のクラークホテルへ行ったりした。カラツとした気候が私の肌に向う。

二九日、一行はロス空港へ。一〇時二〇分頃、町の上空にグレーのボールを二つ並べたような物体を発見。松村氏に知らせるがもう見えなくなっていた。パスとは反対方向に飛んだ。どうも私はタイミングを計るのがヘタらしい。飛行機が無事飛び立ち私は一時間ほど眠っていた。その間私は夢を見ていた。私の横に黒いUFOが一機飛んでついてきているという内容である。起きてみて不思議に思い窓から外を眺

めるとそれらしき物体は見あたらない。アメリカ大陸とサンフランシスコの海が美しく見える。

ふと海上を見ると長細いはつきりとした影がびつたりと並行してどこまでもついてきている。時計を見ると二時一〇分。松村氏も私とは別に早くから気付いていたとのこと。どうやら母船の影らしいということになってよく見ていると確かに先端部分が少し細くなっている。厚い雲の中でも見えていた影だが三時三三分頃、先端部がオレンジ色に輝いてからスツツと見えなくなっていた。「私たちはもう帰りますよ」というサインだったのだろうか、その後東京に着くまで誰も目撃していない。

さて以上が私の体験してきた事柄であるが、UFOの目撃の背後には先生のもとで学んでいるアダムスキー哲学の応用が重要な位置を占めている。

上空のことばかり気にしようとする心と、目的を忠実に果たせという二つの声を聞きながらデザートセンターを歩き、それでも心をうまくコントロールしようとした結果、より大きな成果を得られたのだと確信している。

今、こうして今回の調査を思い浮かべると私の意識と肉体は日本という一国家から地球レベルへと広い視点と体験をバランス良く吸収し歩み続けているような気がしてならない。そして私は、これから日本人としてまた地球人

として何を為すべきか、どうあるべきかを考えさせられた。あのきらめく母船の人々のように私もつねに前進してゆこうと思っている。



◀デザートセンター上空の宇宙船。焦点三五ミリのコンパクトカメラのため、物体は小さな白点にしかならなかった。矢印がそれを示す。撮影/加藤純一



海面の不思議な光景

④ 松村芳之

今回の調査行での収穫は、久保田先生にとつても、同行の私達にとつても大豊作であった。すべてが成るべくして成った。先生の信念と努力の賜物である。参加させて頂き感謝致します。

私は一九八八年一月の第一次の調査行に参加し、今回で二回目である。前回は円盤がタッチダウンしてつけたと思われる不思議な曲線を目撃し驚愕した。今回はなんとそれを凌ぐ出来事がおきてしまった。それにしても報告したい事が沢山ありすぎる。

夢想だにしなかった出来事は、調査行最終日の成田に帰る機中で起きた。

シンガポールエアライン機がロサンゼルス空港を定刻に飛び立ち、私達は帰途についた。私達の座席は後部右側の禁煙席で、六一のH通路側は久保田先生。右隣が篠さん。また右隣で窓側に淳さん。その前の座席窓側が加藤君。加藤君の左隣で篠さんの前が私。私の左隣の人は出発してまもなく他の席に移り空席となった。

四〇分程してから。まうしろの篠さんが私の肩をトントンと叩き窓の外を指して、「あれがゴールデンゲートブリッジだよ」と教えてくれた。見るとちょうど窓の真中にゴールデンゲートブリッジが見え、上のサンフラン

シスコ湾に浮かぶ島や、下半分の太平洋側がライトブルーからコバルトブルーに海面の色が扇状に変わっているところなどがとても奇麗である。

そこで傍らに準備しておいたカメラで四カット、構図を変えながら撮影。そしてふと下の海面に目を移すと、どのように表現すればよいのか一瞬考えでしようもの？があつたのである。それは黒く飛行機雲の様にとても長く、先端部分は私達の機の右主翼なめ下にある。しかも後ろ部分が窓枠からみでてまったく見えない。とてもな長く長いものである。すぐさま隣で寝ている加藤君を起こし「あれ、なんだろう？」と物体を指し、一緒に観察してみる。始めはテトラポットなどで出来た岩礁なのかと思つていた。しかし遠方のピーチラインがどんどん遠ざかつて行くのに、それは私達の機と同じスピードでまったく平行に移動しているではないか！先端部分はやはり右主翼なめ下。後ろの篠さんと淳さんに伝え、篠さんは久保田先生に伝える。「あれはまさしく私達の待ち望んでいるものなのではないか！」という思いと胸の高鳴りを何とか押さえながら、自分の思い至る否定事項を当てはめようと皆が口々につぶやく。「岩礁でないとすれば私達の飛行機の影なのだろうか？」「しかし機影だとすれば胴体と十字になる翼の影がつくはず、こんなに長いはずもない」「潜水艦なのだろう

か？」「それにしても、やはり長すぎる」だんだん否定材料がなくなつてくる。とともに嬉しさが込み上げてくる。

進路方向より雲海が迫ってきた。これでの不思議物体の謎が一つ解ける。雲の下のものなのか、上のものなのかである。ちょうど雲にさしかかり、それとともに影は消えていった様に見える。ジーツと影があるであろうラインに目を凝らす。「見えた！影が薄く見え始めた。下の物体ではなかつたのだ。そうなる答えは限りなく「母船の影」「スペースブラザー側の操作による映像」となる。絶対にこれしかないと思ふが確信。興奮が醒めやらない。影は雲海に入つてから、約七分程で見えなくなつた。加藤君が言うには消える時には頭の部分の両サイドがオレンジ色に光つたという。目撃は午後二時一五分頃から約二〇分位。気付いていたのは私達だけの様である。この間なんとも形容しがたい温かみのある振動数の高い波動に包まれていた気がする。感謝の気持ちに放射し、このフィーリングを忘れないようにしまひ込む。今後使用するキーナンバーに思えたからである。

後日、写真が出来上がりチェックすると三二カットに影が認められた。地図と照らし合わせ長さを測ると二〇km以上あることが解る。速度はジャンボと同じ時速九〇〇km〜一〇〇〇km前後と思われる。

正解だった調査行

⑤ 田中 淳

「デザートセンターでお待ちしていますよ！」とスペースピールのAさん。「ピンポン（正解）ですよ！」とスペースピールのBさん。

「まだ信じられませんか！」とスペースピールのCさん。

AさんBさんCさんは同じ方かも知れませんが、今回のデザートセンター訪問には少なくともスペースピールの方々の暖かい三つのメッセージがあつたような気がします。

今回のデザートセンター訪問では私には強い味方が居りました。水戸黄門の印籠のように安心感を与えてくれる大きな存在の久保田先生（デザートセンターへは日本人として十数回の最多訪問者）、堂々の参加五回目パーフェクトの篠さん、だいたいなところのまとめ役松村さん（二回目）、いろいろな意味で鋭い加藤君（二回目）、日本酒の大好きなロスさん達です。

自分（二回目）を加え総勢六名が今回のメンバーです。

アメリカ人は本当にリラックスの名だとも随所で感じさせられました。私達一行もアメリカ人に負けず劣らず本当にリラックスした雰囲気終始包

まれており、しかも今回の訪問はリトル東京で食べたあのビッグなかつ丼のような盛り沢山の成果がありました。また今回の訪問にはアペリティブもありました。

それはUコンー一六号発送の日(一月二〇日)の午後七時三〇分頃、京葉高速道路上の走っている車の中から前方方向に久保田先生が光り輝く謎の光体を発見。そしてその光体が何なのかと話をしているうちにパッと消えてしまったのです。

今回の訪問の日時が迫っていたので「デザートセンターでお待ちしていますよ!」というサインとも考えられませよね。

今回確認された二つの地点(通称「馬の鞍」の写真の地点とその写真を撮ったと思われる地点)は一月二七日現地では二日目に、様々な条件の合致から久保田先生を中心に確認されました。

いままでの「馬の鞍」の写真に対する一般的な理解は、「UFOの写っている馬の鞍のあの写真にソックリの地点があるはずだ」ということでした。しかし現地でも本文と写真を交互に見比べて見ると、あることに気づくのです。UFOが写っているあの地形は馬の鞍の形にあまり似ていないと思いませんか。似ていないとすると、何故アダムスキー氏は馬の鞍と呼んだのでしょうか。

確認された二つの地点の裏付けにつ

いて、私なりに考えられる数点のポイントがあります。その第一は本文(第二惑星からの地球訪問者)の次の記述上の解釈にあります。

「空中の一つの閃光に注意を引かれた。するとほとんど同時に一機の美しい小型飛行物体が、山の二つの峰のあいだのサドル(馬の鞍の部分)の中で浮かんでいるように見えて、私から八〇〇メートル離れた谷間に、無音のまま落ち着こうとしているように思われた」

アダムスキー氏が写真を撮ったのはこの後である。

「素早く私はそれを望遠鏡のファインダー内でとらえてできるだけ早く七枚のフィルムに撮影した。」

次にプロローグ判カメラで何が撮れるかやってみようと思った。最初の写真(口絵参照)を写したとき、円盤が強くきらめくとも動いて、最初に来たサドル部の上空に消えてゆくのを見た」

確認されたあの写真を撮った地点(この時点ではまだ確認されていない)から、写真のUFOが写っている地形を良く見ると、その右側に馬の鞍状の地形があるのに気付くのです。この地形のほうが馬の鞍と呼ぶのにふさわしいほど馬の鞍の形をしているのです。あの写真を良く見て下さい。写真の右側の方にボケて写っている山があるのに気付かれると思います。馬の鞍の形に似ていると思いませんか。

そして本文からは写真に写っているUFOは馬の鞍状の地形の上に居たときに写ったものではないと解釈することも出来ますね。

つまりアダムスキー氏が写真を撮った時点はUFOが馬の鞍状の上にはいた時ではなく、馬の鞍状の所で見え隠れしていたUFOが谷間に無音のまま落ち着こうとしていた時の写真だと言えるのです。

そう考えてみると、写真の中でUFOの写っている位置だけでなく、右側の馬の鞍状の山も重要だと言えますよね。

確認された地点から見た馬の鞍状の山と写真の馬の鞍状の山(ボケているので山がハッキリしないが)が良く似ているのがわかると思います。

第二のポイント。この写真を撮ったと思われる地点からコンタクト地点の方向を見ると、

本文の「突然私の夢想は破られた。約四〇〇メートル前方の、二つの低い丘のあいだにある谷の入口の所に立っている一人の人間に注意を引かれたからだ」というオーソンが立っていたという二つの低い丘(コンタクト地点のソバ)があり、ピタリ本文の記述と一致するのです。

しかもこの位置をヘタに移動してしまおうとオーソンが立っていたという位置が見えなくなってしまう、この位置

は本文の他の記述に対しても矛盾することは無いのです。

第三のポイント。また馬の鞍(サドル)という言葉にはアダムスキー氏の考え方の嗜好があるようです。

というのもロス氏がデザートセンターへ向かう車の中で、アダムスキー氏の写っている写真を指しながら「カウボーイブーツ」と一言。写真を良く見ると、アダムスキー氏がカウボーイブーツをはいて写っているのです(本誌一六号)。たしかカウボーイハットをかぶっているアダムスキー氏の写真もありましたよね。

ここで篠さんが「アダムスキー氏はカウボーイが好きなんだよ」と鋭い一言。

また先生に馬の鞍の言葉の由来を尋ねたところ、先生は原文で「サドル」と書いてあったので「馬の鞍」と訳されたとのこと。さらに山の尾根の形状をサドルと英語では言うのですかと尋ねたところ、そのようなことはないとのこと。

ということとは、「サドル」とアダムスキー氏が書くかと思うにはサドルに似た地形がなければならぬのではないのでしょうか。

そこで「サドル」をコンタクト地点の目印にしたほうが良いとアダムスキー氏が考えたのではないのでしょうか。他にもまだまだポイントがあります。その中で最後の決定打。



▲『第2惑星からの地球訪問者』144頁に述べてあるロサンゼルスのホテルというのは、ヒル・ストリートにあるこのホテルを意味する。内部はすでに解体されているが、外観は昔のおもかけを残している。
撮影 久保田八郎 (1月28日)

今回確認された写真を撮ったと思われる地点について、久保田先生は「その場の全員が『ここなのか』『ここでないのか』」と思いを巡らしていた時、

突然、米空軍だと思われる戦闘機が三機、「何かに対してのスクランブル(緊急発進)かな?」と思われる様に、アクロバット飛行で「馬の鞍」の後ろの

山の峰々をハイスピードで通過するのを目撃。

そして再度思いを巡らせながら「今回だけはゼイタクを言わせて下さい」「白か黒を付けて下さい」「ここでいいんですか?」とあの地形を見ながら強く思ったんです。

そして、その時(午後二時過ぎ)丁度、加藤君が母船らしき細長い飛行物体を発見。久保田先生、篠さんと共にその物体を双眼鏡で観察、「物体には翼がない」とおもわず興奮。ロスさんも「ノーウイングズ」と大きな声。

これは「ピンポン(正解)ですよ!」とスペースピープルのBさんからのメッセージだと思えますよね。

またあの写真の真焼きの可能性はない様ですね。同じ時間帯での写真の影の位置から確認されました。(篠さんが確認)

また今回の地点から見た地形は写真とそっくりとは言えないのですが、オゾンが立っていた低い丘の反対側の丘に篠さんと一緒に登ってみて、その地形の浸食の進行が激しいのが良くわかりました。数年単位でもその違いがハッキリ分かるぐらいですから、四〇年という年月でのその違いは大きいですよね。

馬の鞍の写真の右背後の尾根の稜線と本当にピタリ一致するように撮影できる地点が今回の地点のすぐそばにあると思えるのですが、時間不足で見

つけられなかったのがチョッピリ残念でした。

東京へ向かう帰りの飛行機の中でもすごい光景が見られました。それは、あの地点で見た母船について「もう少し近距離に見えればもっと確かなのになあ」と思った矢先に、松村さんがサンフランシスコのゴールデンゲートブリッジの手前の海面に非常に長い影を発見。それも飛行機と平行して移動しているように見える。篠さんが機内から目測してみると約二〇km位あるとのこと。その影はその後一時間以上も見えており、しかもその影が消える最後には、その影全体が太くなり、影の先が母船の形そっくりになりやや細くなって見えた。しかも加藤君がその影の先がピカッと光った所を目撃したそうである。

「まだ信じられませんか!」とスペースピープルのCさんからのダメ押しメッセージとしか思えない出来事でした。

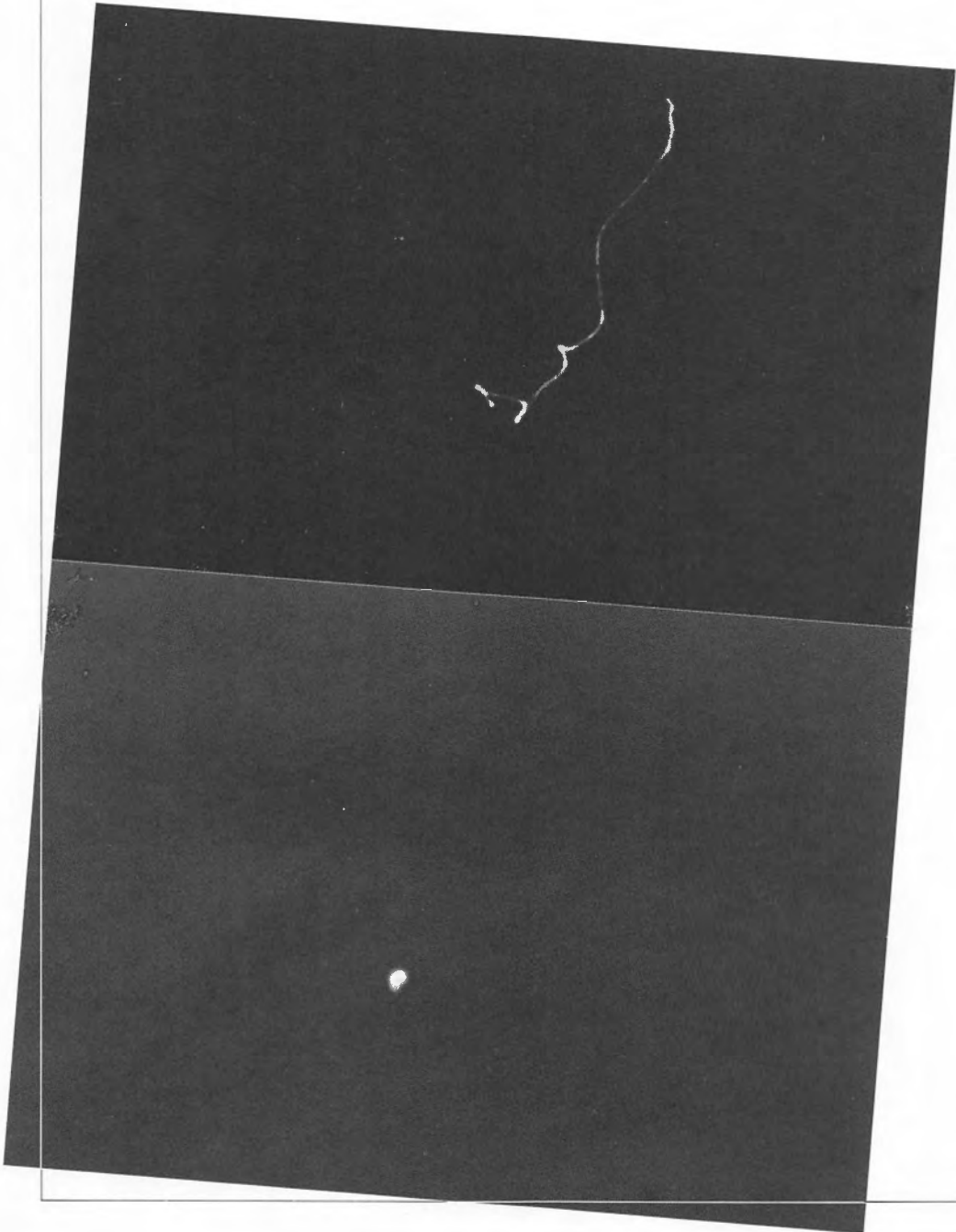
今回、四〇年前のあの歴史的なコンタクトのドラマのシーンを本文の記述通りに思い浮かべながら、そのシーンに自分が浸っているように思えて、同じ位置、同じ様な状況で時間を過ごすことが出来たことが本当に心地良かったと思っています。

UFO Over Nara / Photo by Tatsuo Yamaoka

奈良市上空のUFO

●1992年11月24日夜11:10から11:40にかけて、奈良市神殿町上空に出現した光体を同町に住む山岡龍夫氏が自宅ベランダから連続4枚撮影に成功。下の写真はその内の2枚。秋山真人氏の鑑定によると本物のUFOだという。原画はカラー。

コンタックス139クォーツ/タムロン200~500ミリ F5.6ズーム/上はフジカラーSHG1600、下は同400/三脚固定。レリーズ使用/絞り開放。シャッタースピードオート。
(報告=石田順次)



Space People Working to Save the Earth

by Makoto Akiyama

地球救済活動を続ける異星人

★秋山真人

連載第二回

前号のこの記事は最後が時間切れのため尻切れトンボになった。このため続きを望む声が多いため、あらためて秋山氏との座談会を開催して続編を掲載した。日時は本年三月一〇日、場所は都内新宿の喫茶店『ルノール』貸し会議室、聞き手は日本GAP会長久保田八郎と東京本部役員の内、八名(篠芳史、松村芳之、田中淳、岡部智成、加藤純一、安藤澄雄、越崎裕子、小宮明子)。

久保田 前号の最後のお話で宇宙船の重力場機関とエネルギー源についてお話が途切れましたので、その続きをお願いいたします。

秋山 基本的に言って異星人の動力機関は、もともと空間に内在しているエネルギーを取り出すんです。ある種のズレを生じさせて、そこからエネルギーを取り出すという非常に特殊な、まだ人間が開発していない技術を持っているわけです。その技術を使うと燃料庫がカラになるという形の物から、かなり飛躍した長距離の惑星間飛行が可能になります。

基本的には母船から始まって司令機、

小型円盤といういくつかの段階的な編隊構成になっています。彼らはこれを非常に効率的に駆使して惑星間飛行を行なっているわけです。

私達の地球にしても何百年前から動き続けていますし、太陽にしても非常に長いあいだ燃え続けています。この自然界に存在する原理をそのまま取り出して活用できれば、宇宙船の製作は可能になります。

ただ我々は地球上でエネルギー問題を解決してきましたので、地上におけるエネルギーの概念の枠の中でずーっと宇宙問題にしろ資源問題にしろ論じてきています。ですから何かをやるにあ

たって、その可能性が有限であるという所から発生した思想というものは、有限だと最初から思ってしまったという枠をなかなか超えられないという状態にあります。ところが異星人のエネルギー問題というのは最初から非常に広く宇宙的視野の中で開発が進められたために進化したのです。

ですから私がコンタクトした異星人というのは基本的には我々の文化と比較して大体四〇〇〇年ぐらいの差があります。その四〇〇〇年ぐらいの差のあいだに彼らはいくつかの概念的な限界を超えて、非常に広い意味でのエネルギー問題をクリアーしていると思います。

UFOの推進原理

久保田 異星人の宇宙船の推進原理について本当のところはどうですか。

秋山 私自身が実際に(宇宙船に乗って)確認したのは、ちょうどスズメバ

チの巣のようにハチの巣状の構造物がありましたね。スズメバチの巣というのは、ご覧になった方はお分かりになると思いますが、六角状の短いパイプが沢山組み合わされたような板状の物がいくつも重なっているわけです。それが一つの円形のコモのような物の中に入っているんです。宇宙船の動力機関の中核になっている部分というのはそれと同じような構造をしているんです。

その上部にはコントロールパネルがあり、司令室があつて、そこで作動のスイッチを入れるのですが、スイッチが入った瞬間にその六角形のパイプの中心部から光り始めて軽い振動音が聞こえます。やはりそれは何か空間からエネルギーを取り出しているのだという話を聞きましたが、私は物理系の人間ではないものですから詳しい事は分かりませんが、基本的には磁気を利用しています。

磁気の名前にも単極で存在する磁気があると彼らは言っているんです。磁気というのはNとSがくっつきあつてバランスをとると思われているんですが、しかし単極で存在する磁気があるというわけです。彼らはそれをその装置によつて空間から取り出すことに成功しているんです。その装置が作動し始めると、円盤の底部の方にその磁気の振動が伝わって、その振動をコイルに還元することによつて、簡単な言い



▲秋山眞人氏

撮影／久保田八郎

方をしますと、円盤全体が非常に微弱な共鳴を起こすんです。この共鳴現象によって飛ぶのだということです。原理的には短時間で物凄いスピードを瞬間的に出します。それと非常に加速した状態と停止した状態を短時間で何度もくり返すことによって、非常に遠い距離でも簡単に飛ぶことができるというわけです。ですから工学系の専門の方がおられたらその原理に関して何かのヒントがつかめるかもしれません。非常に高度なテクニクを応用していることは事実です。

久保田 彼らの宇宙船のスピードは光速を超えることができますか。

秋山 できると思います。ただし光の速度や性質などに関する彼らの観察や

認識は地球人の遠く及ぶところではありません。

UFOといわれる宇宙船の飛行原理については、光の性質自体に非常に重要なカギがあるのだそうで、彼らは光の性質をうまく利用しているんです。ですから光に関する観察や研究を進めることによって解明される部分が沢山あるのだと彼らは言っていましたね。

久保田 王様の「王」の字を縦にしたようなマークをつけたウンモ星人といわれるものについてはどうですか。あれは実在するのですか。

秋山 私自身はあの問題に関して異星人に聞いたことはないんですが、最近南米の方であの問題に関して、かなりハイクラスの学者がいろいろと研究しているという話は聞いています。

そういう方々が出版活動して、むしろでベストセラーになっているらしいですが、問題は、あのウンモ星人の話の中には最初に哲学が出てこないという点には私にはひっかかるんです。惑星の構造だとか宇宙はこうなっているとかいかにも我々の興味をおおるような即物的な話題はあの情報源から沢山出てくるんですが、そのウンモ星人のエイジェントだと名乗る人間が著名人などの所に情報を送り付けてくるんだそうです。しかし、どうも哲学がないというところが私は気になりますね。

本来、異星人の何らかの意図をもった啓蒙活動であるのならば、最初に哲

学があるのがしかるべき道筋であると思うんです。ですから別な何かの意味があつて、あのような事にこだわっている人達がいるんだと思いますね。今進行している宇宙問題とは別な意味があつてのことでしょう。

ゴルバチョフは異星人に会った

篠 最近、共産主義国のソ連が解体されました。またゴルバチョフ氏は大変な努力を重ねた人だろうと思いますが、この人と共産主義の解体に関して、異星人がどのように援助されたのか、その点はどうでしょうか。

秋山 実は旧体制の時代から旧ソ連国内に非常に発達したUFO情報に関するネットワークが存在していたんです。ソビエトのUFO研究の現場というのは、ある意味では科学アカデミーという科学者の集まりがあつて、そのなかでかなり自由に個々の科学者に研究をやらせて、そこから入ってきた情報を上の中核機関がいろいろな形で整理して吸い上げてゆくという体制が昔からあつたわけです。

その過程のなかでKGBなりゴルバチョフ国家首脳なりがそういう情報に関してかなり深い事まで知っていた事実があるんです。そのときのUFO情報の方のファイルの分け方というのは、国防上危機になるか、それとも危機ではないのか、という分け方です。

国家管理上それが非常に危険なものであると認識されれば、すぐに何らかの具体的な行動に及ぶということになります。それが危険なものでない限りは、とにかく隠し抜こうという姿勢が中心になつていたわけです。

ただペレストロイカ以降はそういう研究者達が個々に一般民衆に対して啓蒙活動をしています。それと同時にそろそろ国家首脳と異星人とのコンタクトに関する情報もいろいろ出てきつつあるんです。ゴルバチョフも具体的に異星人と接触はしたそうですが、スターリンは接触できなかったと聞いています。

兄弟のきずなの強さ

岡部 アダムスキーは、人間関係で親子よりは兄弟のきずなが重要であると言っています。具体的には転生の前後に兄弟のつながりはどういう影響を残しているのでしょうか。

秋山 それはいろんな意味があると思います。それについては二つ考えられますね。一つは人間というのは意識のなかにおいて親子のつながりが非常に強く刻み込まれています。それが後に大変な軋轢になる場合もありますし、その人を発展させる大きな起爆剤になる場合もあります。つまり潜在意識の力といったものが親子の愛情関係のつながりに非常に関連しています。

生まれたときに親子間の不幸な沢山の軋轢をかかえてくるようなカルマ的な状況があつて生まれてきた場合、それが非常に深い傷となつて残る場合があります。そうした場合に、それを開放できるのは親子に次ぐもう一つの愛情形態である兄弟(姉妹)、親類縁者などの関係です。

したがつて特殊な親によつて抑圧されたケースの場合には、兄弟(姉妹)からの愛情的援助がその人のカルマを切り替えるのに親以上の役割を果たす場合があるんです。そのポイントを考えてとアダムスキーの言つた意味は大さきと思ひますね。

UFOの色彩について

加藤 今、井の頭公園の近くでよくUFOを見るんです。大体に光体が多いんですが、そのほかに海外で見た母船タイプの物ですが、ただの光体ではなくて右端が赤色で、左端が緑とか青とか、移動しているときに先端がオレンジ色であつたりすることがありますが、それは宇宙船のタイプの差によつて推進原理が色に関係してくるのですか。

秋山 基本的には推進原理は統一されていますと思ひます。問題は先に言ひましたように光と母船の推進力との関係があるんです。基本的に母船がこのペンのような形をしているとしますと、

こう移動して行くと、移動する先端の方が赤系統、後ろの方が青系統になる場合と、停止しているときに(中心部をつまんで振るようにしてペンの首振り運動をして見せながら)一カ所を機軸にしてこういうふうに向く場合があります。それも片方だけを大きく回転させたり、小刻みに非常に早く回転することもあります。船体の中は完全に重力の制御をしていますから、中に乗っている人間には何の問題もありません。ある種のエネルギーをチャージする意味で母船が激しく首振り運動することがあつて、外見적으로는母船がちよつと膨らんだように見えます。また母船の後ろの部分がモヤで包まれたように見えることもあります。

その場合は後ろが赤くなります。物凄く赤くなつて前が青くなります。ですから母船が空間からエネルギーを吸収しているとき、または一部分から放出しているときもそうです。

また光の操作をいろいろやることもあります。昼間空間にいる母船を人間の目に見えなくする技術があるんです。あまり大きな母船はめつたに大気圏を突入して降りてこないのですが、ある種の意味があつて、たとえば記念すべき場所に昔コンタクトを経験した人達が転生して集まつているという場合には、祝福するために降りてくることがあります。

このような場合には母船のまわりに



撮影/松村孝之

雲を発生させたりして、敏感な人には気がつくようなパイプレーションを送るわけです。しかしそのときには本体は見えません。なぜ見えないかと言ひますと、船体のこつち側から来た光を吸収し、それをコピーして反対側から放射する技術を持つているからです。そうすると船体は完全に透明化して人間の目に見えなくなり(船体はそこに実在するけれども人間の目には見えなくなるの意)。どの方向から来た光でもそれがやれるのです。

ただしその技術を完全にクリアーするために、ときどき夜間とか夕暮れ時に或る種の事を異星人はやらねばならないのです。或る種の特異な操作を母船に対して行なう必要があるんです。その操作をやつているときに両端が光る現象が起こります。

それと、まれに夜間に全体を蛍光灯のようにパツと光らせる場合があります。一つです。これは目撃する側に意味があるんです。重要な意味があります。そのときに消えるときをよよく見ていると、両端から消えるんです。私は母船が消えるのを非常に近い所から見たことがあります。ネオンを両側からパタパタ消してゆくように消えてゆきましたね。

たぶん母船には縦に動力源の繊維状のものが一杯入つているんだと思ひますね。それが両側から光を切つてゆくから、しだいに母船が短くなつてゆくように見えるわけです。最後に縦の光の線がピュンと光つて消えました。これを見ると誰でもびつくりしますよ。非常に興味深い光景です。

異星人はテレパシーが基本

松村 私達の太陽系には太陽系連合があると思いますが、それと、別な太陽系の連合とはどのような交流があるのでしょうか。

秋山 あるパーレベルをクリアしたブラザーズ（異星人）達においては、テレパシーというものが基本的な通信手段になるわけです。我々が通信手段において普段のコミュニケーションのなかで重要視しているのは『言葉』です。実際に空気の振動によって音を伝えることによって情報交流しているわけですが、彼らはかなりの割合でそれをテレパシーに切り替えているわけです。

このテレパシーというのは基本的に自分の意識で限定しない限り、たとえばテレパシーといたって月にまで伝わるまいと考えない限り、どこまでも伝わるのです。たとえば地球で起きているいろいろな変化のバイブレーションをアンドロメダの異星人が同時に感知します。これはしよっちゅう起こっているんです。

結局、宇宙連合と言いますか、宇宙の連合体、たとえば太陽系連合があると思いますと、それは地球人のように徒党を組んでやっているのではなくて、お互いにそのようなバイブレーションが分かるわけです。たとえば体のある部分にガン細胞ができるとしますと、

体全身の細胞がそのガンに気づくんです。

これと同じように異星人達は同時にあの惑星に問題があるということに気づくわけです。それは正確に言えば、あるパーレベルを超えた異星人達はどこにしようと感じています。あとはその問題をどう受け取るかによって、それ以後の行動パターンが変わってきます。それで、とりあえず地球に対して何らかのアクションを起こそうとして動きだすのは太陽系の人達が中心になっています。

ところが、ごくわずかですが銀河系の中でも外でも或る惑星系でアンバランスな惑星を持っているがために、そちらのバイブレーションをコントロールするのが先だということで、そちらにかかりきりの人達がいます。

あと、もう一つは具体的に地球に対して行動を起こすのを控えている人達もいるわけです。それはごく少数なのですが、そういう人達はアクションを起こすという段階になって連合系には参加しません。ですが基本的には太陽系を含めて、その周辺の異星人は地球に対しては、お互いにテレパシーで連動しながら行動を起こしているとおみて間違いないでしょう。そういった意味での連合体であるイメージしてもらえば最も分かりやすいと思いますね。ですからテレパシーによる通信手段は根本的に重要な問題です。

異星人の睡眠

小宮 私達は睡眠をとっていますが、別な惑星の方々は睡眠をどのようにとっていますか。

秋山 基本的には睡眠というものを彼らは生理的にもついています。我々の睡眠よりはかなり短いんです。

それと夜寝て朝起きるという形態よりももっとかなり自由ですね。ですから我々は太陽というもののサイクルに従って寝起きするという形が原始時代から定義づけられています。つまり環境に人間が合わせるといってそういう形です。

ところが異星人は自分の肉体を意志の力で変化させることができる程度です。ですから、生理学的な睡眠という問題に關しても、彼らの意志でコントロールすることが可能です。

ただし今の地球人の場合には最低でも三時間か四時間は必要だと思います。それをとらないとかなりきつくなるでしょう。我々は今の地球に合わせたレベルにありますから――。

ところが彼らは睡眠をある程度決まった時間にとったり、または非常に短くしたり、長く睡眠をとってまとめたりとしたりして、かなり自由にコントロールできると思いますよ。これも意志の力で肉体をコントロールできるから、精神と肉体の關係は重要な問題です。

マスメディアに煽られるな

田中 地球人は異星人の方からいろいろな形でご援助を頂いていると思いますが、このところのアメリカやソ連の動きを見ますと、何らかの意図的なものがあつて、特にソ連の崩壊は私達の感覚では理解できないような動き方でした。これについて異星人の側からアクションがあつたのでしょうか。

秋山 結局、今の地球社会の動向というのは、その根本にあるのは或る種の想念のバランスです。それによって経済が動きます。経済と想念のバランスは非常に近いですね。心はお金では買えません。しかし心とお金は相対して動くという法則があります。

逆に言いますと、心を動かせばお金が動く。その原理を非常にテクニカルに体系的にコントロールしている人達がいるわけです。

たとえば近代社会における最大の権力者はマスメディアと言われているんですが、このマスメディアというのも非常に公正な情報を流しているように見えて、実はある一定のルールにコントロールされているんです。たとえば朝起きて午前10時ぐらいまでテレビのどのチャンネルのワイドショーをひねつても、とんでもない事件ばかりを流していますよね。あれなどは非常に悪い影響を与えていると思います。

そうすると、そんなメディアを動かしているのは何かといえますと、経済支配のネットワークが厳然としてあるわけです。

ですからアメリカが悪いわけではないんです。そういったネットワークの中核になるものがアメリカの中に沢山あるわけです。それがアメリカという国家を超えて、国家に支配されることなしに、いろいろな意味でエンegramネーを動かしたり、メディアを動かしたりしながら世界戦略を展開している傾向があるんです。確かにあります。だからソビエトの崩壊もソビエトだけが勝手に倒れたわけではないんで、そういう微妙なミリタリーバランスによって成り立っています。

しかしそこで我々が見抜くべき問題は、そうした世界経済のネットワークでさえ、人間の想念がお金を動かす事を知っているという点です。ですからお金を動かそうとしたら想念を動かさうとしなければなりません。だからメディアを使うわけです。お金だけで大衆を買うことができれば、彼らは造幣局や銀行を押さえるでしょう。ところがそれだけでは世界が動きません。大衆の心を動かすことが必要です。

だから我々一人一人が簡単にメディアに動かされないようにすることが大切です。UFOの世界でもそうですが、最近の精神世界では非常に沢山の情報が流れています。特に最近メディアで話題に

なったUFO問題一つにしても微妙に突いていると思うんですが、むかしはアダムスキー、アダムスキーとよく言った時期があったりして、テレビでもアダムスキータイプの円盤がどこそこへ出現したと盛んに流した時があったのですが、それでは視聴率が上がらなくなつて、みんな飽きてきたというわけです。そうすると今度は攻撃説に転向するわけです。

ところがダイレクターに攻撃説を売り込んでくる海外の人達がいるんです。それは或る種の研究者といわれる人達ですが、こういった人達がUFO陰謀説を声を大にして唱えたのは、また一つの理由があるんです。たとえば超能力なりUFOが国家危機に関係するといふわけです。たとえばソ連の超能力戦略はアメリカを攻撃しようとしているとか。それで一時期アメリカ政府はその研究に膨大な予算を使った時期があります。

今回もアメリカの一部のUFO研究者達が「UFOというのは地球にとつて危機である」と言つて、これをキャンペーンすることによって国家から、特に軍部から莫大な援助資金を引き出すようにした経過があります。だからアメリカが最も気にする日本のマスメディアからそのことを盛んに流してもらふ必要があったわけです。

ですから私達はそんなケンカに巻き込まれないようにすることが大切です。

そこで単純な見方で見ればよいと思うんですよ。ケンカを煽るようなもの、または「こうしなければならぬ」というような事を煽るものを選べることです。ところがどのように考えても理不尽な方向に「こうしなければいけない」と言われつつ、みんなが巻き込まれてしまうようなものを、個々に検証して正しく評価してゆく必要がありますね。

この数年間、中国で盛んにプラザーズの動きがあつて、中国の超能力者達が盛んにプラザーズとコンタクトした時期があります。私はそうした関係で中国の情勢をいろいろと調査していたのですが、最近になって中国からスペースシャトルを飛ばすという計画が進行中です。これはいまだに報道されていませんがね。そのうち報道されるでしょう。アメリカのNASAがなんと中国からスペースシャトルを飛ばすというわけです。経済危機というのに、なんで中国からそんなことをやるのかなどという思いにかられているんですけども、結構いろんな宣伝が動いているようですね。

まあ、問題はやっぱり煽られないことだと思います。

日本に課された試験

田中 日本は今重要な時期にあるわけですが、日本が超えなければならぬ

当面のテーマは何でしょうか。

秋山 そうですね、日本はあらためて物質的に豊かになりましたし、個人主義の時代だといわれるようになりました。だからこそ、その余裕を生かして、まず個々の価値観を明確にすべきだと思うんですね。自分のアイデアは何か、自分が社会に対して自分しかできない事は何だろうか、個々にみな顔が違うように、個々に社会に対して絶対に提供できるものがあるはずですよ。

もう一つ重要なのは何のために生きているのか、こうした問題を常に自分に問いながら生きてゆく時期に入っていると私は思います。と同時に、個の時代に入ってゆくといわれてから五年ぐらい経つんですが、そろそろ自己確認を踏まえながら、もう一度、先ほどの親子兄弟、つまり家庭の問題を見直す時期に入っていると思うんです。

それと過去において戦争で焼け野原になった日本を奇跡的に復興させた先祖がいたからこそ今日の繁栄があるわけですから、そうした歴史に対する感謝が必要ですよ。感謝のエネルギーというのは何よりも強大なものです。私達は今後新しい時代を創造してゆかねばなりません。その創造のエネルギーのなかにはいくつかの根本的なエネルギーがあると思いますが、その内、非常に大きなウェイトを占めているのが、歴史に対する感謝のエネルギーです。

(以下次号)

Plane Without A Crew

飛行機を助けた謎の UFO

これは昨年九月に報道されたソ連の世にも不思議な実話である。軍事機密にされていたが、ソ連邦の混乱につれてリテラトゥルナヤ・ガゼッタが報じたもの。

パイロットを含む八名の搭乗員全員が意識不明になりながら AN-12 陸軍輸送機がチェルヤビンスクからウファ間を七三分間も八〇〇メートルの高度を飛行し続けるという謎の重大件が発生した。この輸送機はコースを変え続け、絶えず墜落の危険にさらされていた。地上のレーダーでこの機影をキャッチしたものは無い。

「ここはどこなんだ？ どこへ向かって飛んでいるんだ？」
副操縦士の弱々しい声をかすかにとらえた管制センターは急遽救援態勢にはいった。

離陸後二〇分たつて管制センターが輸

送機に対して高度を知らせよと伝えたとき、操縦士は六一〇〇メートルの高度でツラトウストの上空を通過していると答えた。管制官のカンダロフが再度尋ねると、今度は七八〇〇メートルだと訂正してきた。

その誤差やパイロットの声の抑揚がヘンなのにきづかぬまま、カンダロフはこの情報をウファへ伝え、輸送機に最後の指令を発したのだが、すでに搭乗員達はみな意識を失っていた。こちらの指令を相手が聞いたかどうかを確かめぬままにカンダロフは無線機から離れた。だが失策をやつたのはカンダロフだけではない。

ウファの管制官バカエフは、輸送機の位置を確認しなければ、AN-12が、いつ、どこからウファ地区へ侵入するのかを確かめなかつたのだ。一方、輸送機は飛び続けたのに、三カ所の管制センターはそれを探知できず、三カ所の防空基地も気づかない。これは輸送機自体ばかりか旅客機や地上の何も知らぬ乗客達にも脅威となる。事件全体が後に発生する各種の事件のための総舞台稽古のように思われた。

かんじんの輸送機のキャビン内は酸欠で乗組員達が倒れている。強力な気流の恵みによって機体はあてもなく大空を漂流しているのだ。

カンダロフの最後の連絡から一時間以上経過したとき、ウファ北部防衛地区の飛行センターにいたプロトフスキーとい

う名の警戒管制官が、自分のレーダースクリーンに未確認の映像を認めたのである。そこで、この UFO が存在する地域にいる航空機群に連絡してみると、この映像は飛行機だと連絡してみたら、おかしなことにこの飛行機とは連絡がつかない。

この物体が発見されてから一〇分後に、輸送機の副操縦士が朦朧としながらもスジのおとる言葉で「助けてくれ」と伝えてきた。プロトフスキーとフライト・オペレーションの主任であるアンドレエフが応答する。

「いったいどうしたんだ？」

「機内の気圧が下がった」

「気分はどうだ？」

「たいへん悪い」

「心配するな。無線誘導する」

誘導の結果、雪で覆われた滑走路に機体が少しづつ降下する。車輪が出ないので胴体着陸。

やつた！ 一同は歓声をあげて走り寄る。

この輸送機はいったいどうしたというのか。

この AN-12 の搭乗員達は、飛行準備の完了と悪天候の回復を待って、チェルヤビンスクで三日間をすごした。彼らはトランプ遊びや飲酒などで時間をつぶしていた。

三日目の夕方、夕食の料理を食べないで夜食用に持って出た一同は、一杯やりながら夜をすごした。

翌朝、彼らの飛行は許可された。しかし搭乗員の一部の者だけが離陸準備にかかっただけで、遅れて来た数名の者は機体下部の緊急脱出用ハッチから乗り込んで来た。ところが、前夜の飲みすぎで朦朧としていたうえ、急いでいたために、ゴムの空気漏出防止装置を閉めることを忘れたので、ハッチは完全にロックされず、そのために気圧が低下して悲劇が起こつたのである。

搭乗員全員がほとんど意識を失つたまま体を起こすこともできず、ぐったりとしていた。いわば無人状態におちいつたのだ。それでも飛行機は七三分間も異常なく飛び続けた。何が機体を支えたのか UFO にちがいない！
この事件はソ連の軍事機密として極秘にされていたが、ゲナデー・ボカロフ氏によって明るみに出された。

ソ連ではこうした驚異的な UFO 事件が多発しているけれども、ほとんど軍事機密にされて公開されることはなかった。極端な秘密主義をつらぬいてきたからである。だが今後は多くの UFO 事件が漏洩するだろう。

You Can Produce
Miracles
by Hachiro Kubota

奇跡を起こすと 反復思念と イメージ法

久保田八郎

前号に掲載した「ミラクル・ワードとミラクル・イメージ」についても少し詳細に述べてみよう。

ミラクル・ワードとは奇跡を起こすための言葉で、これを反復して唱えることを意味し、ミラクル・イメージというのは奇跡を起こすためのイメージを描き続けることを意味する。

積極思考が重要

一般人は将来自分が何かを実現させようとして計画した場合、その方向に向かつて一応努力するけれども「成功するかどうかは分からないが、ともかくやってみる」という程度の思念しか起こさず、あるいは「到底実現ししろにもないぞ」と悲観的な思念すら起こすことが多い。これは地球人の最大の欠陥であると聞いている。

こうした計画を立てた場合は、「必ず実現するのだ。実現する以外に方法は

ない。自分は絶対に実現する方向に向かっていているのだ」という強力な思念を持ち続けることが必要である。このような積極的思考を英語では positive thinking というが、これは能力開発の原理で最も重要なものとされている。いかにすれば「プラス思考」ともいう。むかし神戸の偉大な指導者であった異直道先生は、思い込むことは実現する」という理論を唱えて、多くの苦しむ人達に奇跡を生じさせておられた。特に難病で苦しむ人を奇跡的に治しておられた実例が多かったようである。

これに反して「自分はダメだ」とか、「こんな事が実現などするものか」という悲観的な思念を起こすことを negative thinking といい、これは「マイナス思考」という。地球人の特徴であるといわれている。

病気は本来存在しない

反復思念法は決して難しいことではない。たとえば難病で苦しんでいて医学でも治らないような場合、大抵の人は「医学に見放された」と思い込んで悲観的になり絶望の淵に立ってしまう。

しかし少し考えてみると、この大宇宙の創造パワーは、苦しめるために人間を創造したのではないことが分かるはずだ。プラトンのイデア論をまつまでもなく、むしろ人間は本来完璧な健康体を保つように青写真が描かれており、それによって人間は人生を限りな

く楽しむように出来ているはずである。つまりこの大宇宙に「病気」というものは本来存在しないのであって、あるのは完全な健康体だけなのだ。

「しかし現実には沢山の病人がいるのではないか」と反論する人が多いだろうが、それは病気が実在すると思ひ込んでいるがゆえに、その思い込みによって、自分でそれを作り出しているにすぎないのだ。つまり病気の幻影を背負い込んで、それが実在するかのごとき錯覚を起こしているのである。

いささか非現実的な哲学的表現だと思われようが、実際に病気の存在を否定し、強烈な健康のイメージを描き続けて自分の心臓病を治した婦人が以前日本GAPの会員にいた。この方はアダムスキーの『生命の科学』を読んで大悟し、イメージ法を応用したと聞いている。イメージ法に関しては同書に述べてある(『生命の科学』は中央アーツ出版社刊・新アダムスキー全集第三巻)。

想念が肉体に及ぼす影響に関しては、新アダムスキー全集第一巻『第二惑星からの地球訪問者』中の第二部で異星人の長老が大母船の中でアダムスキーに説いて聞かせる場面がある。これは素晴らしい真理の言葉であって、これを応用しないという筈はない。それによると、人間の肉体は本人の想念が鋳型となって美醜や強弱をどのようにもあらわすという。いかにえ

ば、「自分は健康だ！」と自分自身に向かって想念を吹き込めば、肉体がそのときから変化を始めて、次第に想念どおりの健康な体になってくるのである。これについては全身の細胞が想念の影響によって変化し始めると考えられるけれども、医学的な根拠に関してはアメリカあたりで研究されており、奇跡的な成果をあげた例が報告されている。アメリカにはすぐく進歩的な研究をする医学者や医師がいるらしい。

たとえば白血病にかかった幼い坊やを医師が指導し、異常に増殖する白血球増殖組織をやつつける軍団が体内で大戦闘を展開するイメージを描かせて、見事に治癒せしめた例がある。

一般人はこんなイメージを描いて肉体を変化させる方法を全く知らず、肉体をたんなる物質の固まりぐらいいにか思っていないので、病気になる恐怖心を起こして病院に走り込む。医学は科学の最先端を行くので、それで治ればこれに越したことはないが、容易に治らぬとなれば物凄く恐怖心を起こす。その恐怖心でますます肉体を弱らせるのである。

強烈な反復思念による効果

どうすればよいのか？

まず自分自身に対して強烈な激励演説をやればよい。「私は健康、無限に健康、絶対健康！」この言葉を間断なくくり返して唱える。口に出して唱え



撮影／筆者

るのが都合悪ければ心中で唱えてもよい。その想念を自分の肉体全身に吹き込むのだ。

これを始めるときはまず次のように大声で呼びかける。

「全身の細胞しょく——ん！ さあ、反復思念を始めよう。それ、私は健康、無限に健康、絶対健康！」

この言葉を唱えると同時に全身の六〇兆の細胞がいつせいにその言葉を唱和して叫んでいるようなフィーリングを起こす。そして自分が完璧な健康体になって歓喜に燃えながら野原を思いきり走り回っている姿を心の中にイメージとして描くのである。これをたえ

▲人々の想念の内容は？（都内、有楽町にて）

まなく続けるのだ。

そして自分の肉体が快方路線にどつきりに乗っかって、全快のゴールを指して奮進しているのだと確信する。「もうよくならずにはいられないのだ」と心底から思い込むのである。

するとある日、突然、肉体に変化が生ずるだろう。そして軽快したことを知って驚喜するだろう。あるいは、一時期悪化したような状態になって、それから潮が引くように病気が消滅するかもしれない。これは治るための好転反応であるから恐れる必要はない。

ただし医学的治療で治るものならば、治療を受けて治すほうが手つとり早くよく理解できぬままに、がむしやりに妄信的になつてはいけない。

想念は波動で放射される

想念なるものについて科学的な解明はまだなされていないが、想念の力が偉大な効果を発揮することは昔から知られている。想念を強化した念力というものはスプーンを曲げるほどの怪力を有するけれども、その原理は未解決である。しかし多数の実例からみて帰納的に「或る力」の存在を認めることは不合理ではない。いつかは科学で解明されるだろうが、この「力」を伝達するものは波動であると考えられる。つまり想念は波動となつて放射されるのだ。

このようにみるとテレパシー現象も

容易に理解できる。このテレパシーに関する研究もアメリカは非常に進歩的で、一九五八年に原子力潜水艦ノーテイルス号を利用して二〇〇〇キロ離れた二地点間で想念の送信と受信の実験が実施された。送信者はメリーランド州のフレンドシップ市からゼナーカードの図形を一つずつイメージを描いて想念によつて送信し、それを北海の海中に潜航している潜水艦の一乗組員が受信する。この的中率は七五パーセントであつたというから凄いものだ。

もつと凄いののは、人間が心中で描くイメージがテレビの電波みたいに二〇〇キロも彼方に届いて別な人間にキヤッチされる現象が発生したという事実である。これに類似した人間同士のテレパシー現象は昔から無数にあるので、それからみると想念が波動となつて空間を進行するという事実は間違いないだろう。

願望は必ず成就する

そこで、強力な想念によつて肉体の故障が治るといふ現象も、結局は想念波動が細胞に影響を与えるためであると解することができる。細胞はれつきとした生き物であり、意識を有するから、当然、他から来る波動に感応するはずだ。これについてはすでに或る程度医学で研究されているようだが、まだ一般化してない。

ところが、病気の治癒ばかりでなく、

人間の願望が何であつても、強力な反復思念とイメージ法によつて奇跡的に実現するということが諸々の能力開発研究者から唱えられるようになった。代表的なのはアメリカのジョセフ・マーフィー博士だろう。故マ博士は膨大な書物を出しておられ、その邦訳版が産業能率大学出版部から多数出ているので読まれるとよいだろう。

マーフィー博士の書物で出色なのは『あなたにも超能力がある』と題する本である（産業能率大学出版部刊。東京都世田谷区等々力六一三九—一五）。これには想念の力によつて多種類の奇跡が実現した例が列記してある。したがつて、反復思念とイメージ法は決して間違つた方法ではなく、むしろ人間に対する最も重要な生き方の指針なのだ。

奇跡発生の実例

そのことはアダムスキーも「生命の科学」中で解説しているが、特にイメージ法に関して力説している。

それで日本GAPはむかしから反復思念とイメージ法によつて奇跡を起こす方法を提唱してきた。またそれによつて素晴らしい成果をあげた人達が多い。病氣治しばかりでなく、生活のあらゆる面で応用出来るのだ。

実例を二、三あげよう。

山形県に住む古くからのGAP会員である女性のSさんは、日本GAPが毎年実施している海外研修旅行の一九

八四年度第二次エルサレム旅行に参加したくてたまらなかつた。二〇〇〇年昔、イエスが活躍したパレスティナの大地を自分の目で確認したかったのだ。しかし当時彼女が勤めていた地元のホテル製作会社で、八月に一二日間も休暇を取ることは逆立ちしても不可能であつた。だがSさんはミラクルワードの回復思念をくり返した。「必ず行ける。絶対に行ける!」。そして実際に自分がエルサレムの古い街路を嬉々として歩いている光景のイメージを心中に描き続けた。

あるとき同僚の女性が急病で入院して長期間休むことになつた。「いいわよ、あなたの仕事の分まで私がやっておくから、安心して療養しなさい」と親切なSさんは慰めて見送つた。

おかげで同僚の女性は安心して治療を受け、やがて全快して会社に元気な姿を現した。そしてまた二人は一緒に仲よく働いた。

ある日、Sさんはエルサレム旅行の件をなにげなく洩らした。「なんとかしらて行きたい!」

同僚の女性は事もなげに言った。「行つてらっしゃいよ。今度は私があなたの分まで仕事をしてあげるから」

こうしてSさんは奇跡的に休暇が取れて勇躍エルサレム旅行に参加できたのである!

これはSさんの熱烈な願望の想念によつて同僚の女性がまず休暇を取る行

動が方向づけられ、その見返りとしてSさんに休暇が与えられたのではないだろうか。決して偶然とは思えない。

仙台市に住むOさんは、かねてからパソコンが喉から手が出るほど欲しかつた。しかしまだパソコンという機械が高価な頃だ。手元不如意で容易に買えない。だがOさんはあきらめず、しきりに入手したイメージを描き続けたところ、あるとき思いがけず懸賞にあつた。パソコンが与えられた。

某県に住むT氏は、ある理想的な女性を嫁にしようとイメージを描いていた。あるとき支部大会のあとで夕食会があつたときに、隣に座り合わせた女性と親しくなつて、結局は結婚した。

最近の例では、横浜市にお住まいの会員・K氏から、ミラクルワードの回復思念とイメージ法で市内にマンションを買うことが出来たという報告があつた。詳細は不明だが、数千万円もする物件が購入できたとは素晴らしい成果であると思う。

原因と結果の法則

以上の実例をすべて「偶然的産物」と片付ける人は、結局、自分の人生のすべてを偶然的産物化してしまふような生き方をすることになるだろう。思わぬ災厄に遭つたり不幸を招いたりして、これらをすべて「偶然だ」「このよな運命だったのだ」とボヤクような人生を過ごすことになるのである。

この世の中に偶然なものは何もないとアダムスキーは言つてゐる。すべての結果には絶対的に原因がまず先行する。これをGAPでは「カルマの法則」と呼んでゐる。原因と結果の法則だ。これを因果関係ともいう。

良い結果を得ようとすれば、良い種をまいておかねばならない。その良い種とは「良き想念」である。しかもそれはたんなる「お人よし」的な想念ではなく、「必ず良い結果になる!」という意図的なプラスの想念なのだ。これがまず四次元世界で青写真を描き、次いでその青写真通りに現象面で展開してくる。この法則が間違いないことは無数の実例から首肯できることである。

今日、私は柔和にすごした

ところがこの世界はなんとまあ分裂感情に満ちてゐることか。怒り、憎悪、反感、復讐心、軽蔑感、差別感等、あらゆる分裂感情が渦巻いてゐるのがこの地球世界である。こんなマイナス想念波動帯がどつしりと地球を取り巻いてゐるのだから、これでは地球社会に平和の到来は望み得ない。上司は部下を怒鳴りつけ、部下は上司をバカにする。社内でも主流派、反主流派、ノンポリ派と分裂して反目しあふ。

だが、このような世界を天国に変えることは不可能ではない。社内の人々の一人の人間が宇宙的な思想を持ち、全社員に対して感謝と奉仕の態度で接

するならば、その想念波動は必ず全社員に良き影響を及ぼして、大いなる変化を起こすだろう。怒鳴り専門の上司は人が変わったように柔和になり、全社員の目が輝いて、調和と親切とに満ちた温かい雰囲気が生じるだろう。ウソだと思えば、まず自分で実行してみるとよい。必ずそうなると筆者が請け負う。

まず自分が柔和になること。それは表面だけの柔和ではなくて、心底からの宇宙的な柔和さに徹することである。そうすれば、あなた自身が報われるのだ。一日の終わりに「今日、私は柔和に過ごした」と言える生き方が出来れば、自分自身の運命はどのようにも良き方向に向いてくる。

無生物も生き物

少し話がそれたが、この世界はすべて波動から成り立つてゐると言えるだろう。物理学的な事は抜きにするが、もの言わぬ無生物ですら波動を感じする力を持つてゐると言えるようだ。それはアダムスキーが言うように、すべての原子核にはスパーク(生氣)が宿るといふ理論からして、無生物といえども一種の「生き物」であると解して差し支えないだろう。だいたい、原子同士が互いに相手を選んで結合するといふ神秘的な現象の理由を解明した者はいない。それどころか素粒子同士も相手を選ぶ。明らかに意識を有してい

企画変更

日本GAP企画第14回海外研修旅行

アメリカ・チリ アルゼンチン イースター島 宇宙ロードの旅

大気圏外に思いを馳せるのは結構ですが、私達のホーム惑星である地球再発見も大切であるとの見地にもとづいて、日本GAPは過去13年間、毎夏に海外研修旅行を実施してきました。その間、謎の遺跡の見学を主体に訪れた国は延べ約50カ国に渡り、参加者も延べ約400名に達しています。

1992年も8月にアメリカと南太平洋の謎に満ちた孤島イースターへの旅を実施します。ここは私達にとって未知の土地。素晴らしい体験が待ち受けていることでしょう。

アメリカでは屈指のリゾート、マイアミに到着、次に南米チリの首都サンチャゴへ直行。ここをたっぷりと見学後、ここから3700km離れたイースター島へ飛び、名高いモアイ像その他の謎の遺跡観光を満喫して、またサンチャゴへ帰り、この美しい都市でゆっくり散策休養。次にアルゼンチンの首都ブエノスアイレスへ行き、ここで観光し、再度マイアミへ帰って休養後、帰国するという豪華な大旅行です。皆様のご参加をお待ちしております。日本GAP会員でなくても参加できますので、お誘い合わせください。

日程概要

- 1992年8月11日(火) 18:20成田発。
翌日マイアミ着。飛行機を乗り換えて南米チリ・サンチャゴへ直行。
 - 14日 朝サンチャゴ着、市内観光。
 - 15日 終日市内観光。サンチャゴ自然博物館、アルマス広場、大統領官邸、サン・クリストバルの丘、マイボキャニオン等を見学。
 - 16日 イースター島行き。
 - 16~19日 島内観光。カルデラ湖、鳥人の儀式村、各種モアイ像等を見学。
 - 20日 再びサンチャゴへ。
 - 21日 ブエノスアイレスへ。
 - 22日 自由行動。夜ブエノスアイレス出発。
 - 23日 朝マイアミ着、自由行動。
 - 24日 マイアミ発。
 - 25日(日) 15:25成田着。
- 全行程15日間。3カ国訪問の大旅行。

- 期間=1992年8月11日(火)~25日(日)
- 費用=未定
- 定員=20名

案内書請求・参加申込先 下記へハガキでお申し込み下さい(日本GAPでは扱いません)。

〒150 東京都渋谷区東3-24-9
サンイーストビル2F
ワールドセブトラベル株式会社
田中正
☎03-3499-2461
(夜間は 0475-89-2039・田中自宅へ)

- 費用は24回払いローンもあります。詳細は案内書をご覧ください。
- 夏はサンチャゴからイースター島までの飛行機が込みますので、参加申し込みは早めをお願いします。
- 旅行説明会=第1回目・1992年5月17日(日)
第2回目・1992年7月26日(日)
(会場等の詳細は申込者に通知します)

企画=日本GAP
主催=株式会社日本旅行
(運輸大臣登録一般旅行業第2号)
取扱い旅行代理店=ワールドセブトラベル株式会社
(運輸大臣登録旅行業代理店業第1957号)



るからではないだろうか。彼らは相手からの波動をキャッチして選択するのではないか。その波動の根底をなすのは大宇宙の創造主の意識波動ではないのか。

このようにみると万象の解明はやはり科学によるのだろうか。だが地球の現段階の科学ではまだ前途遠遠である。地球の航空機に人工重力場を持たせることなどまだ夢にすぎない。しかしいつかは実現するだろう。そして遙かなる惑星群を訪れて、大文明を享楽して生きる高度な発達を上げた人々と交流する時代が来るのも遠い先のことではないと思う。

Cosmic Meditation (大宇宙瞑想)

もっとよいのは日本GAP東京月例会で行なっているcosmic meditation(大宇宙瞑想)の実践と並行してミラクル・ワードとイメージ法を行なうことだ。同時に行なってもよいが、別々に実行してもよい。

この瞑想法は決して難しいものではない。方法は次の通りだ。まず立ち上がったって背骨をまっすぐに伸ばし、両手を下腹の上にあてて組む。顔を少し上向きにし、目をつむる。これで姿勢はOK。

鼻から少しずつ息を吸い込みながらそれを下腹へ落とすつもりで腹をふくらませてゆく。一杯に息を吸い終わっ



▲東京月例会における大宇宙瞑想の実習。
撮影/松村芳之

たならば、一瞬息をとめて腹を充分にふくらませた状態で、全身に『宇宙の意識』(宇宙の創造主のパワー)が充滿しているようなフィーリングを起こす。そして息を少しづつ口から吐いてゆくと息をとめた状態のときに全身に宇宙のパワーが充滿したというフィーリングを起こすのが秘訣であって、それだけのことだが、これには素晴らしい効果がある。

まず全身が非常に爽快になる。そして全身の細胞が急速に活気づいてくる。心が開放されて気宇壮大な気分になる。これは頭に精神を集中させることではない。全身の細胞を大宇宙の意識(創

造主)と一体化させて、自身を大宇宙の中へ溶けこませ、万物との一体感を感じる方法である。

この方法については秋山眞人氏に話したら、氏は次のような有益な話をした。「呼吸法については私もだいぶ研究してみたのですが、中国では東洋的な方法がすべて丹田(へその下)呼吸なんです。息を鼻から吸い込んでお腹の底に落とすのです。」

それで今おっしゃった方法と全く同じ方法を昔の大超能力者であった三田光一氏も説いていましたし、もつと昔の沢庵和尚も言っています。ユリ・ゲラーも念力で物体を動かすときには、お腹に息を吸い込んで、それを吐くときに動かすようにしていますから、この腹式呼吸は非常に優秀なメカニズムでして、ゴールデン・ルール(黄金律)と言ってよいでしょう。

私がこのまえ中国へ行きましたときに、超光という気功の偉大な老師に会ったのです。この方は中国の気功の世界ではトップにおられる方です。北京の大きな病院の顧問もやっておられて、お医者さんでもあります。

この超光先生に能力開発法を教えてくださいませんかと言いましたら、日本には禅がある。能力開発に関しては日本のほうが優秀ではないかとおっしゃるんです。禅の呼吸法にすべてが集約されているというわけです。

そこで私が、日本の禅と中国の気功

との共通点がありますかと聞いたら、集点法というのがある。これはイメージの中でエネルギーの集点を作って、その集点点を体の中でぐるぐる回す方法なのだ。そうすると細胞が活性化するというわけなんです。この集点法というのは今日日本でも流行っているんですが、その場合はやはり丹田で最初にエネルギーのポイントをイメージします。次にそれを頭の上まで上げて言って、上

からそれを噴水のように放出して行って、肛門のあたりで吸収して、また頭へ回して行く方法です。ところが先生はこの方法は非常に危険だと言っていました。つまり意識の集中のポイントを頭に置くのは敏感な人に良くない影響を及ぼすので危険だというわけです。だから超光先生は、頭へ持って行かないで、お腹の中で集点点を回すというのです。つまり丹田に(へその下に)集点点を固定して、そこにゴムマリぐらいのエネルギーの固まりがあるとイメージしながら息を吸い込んで丹田に力を入れた状態のまま、エネルギーの玉が回っている光景をイメージすると、その玉が回転しているイメージからどんどん体中に影響が出て活性化するというわけです。だから一種のイメージ法なんです。

超光先生に聞きましたら、もともと下腹部の丹田という意味は、丹とはクスリという意味で、しかも非常に範囲の広い万能薬をあらわすというわけ

す。そして田というのは貯蔵庫をあらわすと。つまり万能のエネルギーを生産する場所という意味です。

非常に単純なことなのですが、超光先生に言わせれば、丹田に意識を集中させてイメージすることがすべてだというわけですね。それしかないということです。私はこれを聞いて非常に感銘を受けて、やはり非常にシンプルな方法のなかに本物があると思えましたね。

ところが人はもっと複雑な神秘的な方法があるだろうと思つて、なかなかこんな簡単な事を実行しません。しかしこれにチャレンジして、ある期間実行して最も効力があるのは、たぶんこの丹田の意識集中の方法だと思いますね。

以上のとおりで、筆者が多年実践してきたcosmic meditation(大宇宙瞑想)は期せずして中国気功の大長老の理論と一致していたということになった。しかし筆者の場合は気功から取り入れたのではなく、あくまでも筆者が編み出した方法である。気功と直接の関係はない。

ただし「瞑想」という言葉には宗教的な響きがあるので好ましくないのだが、他に適当な言葉が見つからぬので、今は仮にそのように称しているだけである。アダムスキー哲学をやる日本GAPは宗教ではない。GAPを宗教的だといって批判する人は気の毒な存在である。

『宇宙の意識』の定義

それはともかくとして、アダムスキー哲学が徹頭徹尾人間のマインド(心)と「宇宙の意識」との一体化を提唱していることは、彼の絶筆となった『生命の科学』で明確である。

ここで『宇宙の意識』という言葉の意味を明確にしておくことにしよう。これは英語のCosmic Consciousnessといい、宇宙全体を一つの意識体とみた呼称である。言い換えれば「宇宙の創造主」と同じ意味だ。

ところがこの頃、あいだに『の』の字のない『宇宙意識』という言葉をよく耳にする。これは人間の側で起こす宇宙に対する意識であつて、人間が宇宙の存在を意識すると言う場合の意識である。片や神そのもので、片や人間そのものであるから、この区別をはつきり知っておく必要がある。アダムスキーは神という言葉をほとんど使用しなかったが、これは宗教と間違えられるのを警戒したためだろう。そこで『宇宙の意識』という造語を用いたのだが、これは素晴らしい呼称であると思う。

重要なきっかけをなす瞑想

『生命の科学』によれば、われわれはマインドと宇宙の意識との一体化を図るのに、特殊な行法を必要としないと述べてある。そこで大宇宙瞑想だが、アダムスキーはそんな事を言つてはい

ないから邪道だという人がいる。

これに対して一言。アダムスキーの言う特殊な行法とは一九五〇年代から六〇年代にかけてカリフォルニア州にはびこった怪しげな新興宗教群の奇怪な行法を意味するのである。このことは昔ビスタで聞いたから間違いはない。

われわれが行なう大宇宙瞑想はマインドと宇宙の意識との一体化を自覚するためのきっかけをなすものであるから、良いことではあつても悪かるうはずはない。げんに昨年より東京月例会でこれを実習し始めてから、体の調子が非常に良くなったとか、テレパシクな感覚が高まつてきたという人達がいる。続ければ必ず効果はあるのだ。

簡単ではあるが大宇宙空間に充滿すると思われる創造主のパワーと英知とを実感するのに最有力な方法である。

万人が幸せになりたがっている

創造主は人間を楽しませるために作り出したのであつて、苦しませるために創造したのでないことは一〇〇パーセント間違いない。そして「幸せになりたい」という願望を世界中のあらゆる人間がいだいていることも一〇〇パーセント間違いない。しかも幸せに暮らすためには自分の願望が成就されねばならない。

だが世間ではそうは問屋が下ろさない。ままならぬ世の中だと悲嘆に暮れたりする。それはそれで気の毒なこと

だが、しかし想念の用い方を知つて、それを正しく応用すれば、必ず幸せはやつてくる。紙数の都合により、ここで詳細な説明は不可能だが、前述のミラクルワードによる反復思念法とイメージ法を応用すれば、どのような結果でも出せる。

再度言うと、望ましい物事を実現させるには「必ず実現する!」という言葉を一週間で唱えるときも、すでに実現してしまつて歓喜に燃えている光景を心中でイメージとして描き続けるのである。心中で唱えるミラクルワードは自分で適当に作ればよい。

しかし人間個々にはそれなりの大体のカルマ(宿命)がある。どんなにイメージを描いても実現しない場合は、その目標を変えるほうがよいという示唆が与えられたと解して計画を変更するほうがよい。学生は全く勉強をやらずにイメージだけ描いていても試験に合格しない。イメージを描きながら学習すると、合格する道にのつた学習法を採用するようになる。病人がイメージ法に自信がないか、または医学の治療を受ける方がよいという印象を受けるならば病院へいくほうがよい。その場合も優秀な医師のいる病院へ行くように内部の意識が導いてくれるだろう。極端な精神主義はむしろ危険を招くので注意を要する。要は「信念の力、希望の力、絶対にあきらめない力」を失わないことが最重要である。

エイズウイルス漢方薬で退治

中国の医薬専門家は体外エイズ（後天性免疫不全症候群）ウイルスを三〇秒で死滅させる純天然植物薬消毒剤の開発に成功した。

TG901、TG901Aと名付けられたこの二つの消毒剤は北京中聯企業現代化系統工程開発公司の牛風和、趙栄昆の両副研究員らが開発したもので、三年の努力の末、数百種の漢方薬および中国古代製法を選別、比較配合する中で多種の貴重な純天然植物薬を選び出し、科学的抽出方法で開発した。中国予防医学科学院エイズ研究・検査センター、中国軍事医学科学院微生物流行病研究所と北京市性病予防治療研究所などの部門が鑑定したところ、一〇倍に薄められたこの消毒剤はエイズウイルス、梅毒トレポネーマ、淋菌を三〇秒以内に一〇〇パーセント死滅させることができ、死滅時間は目下世界で最も早いことが判明した。

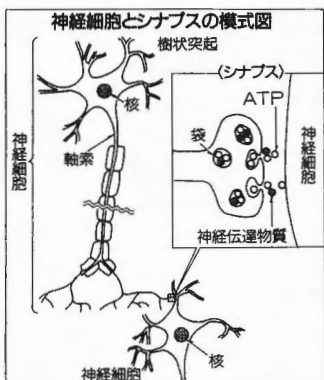
また、カンジダなど腔病原性真菌に対しても非常に強い殺菌作用があり、人体にはなんら副作用がなく、皮膚や粘膜に対しても全く刺激性がない。（12・21毎）

ATPと記憶に相関関係

脳の神経細胞から神経細胞へ刺激が伝わる時、神経伝達物質と一緒に放出されるATP（アデノシン三リン酸）の役割は謎だったが、東京都神経科学総合研究所流動研究員の関野祐子さん、山形大医学部生理学教室の加藤宏司教授らのグループは、ATPが神経細胞間の刺激伝達の効率を高めることで、記憶と深いつながりをもっていることを突き止めた。記憶の仕組みの解明に役立ちそうだ。人間の脳は約一四〇億個の神経細胞が

複雑な回路を形成し、思考や記憶などをつかさどっている。神経細胞と神経細胞が接している部分は「シナプス」と呼ばれ、ある神経細胞に刺激がくると、小さな「袋」の中から神経伝達物質とエネルギー蓄積物質のATPがシナプスのすき間に放出される。

神経伝達物質にはアセチルコリン、カテコールアミン、グルタミン酸など約四〇種類が知られており、隣の神経細胞に直接刺激を伝える。しかし、ATPの働きは一時的に刺激の伝達を促進したり抑制したりすることぐらしかわかつていなかった。（1・7朝）



超重量級ブラックホールか

米航空宇宙局（NASA）は一六日、地球周囲軌道を回っているハッブル宇宙望遠鏡が太陽の重さの二六億個分に当たる超巨大ブラックホールに吸い込まれていると考えられる恒星の姿を写真にとらえたと発表した。

これはおとめ座にあるM87という五二〇〇万年かなたの楕円状銀河の光学観測からわかったもの。観測によるとM87銀河では中心部に近づくと、恒星のばらつきが次第に密になっている

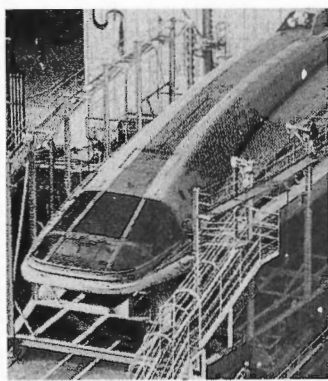
ことがわかり、わが太陽周辺の恒星の密集度の一〇〇〇倍になっているとのデータもある。こうした現象は恒星が巨大なブラックホールに引き寄せられていると考えられる。これは宇宙の初期に存在したクエーサーという天体の年老いた姿かも知れないという。（1・18読）

夢の「超電導船」進水

スクリューを使わない世界初の超電導電磁推進実験船「ヤマト1」が神戸市兵庫区の三菱重工神戸造船所で完成、二七日午前、進水した。早ければ夏から大阪湾で実験航行を開始する。

超電導船は超電導磁石で強力な磁場を作り、ダクトに取り込んだ海水に電流を流すことで、磁場と電流の相互作用により、海水を後方に押し出し推進する仕組み。スクリューを必要としないことから、理論上は一〇〇ノット（時速一八〇キロ）の高速航行が可能。騒音、振動もなく、次世代船として実用化が期待されている。

ヤマト1は「シップ・アンド・オーション財団」（謝敷宗登理事長）が昭和六〇年から約五〇億円をかけて開発。全長約三〇メートル、幅一四メートル、重量二八〇トン、定員一〇人。（1・27読）



低温核融合に「新証拠」

低温核融合の実験を続けているNTT基礎研究所の山口栄一主幹研究員が大量の陽子の発生を世界で初めて検出、また大阪大工学部の高橋亮人教授が一カ月以上続く過剰な発熱反応を日本では初めて確認し、名古屋での国際会議で二七日、それぞれ発表した。

NTTの実験は、パラジウムの小片に重水素ガスを吸わせ、真空容器に於いて観察した。すると約八時間の実験中に、電気を持った一〇〇〇以上の粒子が爆発的に発生する現象を四〜五回確認した。エネルギー測定から、この粒子が重水素同士の核融合で発生した陽子であるのは確実という。

山口主任研究員は「陽子の発生は重水素の核融合が起きた決定的な証拠になる。さらに実験を進めれば、論争に決着をつけられる」と自信を見せている。

一方、大阪大のチームは、パラジウムを陰極にして重水を電気分解する実験を昨年暮れから始めた。発熱はその直後から観測され、一カ月以上たった現在も続いている。この発熱量は平均すると電気分解などに要した人力エネルギーの二〜三倍。最大で約七〇倍に達したとしている。

同時に核反応が起きた有力な証拠になる中性子やトリチウムも検出できた。

高橋教授は「従来の理論では考えられない大量の発熱だ。新しいタイプの核融合が起きているのだと思う」と話している。（1・28読）

「黄金郷伝説」は真実

ペルーの北部、首都リマから八〇〇キロメートルの墳墓で、六つの王冠をはじめ

め、羽の形をした王冠の飾り、神像、楽器、耳飾りなど金製の装飾品が大量に発見された。

日本、アメリカ、ペルーなど六カ国合同の「シカン文明学術調査団」(団長増田義郎千葉大教授)が発見したもの。

発掘作業は昨年六月に始め、一〇月からは砂漠地帯のバタングランデにあるワカ・デ・ロロと呼ばれるピラミッドわきの墳墓発掘にとりかかった。まず、二メートル地下から冠を発見、その周辺から計四一点の装飾品が続々と出土した。シカン文明はインカ帝国の前の時代の



九世紀から一一世紀頃まで海岸地帯に栄えた。

増田団長の話によると「南米各地にはエルドラド(黄金郷)の伝説があるが、インカ以前の時代に、この地区に最初の金の「精製工場」があつて他地区に広がつたとも思われ、バタングランデが「エルドラドのルート」とも考えられるという。(2・1説)

ロシアに雪男

ロシア北部のアルハンゲリスク地方で一月二四日、灰色の長い毛に覆われ、赤い目をした人間そっくりの生き物が突然、道路建設中の宿舎に現れた。その足跡や毛が残されており、「雪男」がこの地方で本当に生存していることを示す証拠と受けとられている。

「雪男」が出現したのは同地方の都市カルフゴリから六キロの地点。兵士らの証言によると「雪男」は二人で、うち一人は身長三メートル近い巨人、もう一人の身長はその半分程度で子供のようだった。子供の方は兵舎のベッドに四つんばいになって入り込み、巨人はストーブの所に立って「ウー、ウー、ウー」とつぶやような声を出していた。兵士たちは最初誰かが縫いぐるみを着ているのかと考えたが、あまりにしぐさが自然なため冗談とは思えなくなつた。まもなく二人の「雪男」は兵舎の屋根に飛び移つた後、森の方向に去つて行つた。「雪男」は昨年末にも同じ兵舎に出現した。また同年夏には付近で熊に襲われた医学者がこの生き物に救出されているという。(2・2毎)

イエバエ駆除にカビが威力

殺虫剤しかなかったイエバエの駆除に、カビの一種「ポーベリア・バツシアナ」が劇的な効果を発揮することが、茨城県養鶏試験場(同県茨城町)と農水省森林総合研究所(同県荏岐町)の共同研究で四日までに明らかになつた。カビの胞子を空中に浮遊させると、ハエが次々と死んでしまうという簡単な方法で、胞子は人間はもちろん、ほ乳類や鳥類にも害がなく、家庭でも利用できる。現在、具体的な駆除マニュアル作りを進めており、

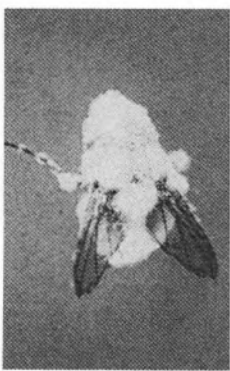
まともれば今年秋にも特許を出願する方針。カビなどの微生物を使ったイエバエの駆除は世界でも類がないという。

効果を確認したのは同試験場の蔵本博久主任研究員(四三)ら。平成元年春からイエバエ駆除の研究のため、ハエの増殖を続けていたところ、病気で死ぬハエが続出。死因を調べると、このカビの存在に行き着いた。イエバエがカビの胞子を吸い込むと、カビがハエの体内で増殖して体液を吸収し、死に至ることが分かつた。

このため、縦、横、高さ各三〇センチの網製のかごにカビの胞子を付着させた親指ほどの特殊な容器をいれ、五〇匹のイエバエを放したところ、四日から一〇日ほどで全て死に、実験を繰り返しても同様の結果が得られた。

イエバエの駆除はこれまですべて薬剤頼み。薬剤の散布を続けると、ハエに抵抗力が付いてくるうえ、大量散布すると人間や家畜にも影響が及ぶ。ポーベリア・バツシアナは培養も比較的簡単で、薬剤と違って即効性はないものの、毒性がないため家庭でも安心して使えるという。(2・4説)

▲ポーベリア・バツシアナに感染して死んだイエバエ。体をおおっているのが体内から出てきた胞子。



筋ジストロフィーは遺伝子欠損に關係

成人のかかる一般的な型の筋ジストロフィーがヒトの遺伝子の欠損と関係しているという研究結果が、六日発行の英科学誌「ネイチャー」にアメリカ、イギリス、カナダなどの研究者チームによって発表された。筋肉の消耗性障害の治療には現在有効な方法がないが、この発見を機に遺伝子を対象にした治療方法開発に道が開けると期待されている。

この病気は「ミオトニクジストロフィー」と呼ばれるもので、成人七五〇〇人に一人の割合で発生する。軽症の患者は発見がむずかしいため、実際の発生率は更に高いと見られている。この病気による死亡例のほとんどは五〇代から六〇代で、心臓や呼吸器の不全によって亡くなっている。

この研究は英ウエールズ大医学部のH・G・ハール氏らが四年かけて行なつたもので、この病気にかかっている人の第一九染色体上には通常より長い区切り目があり、この部分の長短によつて症状の軽重が現れるという。(2・6説)

日本版シャトル飛行実験に成功

文部省宇宙科学研究所は一日早朝、鹿児島県内之浦町の鹿児島宇宙空間観測所(日本版スペースシャトル(宇宙往還機)の開発を目指すミニモデルの「有翼飛翔体」の飛行実験を行ない、成功した。

実験は宇宙研が二一世紀の運用開始を目指して構想中の国産無人シャトル「HIMES(ハイメス)」計画の基礎実験に当たる。ハイメスは今の使い捨ての観測用ロケットに代わつて再利用できる往還機で、今回実験の飛翔体はハイメスの約七分の一のミニ版。(2・15説)

GAP短信

GAP NEWS

▼高松支部UFO写真展、盛況

既報のとおり高松支部は本年二月八日より一日までの四日間、高松市内の「ギャラリー宮脇」で第一回目のUFO写真展を開催。計三五〇名の入場者を得て、最初にしては成功裡に終了した。高松市はUFO問題に関心の強い土地で、しばしばUFOの目撃事件が発生する由緒ある土地。会場でのアンケートにも目撃体験例が寄せられた。詳細報告は本号三六頁。

▼大阪支部特別月例会

大阪支部は来たる五月三日に尼崎市の市立産業郷土会館で特別月例会を開催し、久保田会長の講演と質疑等が行なわれる。これは支部大会に準ずるもので会員は誰でも出席できる。翌四日は神戸を主体に観光の予定。詳細は本号三七頁にある。多数出席されたい。

▼東京本部UFO観測会

日本GAP東京本部は来たる五月三〇日の夕方から第三回UFO観測会を実施する。場所は昨年と同じ神奈川県秦野市の栢窪台地。昨年に引き続き多数の参加者が見込まれる。詳細は本号三七頁。

▼東京月例会セミナー

東京本部月例会セミナーは昨年九月より会場を東京タワー前の機械振興会館に移してから着実に定着し、毎回七〇名前後の出席者があり、和気あいあいたる雰囲気の中に熱気のもつたセミナーが行なわれている。昨年より

テレパシー練習の最高得点者一名に賞品を授与していたが、四月よりこれを中止し、そのかわりに得点を記録しておき、来年三月に一年間の得点数を集計して、最高得点者一名に賞状または盾を差し上げることにした。

月例会終了後は別な場所でも楽しく夕食会を開催する。この場所は一定していないので当日告知する。

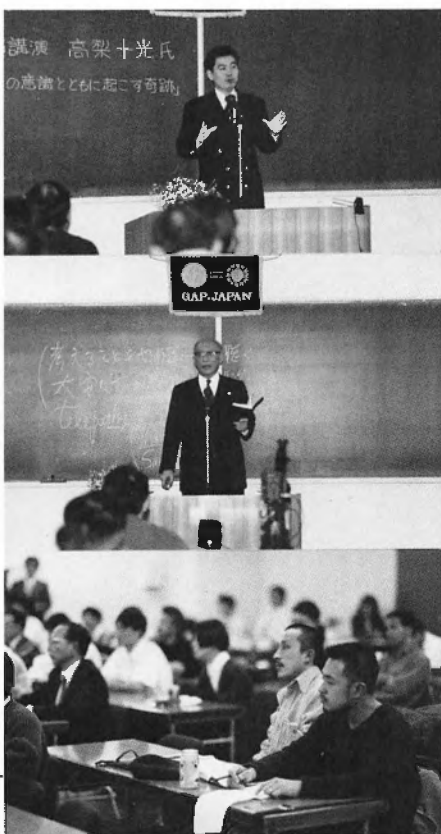
なお五月の東京月例会だけは第一日曜日から第二日曜日（二〇日）に変更するので注意されたい。機械振興会館は日曜日は正面玄関が閉じられているので、右横側面の入口から入ることになっている。

▼今年度海外研修旅行

既報のとおり今年度はカナダ・チリ・イースター島の旅を予定していたが、ワールドセプトラベル社から旅行日程とコースに関して変更が行なわれた。すなわちカナダを中止してアメリカのマイアミへ行き、次にチリのサンチャゴへ到着。ここを拠点にして南太平洋のイースター島へ飛ぶ。帰途はアルゼンチンのブエノスアイレスに寄り、マイアミ経由で帰国する。地球も一周する以上の大旅行になり、日程も一五日間、費用も七〇万円台という豪華版。予告は本号二七頁に掲載してあるが、詳細案内書はワールドセプトラベル社へ申し込まれた。

▼紀南会、月例会を再開

準支部の紀南会は代表の松口氏が長



▶上から二月の東京月例会セミナーにおける高梨十光氏の講演、久保田会長の講義、会場の出席者。

撮影／松村芳之

期入院のため月例会を長く中止していたが病状が好転したため本年二月より月例会を再開した。出席希望者は副代表の小川隆志氏宛照会されたい。電話は〇七三五二二一八三四

▼今年度支部大会

今年度は九月二日に秋田支部が秋田市のアトリオンで支部大会を開催する。詳細は本誌次号に掲載の予定。多数の参加者が見込まれる。

▼今年度東京総会

今年度総会は一月一〇日（二連休の初日）、東京タワー前の機械振興会館の地下二階大ホールで盛大に実施する予定。今回は純然たるセミナー形式で

研修会として行なう。詳細は本誌次号に掲載。大盛況が予想される。

▼特別維持会員制

日本GAPは特別維持会員制を設けている。会員には久保田会長のエッセイ「意識の声」が毎月贈られる。これは素晴らしい内容だと好評を博している。特別維持会に関する詳細は日本GAP本部宛照会されたい。

▼本誌の書店卸しボランティア募集

本誌は全国の主要書店に卸されているが、まだ開拓の余地があるので、卸し要員を募集している。詳細については日本GAP本部宛ハガキで申し込まれた。案内書をお送りする。

「善」だけを探し求めて

テレパシーが発現

★小川隆志

私は昨年七月二十四日に三重大学の講師の先生とお会いしました。この方は松口幸之助さん（日本GAP紀南会代表）の中学時代の国語の先生だった方で、今は三重大学におられまして、心理学の研究と障害者問題に取り組んでおられ、障害児を教えていらっしゃるということです。この方はテレパシーの能力が現れており、言葉をしゃべることの出来ない子供、声が頭の中に響いてくることと、その音声はカセットテープを早回ししたような感じだそうです。

その先生は小さい頃にご両親が亡くなられたのですが、お母さんが生前、「人はタマネギの皮をむくようにとんどんむいてゆけば、最後には善が残る」と言っておられたことを信じ、小さい頃から人々の善だけを見ようと必死に実行しておられたために、ついにテレパシーの能力が発現したのだらうと言っておられました。一回しかお会いしていませんので、詳しくは書けません、アダムスキー哲学は真実であると痛感いたしました。

『生命の科学』に述べてある原因と結果の探求こそ私達がやらねばならぬ事だと思います。これはごく忍耐力を必要とすることですが、頑張つて実践しようと思つていきます。

一カ月半ぐらい前、いつものように此

細なことで「怒り」をあらわしてしまいました。すぐ反省して、なぜこのような想念があらわれるのだろう、いつまでもつても消えないのだろうかと考えました。するとやはり自分と他人との分離感が強くあり、人間同士を区別しているのです。つまり宇宙の一体性を破っているから、そのような怒りの想念があらわれるのだと気づきました。これはアダムスキーが著書の中で何度も書いていることです。「宇宙の一体性の中に生まれ変わろう」と思いました。私は「砂上の楼閣」だったのです。

今、巨大な氷山が話題になっていますが、割れて砕けてしまう流水の上に、いくら立派な家を建てても、いずれは粉々になって崩れてしまいます。頑丈な基盤の上に自分を建て直そうと思つています。現在この世界は大変に困難な問題を抱えており、将来に希望が持てないような状態ですし、また、これからの数年間はいろいろな事が結果として現れるかもしれないませんが、夜空を見上げれば、そこには大宇宙の広大な広がりがあり、私の目の前にも私の内部にも創造主が私達に学ぶ機会を与えてくれています。

この機会を与えられている以上、絶対に希望を捨てない、捨ててはいけない、捨てることは出来ない、強く思った次第です。私は少しずつですが、心の調整が出来てきたようです。

今度こそアダムスキー哲学を真剣に学び続け、確固たる基盤の上に立つて、宇

宙の成長を目指そうと決意しています。

ひびく物品が動く現象

★大嶋順子

最近、自分の周りに不思議な現象が起こっています。無意識のうちに物が勝手に動くんです。最初は昨年の一月初一日、残業しており、夜遅くなったので事務所の中も冷え込んできました。「寒いからヒーターをつけようかな」と考えていたら、スーツとヒーターから暖かい空気が流れてきたんです。ヒーターのスイッチを見ると「ON」になっていますが、私にはスイッチを動かした覚えはありません。

翌日の二日、朝起きて時計を見ると一〇時一五分。一五分後に家を出ようと思ひ、いちいち時計を見なくてもすむようにCDが三曲流れたら自動的に切れるようにセットしました。ところが三曲終わって時計をすぐ見たら一〇時三十七分三十分と一八分です。一曲につき六分としても一八分ですから、本来一〇時二〇分には曲が終了しているはずですが、さらに一月七日の昼、会社がお借りした写真を各企業に郵送するため、郵送料について書いてある「ほすたるガイド」を探しましたが、所定の位置にありません。つい前日の夕方、私自身がちゃんと置いたのに、どこかへ消えています。

そのうち、ふと椅子を見ると、どういうわけか椅子の上に『ほすたるガイド』があるじゃないですか！ まるで「はい、ここにありますが、使つてね」と誰かが

置いてくれたように――。

『ほすたるガイド』は椅子の上の朝刊の上に乗っていたんですが、この朝刊は私が朝来てすぐ置いたものです。それから午前中はずっと他の機のワープロにさわっており、私以外に人はいませんでした。ちなみに私には心靈的な要素は全くありません。

ハードPK能力というのは、「こうなつてくれ」と強く思念し、イメージを描いてから実現する力だと理解しています。しかし私の場合はそのコントロールがなく、私が知らない間に物事が成立しているようですが、自分の願望が実現することにはありますが、意志を用いずに品物がひとりりで動くというのは分かりません。こうした能力が出てきたのは精神的に落ち着いたせいなのかもしれません。一昨年は付き合っている彼を傷つけてしまったことで相当に落ち込んでいました。

五月でしたが、目が覚めたら心臓がひどく痛むんです。「昨日、仕事の事で上司のやつていることに反感をもったからだな」と、痛みがおさまるまで様子を見ようと思ひ、仰向けのままじっとしていると、付き合っていた彼の透明な姿が見えるんです。彼はニコニコしています。

私はだいぶ遅刻して電車に乗り込みましたが、東横線の『学芸大学駅』ホームに電車が滑り込んだときに、なんと彼が立っているのです。彼は大きく口をあけて驚いています。やはり彼は私を思つてくれていたのでしょう。

UFO Appears As I Want
by Naohito Nakashima

思ふ言ふ言ふ言ふ

中島直仁

実は私は平成三年五月頃からUFOに遭遇することが多くなり、一〜二カ月に一回は必ず遭遇していますが、このことを皆様にお知らせせずにはいられなくなり、報告させて頂きました。

一冊の書物で強烈な感動

私は子供の頃からUFOに興味があつて、「いつか遭遇したい」という気持ちを常に持ち続けていました。書店に行つても最初に手にするのはほとんどUFO関係の図書でした。今もそれは続いています。

そんなある日、ある書店で私を強烈に感動させた一冊の本と出会いました。それは『異星訪問奇談』でした。(編注)これは秋山眞人氏の宇宙的な体験を収録したもの。現在は絶版)この書を読んで、この宇宙に地球人以上の平和精神を持ち、そして平和な社会を営んでいる異星人がいることを知り、「いつか遭遇したい」という気持はさらに大きくなっていきましました。

テレパシーで呼び続ける

それからの私は毎日真剣にスペースピープルの方々に長い時間で一時間、短い時間で一〇分間位かけて呼びかけ想念

を送るようになりました。これは平成二年五月頃のことです。

私はあきらめずに想念を送り続け、それは約一年間続きました。次のような想念を送り続けていたのです。

「私は対人関係が非常に悪く、心身ともに衰弱しています。この原因というのも私自身にあると思います。私は小中学校時代が一〇年近くいじめられた生活を続け、それからというもの人が信用できず、しかも他人に対して攻撃的になつていきます。

こうした心の波動が他人に伝わるのでしようか、人と会えば必ずトラブルが起り、嫌がらせを受けます。自分が持つている想念を清浄にし、それが他人に流れるようにイメージすれば対人関係はうまくゆくのでしょうか、なかなか上手に出来ません。スペースピープルの皆様、どうかご指導をお願い致します」

このように続けて一年が経った平成三年五月五日のことです。

この日は宿直で夜中の午前三時頃、私は事務をとっていました。急に夜空が見たくなり、立ち上がって夜空を一〇分ほど見ていました。

「一年経つてもUFOは来ない。やはりダメか」と思ったそのとき、私の目の前を銀色に光る物体がゆつくりと通過して行つたのです。

「何だろう? もう一度出現してほしい」と想念を送り続けました。

すると二〜三分後に同じ物体が再び出現し、今度は私の前でジグザグ飛行をしました。「間違いなくUFOだ」というフィーリングを感じました。このときの喜びと感動は言葉では表現できませんでした。

念ずるとおりに飛ぶUFO

それからというものは一〜二カ月に一回UFOと遭遇しますが、それは今も続いています。これらが飛行機ではないと確信できる理由が一つあります。その物体は私が念ずる通りに飛んでくれるのです。

平成三年五月五日以降の遭遇経過は次のとおりです。

(1)平成三年六月一五日九時四五分、都内新宿中央公園において呼びかけ想念放射を実施。一〇分後、UFOが出現。「私の頭上を飛行してください」と想念を送ると、UFOは頭上に来て飛行し、「光線を放射して下さい」という想念を送ると銀色の光を放射してきた。

(2)平成三年八月九日、同公園において午前一〇時〇〇分に呼びかけ想念放射一〇分後、都庁上空にUFOが出現。何度も旋回運動をしていた。

「スペースピープルの皆様でしたら南に進路を変更してみてください」と想念を送ると、UFOは公園の南方向へ飛び去った。

(3)平成三年一月二八日午後一二時三

〇分、事務室(千代田区三番町)の上空よりUFOを確認。私の前を通過した。

「高速でよく分からなかったのですが、もう一度」と想念を送ると、五分ほど経つてから再びUFOが出現。今度はUFO特有のジグザグ飛行をし、曇り空の中を出たり入ったり曲芸飛行を私に見せた。

(4)平成三年一月二日午前九時三〇分、UFOを呼ぶために新宿中央公園に入った。想念放射前、なにげなく上空を見ると、葉巻型の物体が水蒸気のような物をまといながら、ゆつくりと飛行しているのを発見。その物体は渋谷区上空に消えた。母船のフィーリングを強く感じたので、その物体に対して二〇分呼びかけ想念を送った。母船は来なかったが小型UFOが私の前を通過した。

(5)平成四年一月一五日午後三時〇〇分、事務室より呼びかけ想念放射を行なつたら、約一分後、日本武道館上空にUFOが出現。銀色に強く輝きながらゆつくりと飛行していた。

「オレンジ色に光の色を変更して下さい」と想念を送つたが、UFOは二分ほどしてから消えてしまった。しかし一分後、最初に見た場所から再びUFOが出現。今度はお願いしたとおりオレンジ色に光を変更して私の前を通過した。

(6)平成四年二月五日正午、呼びかけ想

念は送っていないが、霧が関ビル上空にUFOが出現。葉巻型で巨大な物だった。母船のフィリングを強く感じたので、「光を出して下さい」と念ずると、母船は先端より銀色の強い光を放射した。これは今まで見たUFOのなかでは最も衝撃的なものであった。

以上のように私は頻繁にUFOを見るようになりました。見るたびに心はリラックスし、今、私はほっとしています。UFOは私に特殊な波動を放射しているのでしょうか、対人関係が良くなっています。きっと彼らは血のにじむような地球人救済活動をしているのでしよう。私は彼らの行動に甘えすぎたと最近反省しています。

とにかく彼らはあらゆる地球人の命の恩人になることと思います。スペースイプルの皆様と、そして日本GAPの皆様の活動のご苦勞が目に見えてきそうです。皆様の活動のますますのご発展をお祈り致します。

都内の佐々木八郎氏はよくUFOを撮影する人。昨年8月のある日、東京タワーへ昇りたくなくて展望台からUFOを撮影した。氏は衝動を起こしてよくここへ昇るといふ。

カメラ=オリンパスOM-40。フジカラーASA400。プログラムオート。

UFO Taken From Tokyo Tower

Photo by Hachiro Sasaki

東京タワーから撮影したUFO



盛況！ 高松支部UFO写真展

UFO写真展の開催地として必ずしも好条件がそろってはいないが、とにかくやってみようというわけで、本年二月八日(土)から一日までの四日間、高松市内の「画廊ギャラリー宮脇」で日本GAP高松支部主催第一回展を開催した。

事前の宣伝活動で新聞、地元テレビ放送局(西日本放送)でイベント情

報としてPRして頂いたこともあり、UFOに興味ある見学者が多く、ギャラリーは格調高い雰囲気にも包まれた。

四日間の入場者は保守的な土地柄のせいにか三五〇名程度であったが、アンケートは七割の高い回収率があり、その中には驚くべきUFO目撃を報告したのもあった。一九八四年秋の高松円盤降下事件を追証する目撃があり、また三〜四年前に同事件の目撃場所とほぼ同地域の同方角で円盤の丸窓から光が洩れているのを見たという婦人もいた。

今回の写真展の開催により、会員同士の結束は一段と強化され、また会員外の人からの情報入手等により、一般への知らせる運動の重要性を再認識した。

さらにこの写真展には四国内はもとより広島、福山等から応援に駆けつけて頂いたし、各支部からご指導、ご援助をたまわった。このような活動にこれほど周囲から応援をして頂くことは正直に言って予想もしなかったもので、感謝の一語に尽きる次第である。模索することも大切ではあるが、と

にかく実行し体験を積まないことには物事の真実が把握できないことを痛感し、今後の活動に対する態勢のあり方と決意の重要性を一同で語りあった。

この種の活動につきものの批判等を恐れないこと、と云って猪突猛進におちいらず、状況を的確に観察しながら、知的にスマートに事を運ぶようにし、今後さらに知らせる運動に邁進したいと思う。関係者の方々に衷心より御礼を申し上げたい。

日本GAP高松支部代表 関高明



大阪支部のイベントに集合!

★特別月例会

今年も久保田先生を迎えて盛大な特別月例会を開催することになりました。万全の態勢のもとにあなたかくお迎えしますので多数ご来場下さい。観光も楽しく行ないます。

日時 五月三日(日)、午後一時より五時まで。

会場 尼崎市立産業郷土会館、二階二号大会議室。

尼崎市大物町一丁目一番二号 ☎〇六一四八八―三三五一。

※大阪梅田より阪神電車大物駅下車、北へ二〇〇メートル。

会費 三〇〇〇円/夕食会 五〇〇〇円

観光 翌日(四日)実施。神戸港巡り、新神戸よりロープウェイで

布引公園ハーブ園見学。

会費 約三〇〇〇円

宿舎 三日夜のホテルをお世話します。場所は神戸市三宮。シングルのみ税サ込七九三円。

注意 五月第三日曜日の通常月例会は中止します。

★UFO観測会

日時 五月二三日(土)夜から二四日(日)朝にかけて実施。阪急電車の岡

本駅に二三日午後四時三〇分集合。GAP会員に限ります。

観測場所は六甲山系芦屋ロックガーデン風吹岩の所。参加希

望者は平塚宛連絡して下さい。☎〇六一四三六一―三四七八

東京本部UFO観測会

また出るぞ!

昨年度UFO観測会の大成功に続いて今年も第2回テレパシーコールUFO観測会を開催します。会員の精神的結束による高次元な想念波動を放射して、お出ましを願おうではありませんか。今回は昨年以上の素晴らしい成果があがるかもしれません。多数ご来場を。

日時	5月30日(土)夕方6:30に現地へ集合し、久保田会長の挨拶や注意事項の伝達等の後、7:00より観測開始。9:00終了。
場所	昨年と同じ神奈川県秦野市柘窪(とちくぼ)の高台。
参加費	不要。参加資格は日本GAP会員またはその家族知人に限る。
申込	参加希望者は来たる5月25日まで(必着)にハガキで「UFO観測会案内書、送れ」と記したハガキを日本GAP宛送られたい。折り返し参加票、注意書、地図等をお送りする。但し昨年度観測会時に配布した地図を所有している方は「地図不要」と併記する。
宿舎	昨年は秦野市のホテルを斡旋したが、今年は事情により斡旋をしないので、各自でホテルを物色して予約されたい。

George Adamski and Space Brothers
by Alice Pomeroy / Translated by Hachiro Kubota

ジョージ・アダムスキーと異星人

(完)

★アリス・ポマロイ／久保田八郎訳

この記事はアダムスキー晩年最後の高弟として親しく薫陶を受けたアリス・ポマロイ女史が本誌の要請により執筆したものである。あらためてアダムスキーの人物像と異星人問題の実態を浮き彫りにした佳編。二回に分けて連載。



ベトナム戦争に関する秘話

アダムスキーが一九六五年四月に亡くなる前に、彼のために最後の講演会が東部のあちこちで開催されたのですが、その頃、ある講演会でベトナム戦争に関して一つの質問が出されました。アダムスキーはそれを次のように説明しています。

「スペースブラザーズはベトナムの状況を知っていた。もしブラザーズがいなくて、この地球にさほどの関心を示さず、ただ傍観するのみであったならば、おそらく、私たちはもう一つの世界大戦への道を進んでいただろう」

アダムスキーは語り続けます。

「実は、一九五六年にこんなことがあったんだ。

当時、ベトナムは極めて不穏な状況

にあつて、ほとんどのアメリカ国民は知らなかったのだが、大戦争勃発の兆しが如実に見え始めていた。アメリカがすでに、その地域の紛争に深く足を突っ込んでいたことは言うまでもない。

そんなある日、私は休暇中のある空軍将校（訳注：原文からは、飛行機産業の重役」とも解釈できる）とたまたま話す機会を持った。そのとき私はカリフォルニア州のビッグベアレークという避暑地のモーテルに宿をとっていたんだが、朝目を覚まして外に出たとき、隣の部屋に泊まっていた紳士とぼつたり顔を合わせた。挨拶を交わした後で、その紳士は言ったものだ。「いま釣りに行くところですが、それができるのもあと二日しかありません。もうすぐ釣りなんかしていられなくなりそうなんです」

私とその理由をたずねると、彼はまず自分の職業を告げてから、三日後に第三次世界大戦が勃発すると告げられていることを私に洩らしたんだ」

アダムスキーは続けました。

「ちょうどその頃、フランスに一機の宇宙船が飛来して、その国の政府高官たちにあるメッセージを渡して行った。その宇宙船は鉄道の線路上に降りたために、あちこちの電気装置類から火花が飛んで、多くの人々を驚かせたらしい。スペースビープルは高官たちにメッセージを渡すや、すぐにその場を離れたんだが、彼らの乗ったその宇宙船は森林地帯の上空を飛行して行った。そして、ある時点で突然その姿を消したという。それを目撃していた付近の農民たちは、鉄砲やら熊手やら、その他、武器になりそうなあらゆる物を手

にして森に入って行ったらしい。その宇宙船が森の中に着陸したものと考え、探索に出掛けたわけだ。しかしもちろん、宇宙船はどこにも着陸していなかった。それは、森の上空でたんにスピードを増して飛び去っただけだったんだ。

さて、スペースビープルからのメッセージを手にした政府高官たちは「アダムスキーはさらに続けます。

「すぐに各国に連絡を取り、緊急会議を招集した。その結果、九大国の高官たちが速やかにフランスに集合した。ベトナムでの戦闘プランは見直されねばならない。それが動き出してしまえば、もはや後戻りはできない。彼らの警告を受け入れるべきだ。それが会議の結果だった。

ケーブカナベラル基地の場合と同様、ブラザーズは、そのときも見事に地球を救ってくれたことになる。とにかく彼らは、私たちが致命的な状況に陥ることのないよう、ときには直接的に、またあるときには間接的に、私たちに對して、可能な限りの援助の手を差し延べてきているんだよ」

もし私たちが、この世界の歴史を注意深く観察するならば、これまでに起こった戦争のほとんどは、混乱した経済、つまり、景気の停滞、失業の増加といった現象に続いて発生していることに、すぐ気付くはずだ。戦争というものは、皮肉にも、経済を大いに刺



▲最近のアリス・ポマロイ女史。メイン州ウェストニューフィールドの自宅前にて。

撮影/パメラ・ロス (今年2月3日)

激し、失業問題の解決に大きく貢献するものなのです。

戦争よりも宇宙開発が救いになる

ただ、アダムスキーも参加した第一次大戦後の不景気は、幸運にも自動車

とラジオの隆盛によって救われました。しかしながら、やがて一九二九年に再び不景気の波が襲ってきたときには、その救い主となり得るものは、一つも存在しなかったのです。特にそれは、全世界を巻き込んだ大恐慌でした。そこで私たちは過去のパターンをまたも

や繰り返し、あるものに向かつて一直線に進んで行ったのです。何に向かつてでしょう？ 戦争です。

戦争は大きな破壊を生みます。その後では当然、莫大な量の復旧作業、再建作業が必要とされます。その結果、経済は活気づきます。しかしそれも長続きせず、やがてはまた次の新しい不景気が訪れることとなります。実に忌まわしいサイクルです。

こんな理由で人々が戦争を意図的に起こし、自分たちの仲間を殺し続けてきたなどということは、考えるだけでも恐ろしい話ですし、とても信じたくない話です。でも、アダムスキーは語っていました。もちろんそれは、ほんの少数の者たちにしか洩らされませんでした。この忌まわしいサイクルを回転させようとしているのは、金融家たち、多くの富を蓄えた者たち、大きなパワーを手にして他の人々の上に君臨している者たちにほかならない、ということ。

しかしアダムスキーは、私たちの未来に大きく貢献し得る、あるアイデアを持つていました。

「もし私たちが、経済活動の拠点を地上から宇宙空間へと転じたならば、以後この世界は、第一次大戦後に自動車の隆盛とともに手にしたのと同じような状況を、延々と手にし続けることになるだろう。多くの宇宙探査活動が必要とされ、人々はその活動に忙しく携わ

ることになる。当然その活動には多くの機材や物資が必要とされ、その生産のためにも、人々は忙しく働かねばならない」

彼の顔は生き生きと輝いています。「しかも、そのとき私たちは、破壊に向かつてではなく、実に建設的な目的に向かつて進んでいるんだ。真の文明開化に向かつてね！」

そして、宇宙を目指すプロジェクトには終わりというものが存在しない。達成すべきことがあとからあとから出てくるんだ」

そして最後に、彼はこう言って話を締めくくりました。

「もし私たちがその道を選んだとしたら、そのとき私たちは、この世界でこれまで人類が下したいかなる決定よりも、遙かに素晴らしい決定を行なったことになる」

ブラザーズは、私たちが宇宙に飛び出すことを、長年に渡って願っていたしてきました。そして、私たちには想像もつかないほどの、実に様々な手段を駆使して、私たちがずーっと援助し続けてくれているのです。その一環として、彼らは、私たちのあらゆる建設的な活動にひっそりと関わっています。誰にも気付かれることなく、私たちに混じって様々な仕事に従事しているのです。他の人々のためにそんなことができる地球人が、いったいどれほどいるでしょうか？

スペースビープルの絶大な援助

かつてアダムスキーは、レナード・クランプという英国人科学者と会見したときのことを話してくれました。英国政府のために働いていた科学者で、『宇宙・重力・空飛ぶ円盤』の著者でもある人物です。

アダムスキーは言っていました。

「彼(クランプ)は今、研究所で数人のスペースビープルと一緒に働いていると語っていた。私は彼のその言葉を信じるね。彼はウソをつきそうな人間には全く見えなかったからね」

さらにアダムスキーは、もう一つ、同じような話をしてくれました。ニューヨーク州バッファロー市での講演の中でです。

「ある日は、ドイツ人のある偉大な科学者にお目にかかり、親しく会話を交わしていました。テーブルに座り、ビールを飲みながらの会話だったので、そのとき彼は、私にこう耳打ちして来たのです。『実はね、ジョージ、私たちがこれまで成し遂げてきたことの中で、私たちの力のみで成し遂げ得たことは、一つもないんだ。私たちはずっと援助されてきたんだ』『ほう、誰から?』

私はたずねました。

するとその科学者は、

「君はもう分かっているはずだ」

そう答えたのです」

つまり、その科学者はアダムスキーに、「自分たちはスペースビープルの援助を受け続けてきた」と語ったのです(訳注)右の科学者はヘルマン・オーベルト教授)。

アダムスキーはまた、近くにいた私たちにこんなことも話してくれました。

「実はね、私たちはすでに、物凄い科学的進歩を遂げているんだ。ただ、安全保障上の問題から公表が押さえられていることがとても多い。それらの内容を知らされたら、まず誰もが驚くだろうね(当時はまだ冷戦の最中で、不安定な停戦があちこちに存在していた)。

でも、いつ他の国から攻撃を仕掛けられるか分らないといった不安に満ちた今の状況下では、それらの内容が公表されることは決してないだろう。ただし、そんな状況もそう長くは続かないような気がするけどね。一〇年もしたら、それらの内容が少しずつ表に現れてくるんじゃないかな」

彼の話は続きます。

「例えば、私たちはすでに、家中の埃を自動的に取り除くことのできる技術を開発している。その技術を用いると、家の中でこのように埃の粒子群が飛び回ったりするのを、もう私たちは見なくすむことになるんだ」

そう言いながら彼は、部屋の中を浮遊する埃の粒子群を、感慨深げに眺めていたのです。思うに、そのとき彼は、かつてブラザーズの宇宙船内から

眺めたあの躍動する粒子群、つまり、宇宙のホタル群のことを思い浮かべていたのではないのでしょうか。彼は埃の粒子群という言葉で、例えば話の中などでもかなり頻繁に用いていたものです。

「それから……」

アダムスキーが続けます。

「私たちはすでに、メスなどの刃物類を使うことなく手術を行なうための原理も理解しているんだ。今はまだ刃物を使っているから術後に傷が残ってしまうだろう?でも、その原理を利用すれば、一切傷が残らないんだ。

さらに私たちは、この地球上で肉体の健康を維持するための遙かに効果的な方法についても、すでに知っている。それが発表されれば、まさに、現代の奇跡と言われるだろうね。

科学は、私たちが眠っている間にも着々と進歩を続けてきた。その中で彼らの貢献は計り知れない。それは私たちがだけの力で成し遂げてきたことでは決してないんだ。本当だよ!」

ブラザーズの来訪に対する喜びと、彼らの援助に対する深い感謝の意をその表情ににじませながら、アダムスキーは熱つぽく語り続けます。

「彼らがどんなに多くの援助をしてくれているかを、もし人々が知ったならば、彼らはもう、とてつもなく多くの援助をしてきているんだよ! その事実を知ったなら、まず誰もがひざ

まずいて、彼らのこれまでの努力に對して、最大の敬意と感謝の意を表すだろうね」

ブラザーズは、とにかく様々な形で私たちが援助しているのです。そしてそれは、私たちの想像を遙かに越えたもののようなのです。

消えた空軍飛行兵

訓練飛行中に三人の空軍飛行兵が消えてしまったという有名な話があります。彼らはパナマ運河流域のフォート・アマドールを出発してワシントンDCの空軍基地に到着するや、そこで訓練用戦闘機USAF三〇に乗り換え、三時間分の燃料とともに訓練飛行に飛び立ちました。しかし、それから六時間が経過したというのに、その訓練機は帰還しません。基地内には重苦しい空気が流れています。

とそのときです。管制塔へのいかなる通信もないまま、その訓練機が突然帰還して来たのです。でも、何か変です。その飛行機は、着地後の滑走を全く行なわなかったのです。

関係者たちがおそれるおそれる近寄り、中を見ます。飛行兵たちの姿はどこにも見当たりません。そしてもちろん、燃料タンクは完全に空っぽでした。

この不思議な事件に関しては、もちろん様々な憶測が飛び交いました。そしてこの事件のあとで、アダムスキーは、ある政府高官から手紙を受け取っ

ています。事件の顛末を記し、それに関する彼の見解を求める手紙でした。

それに対してアダムスキーは「おそらく、飛行兵たちを保護したスペース・ピールが訓練機のみを戻してきたのだろう」と書き送りました。するとその政府高官は、再びアダムスキーに手紙をよこし、自分たちも全く同じ意見だと伝えてきたそうです。そのやりとりが公表されることは、もちろんありませんでした。

ブラザーズは、もしも燃料が切れて久しい訓練機とともに帰還したならば、彼ら（飛行士たち）がどんな扱いを受けることになるかを十分に認識していたはずで、彼らの話を誰が信じたでしょう？ 彼らはおそらく、嘲笑され、罵倒され、もしかしたら、裁判にかけられ投獄されるといったことさえなっていたかも知れません。そこでブラザーズは飛行士たちにある選択の機会を与えたのです。基地に戻るか、それとも、彼ら（ブラザーズ）のところに留まるかの選択です。

これまでの歴史の中で、ブラザーズたちは、この他にも多くの地球人を様々な難事から救い、保護してきたようです。突然不思議な失踪を遂げたり事故に見舞われたりして、すでに死亡したものと推測されている人々の中には、彼らに救助され、以後彼らとともに暮らすようになった人々が、決して少なくないといえます。おそらく、地

球の宇宙飛行士たちが宇宙空間で災難に見舞われたときにも、ブラザーズは可能な限り救助の手を差し延べているはずで、

ブラザーズは、私たちの活動を実によく観察し続けているのです。それ一つだけをとつても、彼らが人的資源、時間、エネルギー、装置類を駆使して私たちのためにどれほど多くの労力を費やしてくれているかが、よく分かるというものです。

また、これもアダムスキーが語っていたことですが、ブラザーズはすでに別の太陽系内で人類の居住が可能となつたばかりの新惑星を発見しているという事です。さらに、すでに彼らは自分たちの惑星から志願者を募り、その志願者たちを、必要な機材や物資群とともに、その新しい惑星に送つているということでした。そこに人類のための新しい社会を建設するためです。そして、もしかしたら、この地球上から突然姿を消した私たちの仲間たちも何人かはその楽園の建設に携わっているかも知れないのです。もしそうであれば、地球の人類もすでに宇宙に飛び出して彼らの活動に参加しているということになります。

それはもちろん、私たちの住むこの地球という星を、この太陽系という家族の真の一員とするためには、まだまだ多くのことがなされねばなりません。でも、アダムスキーの語つた次の言葉

は、私たちの心をとてまなごませるとともに、大きな希望で満たしてくれたものです。

「私たちが自分たちの宇宙船でその惑星に出掛けて行って、そこで、とつくの昔に死んでしまったものと思つていたジョーンズさん、あるいはスミスさんなどが生きていて、しかも素晴らしい健康を保っているのを目の当たりにしたとしたら、いったいどんなだろうね？」

そう言つた後で彼は、実に愉快そうに笑つたものです。

グレン中佐も見た宇宙のホタル火

▲ジョージ・アダムスキー

ある講演の中でアダムスキーは、その類稀なるユーモアを交えつつ、自分の宇宙体験の一つに関して次のように語っています。

「そのときは、円盤が私を母船まで連れて行ってくれました。そしてその中から、私はある現象を目撃しています。このことは、一九五五年に出版された私の著書『宇宙船の内部』（訳注Ⅱ中央アート出版社発行、新アダムスキー全集第一巻『第二惑星からの地球訪問者』に収録）の中でも触れたことです。確か、（原書の）七六頁だつたと思います。そこで私は、真つ暗な宇宙空間で目撃した『ホタル現象』について述べ



ています。それはまるで無数のホタルが光を発しながら様々な方向に動き回っているかのような光景でした。

さて、それから七、八年が経過した今、ジョン・グレンが大気圏外を旅しました。そしてそこで彼は全く同じ現象を目撃し、伝えてきたのです。その描写に用いられた言葉も私のものほとんど同じでした。

(訳注Ⅱ一九六二年二月二〇日、アメリカ海兵隊のジョン・グレン中佐はフレンドシップ7に乗り込んで最初の有人飛行を行ない、地球を三周して着水した。記者会見で彼は大気圏外の暗黒の空間で無数の「ホタル火」を見たと言表し、アダムスキーの記述と一致したというので大問題になった)

人々というのは、真実を伝えられても、なかなか信じようとしません。そして、それが真実かどうかを確かめようとして、実に莫大な費用を費やすのが常です。

彼らは私からある真実を伝えられませんでした。しかも、ただで——。しかしその真偽を確かめるために、なんと五千万ドルもの大金を費やしてジョン・グレンを宇宙空間に送ったのです！私達がいかに疑い深い生き物であるかを如実に示す一例です。

まあ、それは冗談だとしても、いずれにせよ、ジョン・グレンは私と全く同じものを見て、それを全く同じように報告してきたのです！」



▲ジョン・グレン中佐

さらにアダムスキーは話し続けます。「かつては私の話を誰も信じませんでした。もちろん極めて少数の人々を除いてです。でも、今やそれも徐々に変化しつつあります。今や私はとにもかくにも証拠を手にしたからです。ほんの少しの、しかし実に確かな証拠です！」

そして彼の話は、最後の詰めに入ります。

「ジョン・グレンは、あの現象を目撃してその報告をするために大気圏外に出ねばなりません。では私はどうやってそれを目撃できたのでしょうか？もし私がサイキック（心靈能力者）でここにいながらにしてそれを目撃できたとしたならば、私はまさに飛び抜けたサイキックです。あんなに正確に描写したんですからね。」

でも違います。心配はご無用です。

私もまた間違いなく大気圏外に行きました。ただ違うのは、私の場合そこに行くのにお金がかからなかったという点だけです。彼らにタダで乗せてもらったおかげで、私はいかなる税金も使っていないんです！」

以上の話は、アダムスキーが晩年の一九六五年に行なった、ある講演の中からの抜粋です。彼の主張する大気圏外の様子や、他の惑星に関する真実が、徐々にですが、ようやく人々から受け入れられ始めていた頃でした。ただし、彼の忠実な追隨者たちが彼を強く支持する一方で、なおも彼の主張は、その他の多くの人々にとっては、文字通り、あるいは比喩的にも、「外の世界のこ」と「であり、とても奇妙な話として響いていました。とはいえ真実は一歩一歩確認されつつあったのです。」

科学的な立証が続出した

「空飛ぶ円盤は着陸した」(訳注Ⅱこれも新アダムスキー全集第一巻に収録されている)の中でアダムスキーが述べた金星人との面会の事実もまた懐疑論者たちの格好の攻撃材料でした。

しかしながら、一九五九年一月になって、金星の大気中における水蒸気の存在が、ある科学者たちによって確認されました。さらに一九六〇年二月には、米国ロケット協会の創始者エドワード・G・ベンドレー博士が、「金星は居住に適した素晴らしい惑星かもしれない」というコメントを発しています。

続いて、一九六四年一二月、ジョンズ・ホプキンス大学の宇宙物理学者たちは、金星を取り巻く雲は、地球上空で見られるものと酷似した氷晶(訳注Ⅱ大気が〇度以下に冷却されたときにできる水の結晶)群、つまり水によって構成されていると発表しています。

また、その研究に携わっていた同大のストロング博士は、後にマリナー探査機による発見事に言及し、その探査機が収集した金星の気温に関するデータの解釈は極めて不透明なものであり、全ての科学者がそれを受け入れていくわけでは決まらなと述べています。

酸素の源である水の存在に加え、最近ではその大気中に二酸化炭素が含ま

れていることも確認されています。金星上に生命の存在する可能性を示唆するデータが次々と明らかになってきているのです。

また、アダムスキーは『宇宙船の内部』の中で「月には大気が存在する」と語りましたが、これもまた、当時の人々にとっても信じ難いアイデアでした。ところが、一九五九年に月に到達したソ連のロケットは、月が「低エネルギーのイオン化された気体群の層」に覆われていることを示す情報を送り返してきたのです。ソ連の科学者たちは、それをとても大気に似たものだと結論付けたものです。そして今や、月に大気が存在することは全くの常識となっています。

さらに、月面の人工の構造物群を映し出した写真群が、NASAからも続々と公表されるようになりました。NASAが撮影した写真群に映し出されたそれらの物体を指差しながら、アダムスキーは、その形状からして、それらが自然の創り出した物ではあり得ないということを強く主張していたのです。

アダムスキーはまた、この太陽系にも、他のすべての太陽系同様一二の惑星が存在しているということを私たちに何度となく力説していました。冥王星の外側に存在する一〇個めの惑星が発見されたというニュースが飛び込んできたのは、そんなある日のことでした。

た。彼の説明によると、もう二つの惑星はそれよりもずっと遠くにあるために、地球からの観測でそれらを見えるのは相当難しいだろうということでした。

彼はまた、アステロイド帯についても詳しく描写しています。『さらば空飛ぶ円盤』（新アダムスキー全集第六巻『UFOの謎』）の中では、それを図示することで、より分かりやすい説明を展開しました。アステロイド帯とは、ご存知のように、太陽から四番目の惑星の外側、八番目の惑星の外側、そして、最後の一二番目の惑星の外側に存在する粒子群の層で、それらには、太陽からの放射線を引きつけて加速する働きがあります。そして加速された放射線は、それらの層の隙間を通り抜けて、より遠方の惑星群にも充分に到着し、それらの惑星に生命の維持に必要な光と熱とを供給しているということです。

また、私が今この原稿を書いている間にも、ある天文学者たちが、三万三千年光年彼方の宇宙空間に、地球の一〇倍ほどの質量を持つ「奇妙な」新惑星を発見したというニュースが飛び込んで来ました。もしそれが確認されたならば、それは、私たちの太陽以外の星の周りを回る惑星の初めての発見ということになります。その惑星はあまりにも遠方にあつて光不足のため、いかなる光学望遠鏡でも確認は不可能です。

そのため、その惑星の公転軌道の中心にある星から発せられるかすかな電波の変化を探知することによって初めて突き止められたということです。この宇宙には私たちの太陽系以外にも無数の太陽系が存在するのだということをアダムスキーは何度私たちに語ったことでしょうか！

彼はまた、地球の科学者たちがなぜ彼の主張を受け入れようとしなかったのかについても、よく話していたものです。その大きな理由の一つとして挙げられたのが、地球の観測装置の未熟さでした。しかし今や、より優れた装置群が開発され、それによってアダムスキーの主張を裏付け得る発見が、少しずつ表に現れるようになってきました。もし彼が今も健在で、最近の技術的進歩とそれによる発見事群を目の当たりにしたならば、どんなに喜んだことでしょう。

すさまじい妨害と アダムスキーの不屈の信念

アダムスキーは、彼の主張する真相に異議を唱えるのみならず、それらを自由に語ることをさへ妨げようとする人々により、長年に渡って常に苦しめられ、悩まされてきました。その良い例が、あの「メン・イン・ブラック」（黒づくめの男たち）による脅迫です。彼らは、真つ黒の服を着、真つ黒の帽子をかぶり、真つ黒の乗用車に乗って現

れました。彼らは、アダムスキーのみならず、他の様々なUFO研究者たち、特に、宇宙の真実に気付いた、あるいは気付きつつある研究者たちを次々と訪問していたのです。彼らの意図はもちろん、真実が一般に洩れることを防止することにあります。彼らは研究者たちを訪問し、もし黙らなかつたならば恐ろしい結末が待っているということをおわせ、脅し続けました。

あるときアダムスキーは、彼らもスペースビルではないのか、と尋ねられたことがあります。そんなとき彼は、毅然として言い放ったものです。

「いいかい、まず第一に、スペースビルは私達が真実に気付くよう注意を促すために来ているんだ。その彼らが、私たちがその真実を語ることをなんでも妨害するんだい？ 彼らがそんな馬鹿なことをすると思うかい？ そんなことはあり得ないじゃないか。絶対に違う！ 私たちを黙らせに来る連中は絶対にスペースビルではない！ 彼らは間違いなくこの世界の人間だ。彼らは私たちを黙らせるためには手段を選ばない。恐ろしい脅迫をしたり、大金を積んだり……。それで黙ってしまった人々が決して少なくないんだ」

ちなみに、かつて真実を堂々と口にしていたある海軍将校の場合は、彼らによって六カ月間も海辺のある場所に幽閉された結果、神経がボロボロになってしまい、それ以降、ウサギのよう

に押し黙ってしまったということです。「私はどんな脅しにも負けなかった」とアダムスキーは言っていました。「これまで私は、常に真実を語り続けてきた。だから今でも彼らは私との接触をやめないのだ。そしてこれからも私を通じて多くの情報が人々に伝えられねばならない。私はまだまだ話し続けるよ」

彼は大いなる勇氣に満ちた人物でした。

「私はメン・イン・ブラックの意図を知り抜いている。彼らがなぜ私に付きまとうのかを証明し得る、新聞の切り抜き記事その他の情報群が満載されたスクラップブックを、私は今、六冊も持っているんだ。彼らはとにかく執拗に接触して来る。以前は今よりも遙かに酷くて、私にとつてもそれは大きな恐怖だった。でも絶対に服従はしたくない。それである日『ここはアメリカ合衆国なんだ！』と自分に言い聞かせて弁護士に相談したのだ。そして彼が「いいアイデアを出してくれだ」

アダムスキーに対する激しい攻撃を仕掛けて来る人々は他にもたくさんいました。でも彼がそういった人々に対して腹を立てたりすることはほとんどありませんでした。それらの人々の真の意図を充分に理解していたからです。その種の敵対者たちに対して彼は常に寛容と思ひやりを忘れませんでした。彼は言ったものです。

「彼らは自分で正しいと思っっていることをしているだけなんだ。そしてそれはとても大切なことだ。やがて彼らもいつかはより大きな理解を手にすることになると思うよ」

しかしながら、その彼にとつても、メン・イン・ブラックは大きな脅威でした。彼らは、自分たちの意図に従わないアダムスキーを、直接、あるいは人手を使って、あわよくば殺しかねないといった状況だったのです。ただ彼らも、アダムスキーが問題を弁護士の手に乗せて彼らと対決する決意、つまり、法廷闘争に持ち込む決意を固めたことを知るや、それまでの戦術をやや穏やかなものに変更しようです。もし裁判官にでもなれば、彼らの正体が白日の下にさらされることになってしまふからです。

またアダムスキーは、ブラザーズとのコンタクト開始以来、FBI、CIA、空軍、国務省その他の政府関係情報機関からの接触をも常に受け続けていました。それらの人々との数多い接触体験から、アダムスキーは、後に自身が名付けた「サイレンス・グループ」という一団には、実に多くの顔あっている姿があるということに気付いていました。正体のつかめない組織群からの接触や妨害も決して少なくありませんでしたし、さらに彼は、一般の政府関係情報機関よりもはるかに秘密裏に活動を展開している、ある国家的組

織の存在にも気付いていました。

一九五九年に敢行した世界講演旅行の中で、アダムスキーはそのサイレンス・グループによる妨害をあちこちで受けています。オーストラリアではひどい混乱を体験しましたし、フィンランド行きは中止をやむなくされました。

さらには、彼がよく口にしていたことですが、スイスでは死の危険にさえ遭遇したようです。もしブラザーズの援助がなかったならば、自分はあのツアーから「棺オケの中に入れられて」帰国することになっただろう、とさえ言い切っていました。

そのときに彼は、さらにこう続けたものです。「イエスが両替商たちを寺院から追い出した事実に関しては、これまで多くの人々が語ってきたけれど、その両替商達のその後のことに関しては誰も語ったことがないよね。実は、彼らは今でもまだある所にたむろしているんだ」

アダムスキーが言うには、その後彼らはスイスに集結して、いまだにこの世界の金融市場を操っているということでした。

反対派の実態

そして彼は、今ではかなりの人々が察していることですが、この世界の主要国家のほとんどが様々な情報機関群を持ち、それぞれの国のために活動を続けているのはもちろんのことだが、

それらの国々には別の情報機関群も存在し、それらの機関群は国家のために活動ではなく、国際金融組織のために活動している、とも語ったものです。もちろんおおよその席ではなく、親しい仲間たちのみを前にして語ったことです。

今や真のUFO研究者の間では周知の事実ですが、彼はまた、この世界のエネルギー支配者がスペースビープルに関する真実、特に、彼らの宇宙船の飛行原理に関する真実が知れ渡ることを極度に恐れているという点にも触れていました。もしスペースビープルの宇宙船が自由エネルギーを用いて航行するという事実が公表されたならば、彼らが牛耳っているこの世界の経済が多方面において大混乱に陥るであろうことは疑うべくもありません。

もう一つ、アダムスキーがよく話していたことは、サイレンス・グループは、心霊的あるいは神秘的な主張を繰り返している人々に対しては全く干渉しないということです。彼らは自分たちの言いたいことを自由に話すことが許されています。ときにはそうすることが奨励されたりさえします。結局、事実ではないこと、あるいは、歪んだ事実を主張する人々は、やがて自分たちの手で信用を失うことになるからです。

しかしながら、正しい情報を語ろうとする人々は、真実が洩れることを喜



◀ジョージ・アダムスキー。右はベルギーGAP主宰者であったメイ・モルレ女史。現在も老齢ながらオーストラリアで健在。

ばないサイレンス・グループの圧力によって沈黙を強いられることになりま

す。そこでアダムスキーは、よく言つて

「私の持つている情報は、どうも正しいものようだ。さもなければ、彼らが私を脅かしたりする必要など全くないわけだからね」

もし私たちが十分に賢ければ、UFOあるいは異星人に関する何らかの情

報に接した場合、この公式を用いることで、つまり、その情報がどんなところから、あるいは、どんな経路によつてもたらされているのかを考慮することで、その情報の信憑性をかなりのところまで自己判断できるはずだ。

現在、異星人の存在、および来訪の情報に関心を示す人々の数は、確実に増加してきており、その情報が常識的、論理的に納得し得るものであった場合、それを事実として受け入れる人々の数も、日増しに増加傾向をたどつています。しかし、もしその情報が心霊的あるいは神秘的なグループを通じてもたらされたものであったならば、それについてまでも大きな興味を示し続ける人々はほとんどいないと言つてもいいでしょう。当然サイレンス・グループはこのことをよく知つており、様々な情報に注意深く目を光らせています。多くの人が正しい理解とともにUFO群に思いを馳せたならば、そのときあの「両替商」たちの基盤は大きく揺らぐことになります。それで彼らはそれを恐れているのです。

宇宙的な人々はふえていく

友好的な異星人たちに思いをめぐらしつつ空を見上げるとき、人々の心には、この地球に平和と幸せをもたらすべく活動する彼らの姿が生き生きと描き出されることとなります。そこには、自分の仲間達に対する怒りや憎しみの

感情、ましてや戦争のアイデアなどは到底入り込めません。一度宇宙にしっかりと目を向けた若者たちは、血塗られた戦場などに送られることを、毅然として拒否することでしょう。

ギャロップ社が行なった最近の調査では、UFOの存在を信じないアメリカ人は、全体のわずか三〇パーセントのみであるという結果が出ています。私たちの主張を一部のみであれ受け入れつつある人々の数は、まさに増加の一途をたどつていると言えるでしょう。もはや大衆からUFOへの関心を取り払うことは不可能な段階に達しました。アダムスキーが私たちに伝えた真実は、ブラザーズや彼らの宇宙船群の助けを得て着実に人々の間に広まりつつあるのです。

ただ、私たちにはまだ警戒しなくてはならないことがあります。私たちがすべての異星人が高貴な異星人ではないという事実にも目を向けねばなりません。かつてアダムスキーは次のような話をしてくれました。

あるときアダムスキーは、エジプトのあたりで行なわれたある考古学研究のための発掘調査に関するテレビ番組を見ていたのだそうです。アダムスキーが私たちに言いました。「あれは、五千年から二万年ほど前に建造されたものだ。彼らが発掘したその建物は金星人たちの寺院だった。それは、かつて金星人たちが地球にや

つて来て自分たちの惑星と同胞たちを敬つて建てたものだったんだ。その寺院がどれほどの期間そこに建っていたか、あるいは、彼らがその寺院に礼拝しながらどれほど長く地球に留まつていたのかについては、まだはっきりしていない」

彼は続けました。

「とにかく、それはある一定期間、そこに建つていた。そして、発掘されたのはその建物の一部だったんだけど、それは、ほとんど無傷の状態が残つていた。そしてそれは金星人たちがなぜそこを去つたかということを実に示すものでもあった。それは実は後からやつて来た某惑星人たちによって破壊された金星人たちの寺院の残りの部分だった。後に某惑星人たちはほとんどその真上に彼ら自身の神を祭つた寺院を建てている」

そして彼は私たちに警告したもので

「さて、そんな証拠物件が出現した今、君たちはどう思う？ 地球の各国政府が、宇宙の彼方からやつて来る連中のすべてが好意的ではないかもしれないと考へて、彼らに対して警戒心をいだくことも、ある意味では賢いと言えらんじやないか？ 事実、かつて起こったことが今起こらないという保障はどこにもない。だから、政府が用心深い態度を取っているからと言つて一概には責められないと思うよ」

Letters

ユーコン広場



素晴のついで「生命の科学」

岐阜県 加藤啓子

一昨年一〇月より名古屋支部の月例会に出席させて頂いております。と申しますのは昨年三月頃御縁があり、ある知人の方よりアダムスキー著「生命の科学」を拝借拝読し、あまりの内容の素晴らしさに感動致しました。この地球上に誕生して四七年(私の年齢です)、何かと過酷な人生の中で迷いながら人間とは、魂とは、生命とは、宇宙とはなど常々思いついておりましたこと、解答が、まことにシンプルで、まるでつれた糸を解くように平易な文体で表現されていたからです。地球上にこのような素晴らしい書物が存在することをなせもつと多くの人々が知ろうとしないのでしょうか。これは今の私の正直な疑問です。

昨年八月頃より夜空に時折光体を見るようになりました。最初は天空にホタルが舞うような形でしたが、しだいに流星のように、しかし流星よりは遅く飛行機よりは速い速度で水平に飛ぶ光体となり、一昨年一〇月一九日には「く」の字型に飛ぶ光体を見て驚きと感激でいっぱいでした。昨年に入ってから光体は金星よりずっと大きくなり、最近では六月二六日(水)には満月の月明りの中で覆のような薄い雲のペールの中を光る真珠玉のように飛ぶ光体を見て唯々感激してしまいました。私

投稿歓迎字数を問わず。匿名発表可能なも住所氏名明記のこと。

はもう私の想念がスペースビープルの方々に確実にキャッチされていることを疑えません。そして光体を見た後は特に心から宇宙の万物に感謝しないではいられません。

活性化する支部活動

名古屋支部代表 林 国宣

名古屋月例会ですが支部としては最近一〇名前後の方々が来場され以前よりは多く出席されてきました。また一人一人の自主的な姿勢が以前よりははつきりとまた強くなってきたようにも感じられます。中央アト出版社刊の新アダムスキー全集の効果もあってか全集を見て入会された方も最近二、三名程度来場されたりUコンを見て入会された方もあるようです。そのような中でここ二、三年

いや一年間という期間にUFOらしき目撃または明かにサイン雲としかいいようがない目撃等が多くなっているようです。一人一人の意識の変化によるものであると思われるのですが、いずれにしても九〇年代に入ってからというもののUFOの活動や国内のスペースビープルの活動がいつになく活発になっていっているのと思う昨今であります。

今後ともGAP活動を継続させていきますので宜しくお願致します。

貴重な内容の本誌

山形県 泰山晃治

先日Uコン一六号をお送り頂きました。有難うございました。毎号共々素晴らしい内容で高揚した気分になります。一六号はイメージ法と反復思念法の特集としてやる気が出てくる貴重な内容です。

さて一五号ですが三部売れ残りので残部二冊と売上金を御送金致します。店長より毎号楽しみにして買っていく人がいると聞きまして嬉しくなりました。

私がGAPで学んだこと

東京 清水 正

昨年は「日本GAP」設立三〇周年、大変おめでとうございます。三〇年間アダムスキーのコーワーカーとしての役割を堅実に歩んでこられました不屈の信念に申し上げる言葉もありません。土下座して頭があがらないような気持ちです。

私は半分の一五年間GAPにささやかながら協力させて頂きました。私が二歳の入会でGAPとアダムスキーを知ったのは二〇歳の頃でした。最初は宇宙哲学から受ける深遠さに絶対的な確信を持ち、私が本来求めていたものに会ったように思いました。「宇宙の意識」という言葉に人生が前向きになり人類の進歩向上は個人の宇宙的な変化が必要なんだと今も変わらない思いです。物質ばかりを求めても全体の中で悲痛な思いがある限り、物を得た人にとってはどこかに風穴があいた状態ではないかと思えます。全体は一つ、どこも分離するものはないのなら、欠

けている部分にはほどこしをして頂けて喜びあえるようになったらとのイメージがいつも湧いてきます。

GAPで学んだことに相手の立場になつて考える、人の話を聞くというのがあります。自分に余裕が少しあるならその分欠けているところに愛を形や行動にしていけたらどんなに社会は良くなるだろうかと思ひます。社会が自己防衛と自己増長にある限り、かたよりがでてくるのではないか、分裂感にさいなまれてしま

うのではないかと感じています。一番必要なことは思いやりにつづるのではないのでしょうか。GAPで学んだことに自己を客観視するというのがあります。常にできてはいませんが一人になったとき反省して、あの時あの場面での言動や行動について見つめ直すことができるようになったと思います。忙しい中で対人関係で自らの習慣を発見していくことはむずかしいのですが、ふと気づいたときの感情のアンバランスを一人になって修正することが前よりできるようになったと思います。そして一人で満足しないのでこのアンバランスな感情をバランスよく保つために行動を次回に失ったマイナス感情を対人関係の中で暖かな調和の方向へ向ける努力をしています。このいう意欲を持ちます。GAPの人は前向きで向上心に溢れた素晴らし

い方々ばかりです。GAPの人は自己の内部にある宇宙の意識と一体となるための活動をしています。ですから欠点を堂堂と立ち向かい勇気を持って対面していくことが必要となつてくるのでしょうか。久保田先生、私たちに宇宙哲学や

UFO問題での多くのお話をして頂きました。ありがとうございます。今後とも深遠なお話を元気で続けて下さいますように宜しくお願い致します。

「生命の科学」で自己改革中

三重県 小川隆志

Uコン一六号のアリス・ポマロイさんの「ジョージ・アダムスキーと異星人」は特に感動致しました。人類の愚かさやアダムスキーの決して諦めない信念、自分自身をこの世界のために創造主に投げ出したその勇氣と使命感には本当に「ガーン」ときました。

いま私は「生命の科学」にあつた「宇宙細胞と非宇宙細胞」について注目しています。その中に「我々の心に表れる習慣的想念は肉体の非宇宙細胞からほとんど来ている。しかしそのことを認識すれば非宇宙細胞は宇宙細胞に変化し始める。心はその宇宙細胞を応援しなくてはならない。我々の「意識の力」は自分を変化させるためにあるのだ。習慣的想念に心を支配させてはいけぬ」と少し言葉は違いますがこのような内容だと思ひます。

とにかく今は肉体の非宇宙細胞を認識しながら想念観察をし、イメージ法で宇宙細胞を応援しています。この方法はかなり効果的で自分でも変化しているのが良くわかります。しかし肉体のプライドがかなり強いのです。これを変化するのために肉体の創造された目的を理解し宇宙的な目的の方向に全身を向けようと思ひています。「意志の力」で習慣的想念に向いてしまふ心を宇宙の因に

かく向けようとがんばっています。良い結果が生まれましたらまた御報告致します。

「意識の声」に感動

松口幸之助

先日もお手紙を差し上げましたが久保田先生の「意識の声」の第七号を改めて拝読させて頂きました。大変に感動した次第です。久保田先生の文を読みますと、いつも宇宙的なフイーリングが高まってきます。不思議です(編注)。「意識の声」は久保田会長が特別維持委員会に毎月配布しているエッセイ。

私も早く健康になって社会で働いて私自身の波動をうんと高めてスペースブルーの方々とコンタクトするようにしたいと思っています。そして平和運動家になって世界中を飛び回りたいです。平和運動家といっても大群衆の前で何かを話すのではなく、心身共に苦しんでいる方々を秘かに援助することなのです。日本GAPも「宇宙的善良想念放射団」として活躍することは大変に素晴らしいことだと思います。

私も早いもので三七歳になりました。歳相応の悟りも必要ですが、しかし私の人生はこれかなのでして、少々なことではへこたれないぞといえますか、これから頑張るぞという意欲がありますね。私の病氣ですが早く良くなるのはこしたことはありませんが「今治る時期ではない」という何かにコントロールされているように最近になって感じます。治る時期があつていつか元気になって退院できる日が必ず来ると思いますが私も頑張ります。先生もお体を大切に

にして良きお年をお迎え下さい。

本誌の内容の素晴らしさ

若手県 大沢 悟

心待ちにしていたUコンが先日届きました。以前から考えていましたUコンに漢字を当てるなら「湧魂」です。なんとなくわかって頂けると思っています。どういう訳か前号と今号の間がとて長く感じられ、一月下旬が来るのを心待ちにしていたので一六号は特にだとも新鮮に嬉しく読ませていただきました。

記事中秋山氏の言っている「人間は創造できることがある限り生まれ変わる」という部分が非常に勇気が起こり深く素晴らしく感じました。GAPが何故一般的にテレビで紹介されないのか? 昨今のブームの宗教や能力開発ものの番組を見る度に思います。私などは会長のテレビ出演を待ち望んでいたのですが一般のレベルの低さがまだそれを許さないのでしょうか。先生がUFO関係の単行本を複数出されるとのこと、社会に対して真実の波動のインパクトを放つのかと思うと楽しくウキウキしてきます。自分もがんばらねばと勇気が湧いてきます。他人に頼るだけでなく自分が自分の目的に向かつてがんばる!という信念が強く起こつてきます。私はやるつもりです。全国の理解者の皆さん一人一人にお互いがんばろうといいたいです。

ポロイ女史の凄く秘話を交えての感動的な記事、これは圧巻でした。次号がまた楽しみです。また「ユークン広場」の頁を読みますと私はふと気づいたのですが(今まで気づかなかつたのがおかしいのかな?)、じ

つくりと一人一人の方の文を読んでいますと何と云いますか本心に心の底からというか素晴らしい幸せに感じているというか、そういふものが波動として感じられるようです。例えば会員でも何でもない人がひょいこのページを読んだとするとやはりそのように感じるだろうなと思いましたが、これはちよつとした発見です。ここに載っている皆さん実にア哲学ア問題の真の理解者だと思えます。感動しました。他の記事もすべて素晴らしいと思えました。(一つ一つ書いていたら長くなるので省略します)

これはお世辞ではありません。このような高度な燦然たる光輝を放つ冊子は他にないのではないのでしょうか。【巻頭言】こそ毎号これを読みたいが為に送って頂いているようなものです。多くの方がそうだと思います。先生が益々お元気でこの聖なる仕事を続けられますことを。(編注)久保田会長はテレビ出演依頼をすべつ断っています)

偉大な想念の力を発揮しよう

仙台市 佐藤喜代子

春の花の便りもすぐそこまで来ている感じがします。先生のめざましい御活躍ぶりはUFO、宇宙哲学に関心のある者であれば周知のごとではございますが、ご苦労も並大抵ではない様子です。毎号頂くUコン誌は輝いておられますね。波動が高く、先生のお人柄と才能が反映しているようです。いつも感謝の念をもって学ばせていただいております。このたび仙台支部月例会はしばらくの間休会ということですので、ち

よつとペンを取つてみたくになりました。笠原さんをはじめ、他の会員の方々にも大変お世話になりました。私が月例会に出席させていただけようになりましてから一〇年近くになりますが、参加する前後ではこのうまで違うものかとGAPの力に驚いております。私の場合、それはなんと云々してもUFOの目撃です。初めて東京総会に出席するという前日の晩、停止状態の星のような光体が突然動きだし、数回移動して消えUFOだなどすぐ分かりました。あれは間違いなく東京総会への祝福と激励の出現でした。スペースブルーの地球救済活動は私達が考えている以上に真剣のようです。

その時を始めとして何回となく目撃いたしました。あるときは光の行列にも出会いました。赤、青、オレンジ、黄、緑と、見かけ上、三メートルぐらいは続いていたでしょう。あれは何だったのかなと今でも時々思うのですが、こちらの想念や万物を見透す眼で見えいらつしやる方々が存在するという事実を確かに感じました。

情報では知っているつもりでしたが、スペースブルーほどの位進歩しているのか分らないという気がします。住んでいらつしやる惑星も含めてです。私達が最も必要としているとき、その想念を送ればやさしく手を差し伸べて答えて下さる偉大な進歩を遂げられた方々がいらつしやるのだと思います。それも最高の理解力を持つてです。私は確かに認識致しました。

アダムスキー氏は最終的な仕事の

ために地球に遣わされたのだということを知りました。地球の転換期ともいふべき時代に先生を通して学ぶことのできる私達は本当に幸運です。

GAPの教えには私達が現世において知らねばならない全ての事が含まれているように思います。また、地球の二面性に驚きのほかありませんが、私達は冷静かつ賢明に事の成り行きを察知する必要があります。想念の力は偉大なのですから、個人個人が平和的、宇宙的な想念を放ち、一人から二人へ、二人から一〇〇人へ、一〇〇〇人へと波動を広げて、近未来において金星のような惑星に地球を成長させることが出来たらどんなに素晴らしいことでしょうか。先生にはますますお元気で今後ともよろしくご指導のほどをお願い申し上げます。

お知らせ

次号より本誌に読者間の持ち物の売買、譲渡などの告知板を設けます。不用になった器具、図書その他の品物を売りたい方、または図書その他の品を探し求めている方は次の要領でハガキに明記して本誌発行日の一カ月前までにお送りください。(2)はどれかを選び)

- (1)郵便番号、住所、氏名、電話番号。
- (2)売ります。買います。無料譲渡。
- (3)希望価格。程度。

宛名は、日本GAP「告知板」係

本誌バックナンバー掲載記事目録

※印は絶版。在庫なし。お申し込みの際は郵便振替にて日本GAP宛ご送金下さい。バックナンバーに限り送料は不要です。

No.116 平成4年1月25日発行 ¥900

地球救済活動を続ける異星人——秋山真人
南フランスの不思議なコンタクト事件——中村省三
奇跡的に願望を実現させる方法——テッド・オーウェン
病氣治療の宇宙哲学的応用——高梨十光
ミラクル・ワードとミラクル・イメージ——久保田八郎
江東区上空のUFO——森田久恵
南九州支部からの声——曾我部勇人
プラザーズに助けられた？——藤沢清則
ジョージ・アダムスキーと異星人——アリス・ボマロイ

No.115 平成3年10月25日発行 ¥900

アダムスキーとUFO問題の真相——ハンス・ピーターセン
金星表面に超長大な水路を発見！
28年ぶり宇宙からの帰還!?
突然消滅した10人の少年少女！
暗闇から現れた不思議な人々
円筒型の奇妙な物体を見る——服部哲雄
謎の飛行物体、米子に出没
UFOの色彩についての一考察——斎藤俊徳
UFOと古代マヤの謎——久保田八郎

No.114 平成3年7月25日発行 ¥900

日本GAP全国ネットワークテレバシーコール UFO観測会、大成功
北海道上空の物凄い光景——松村芳之
尽きぬ宇宙へのロマン——高木 澤
奇跡を起こす想念の力——遠藤昭則
私は巨大な円盤を見た！——松浦義教
夕バツイの謎の大爆発——ジャン・パジャック博士
アダムスキーの主張は正しかった——ダニエル・ロス

No.113 平成3年4月25日発行 ¥900

ファティマの大円盤出現事件——久保田八郎
奇跡のペンダントと転生の法則——ハンス・ピーターセン
ティモシー・グッドのアダムスキー体験——中村省三
オーラ透視力開発法——遠藤昭則
壁画の奇跡——永山稔恭
江戸川区上空の巨大UFO——北館博子
クリスマス前のUFO出現——伊藤芳和
私のUFO目撃体験——平井沙織
UFO-宇宙からの完全な証拠(完)——ダニエル・ロス

No.112 平成3年1月25日発行 ¥900

アダムスキー問題と日本GAP——久保田八郎
宇宙人の遺体はロボットだった！——ハンス・ピーターセン
高度に進化した金星人の実態(完)——G.アダムスキー
〈写真〉金星の不思議なスジ模様
青森県に頻発するUFO出現事件——ダニエル・ロス
UFO-宇宙からの完全な証拠⑩

No.111 平成2年10月25日発行 ¥900

高度に進化した金星人の実態——G.アダムスキー
金星から転生してきたイエスの大地へ——久保田八郎
長野県に出現した巨大母船型UFO——村田正道
美しいUFOが赤城山付近を飛ぶ——番場博次
松本市にもフットボール型UFO——茶谷健一
北海道に現れたアダムスキー型円盤——堀江健一
私のテレパシクな不思議人生——郡司典子
UFO-宇宙からの完全な証拠⑨——ダニエル・ロス

No.110 平成2年7月25日発行 ¥900

UFOの正体と観測の仕方——本誌編集部
UFO・異星人との遭遇体験記——藤本定雄
宇宙哲学で奇跡を起こして安全に生きる方法——久保田八郎
西郷隆盛の最期を透視——遠藤昭則
アダムスキー秘書との対話——向井 裕
アメリカGAP発足 / (完)——ダニエル・ロス
UFO-宇宙からの完全な証拠⑩——ダニエル・ロス

No.109 平成2年4月25日発行 ¥900

豊かで素晴らしい他の惑星と生命の連続——G.アダムスキー
UFO、朝霧高原に出現！
デザートセンター円盤着陸事件(2)——久保田八郎
強烈に輝くUFOを見た私たち——川野綾子
オーラ、宝石、超魔術、チャネラー——遠藤昭則/秋山真人
「アメリカGAP」発足！——ダニエル・ロス
UFO-宇宙からの完全な証拠⑩——ダニエル・ロス

No.108 平成2年1月25日発行 ¥900

地球へ救援に来るUFOと転生の法則——G.アダムスキー
奇跡をもたらす「生命の科学」——久保田八郎
超能力開発の新しい視点——秋山真人
潜在意識としてのDNA——N. H. M. D.
私は巨大な母船を見た——小瀬村美英子
私についてきた光るUFO——郡司典子
GAP海外旅行で目撃した数々のUFO——中根 豊
ロイよ、来て助けておくれ！——久保田八郎
UFO-宇宙からの完全な証拠⑩——ダニエル・ロス

No.107 平成元年10月25日発行 ¥900

テレバシー開発法とUFOの実態——G.アダムスキー
マチュピチュとナスカの謎——久保田八郎
私はペルーでUFOを見た——富岡設子
アダムスキーに会った唯一の日本人(完)——向井 裕
超能力開発の基礎レッスン——斎藤庄一
宇宙哲学を生かした超能力開発法——遠藤昭則

No.106 平成元年7月25日発行 ¥900

金星から知的メッセージを受けたマリナー2号——G.アダムスキー
アダムスキーに会った唯一の日本人②——向井 裕
宇宙哲学で奇跡を起こす方法——久保田八郎
ヒーリングとテレバシー——遠藤昭則
テレバシー現象の医学的考察——N. H. M. D.
UFO-宇宙からの完全な証拠⑨——ダニエル・ロス

No.105 平成元年4月25日発行 ¥900

デザートセンター円盤着陸事件——久保田八郎/篠芳史/坂本貢一/茂子
アダムスキーに会った唯一の日本人①——向井 裕
過去生透視法とその実例②——遠藤昭則
輝く星々の彼方へ——斎藤庄一
長野県に巨大UFO出現！——博田文喜
UFO-宇宙からの完全な証拠⑧——ダニエル・ロス

No.104 平成元年1月25日発行 ¥900

UFO問題と世界の運命——久保田八郎
アダムスキーの宇宙的カルマと異星人の援助——アリス・ボマロイ
デザートセンターで円盤着陸痕跡発見！——安藤澄雄/久保田八郎
過去生透視法とその実例——遠藤昭則
UFO-宇宙からの完全な証拠⑦——ダニエル・ロス
GAP活動の原理——ダニエル・ロス



▲東京月例会セミナー（2月16日／機械振興会館）
前列中央は久保田会長、その右は講演者の高梨十光氏。

英文版「UFO contactee」No.7

申込先▶日本GAP

B5/12頁/コート紙使用/
¥500（送料¥175/3冊まで¥250）

世界のUFO研究会で注目的になっている日本GAP発行英文版は、各国UFO研究者や団体が絶賛。UFO問題は国境を越えた宇宙的な要素を帯びていますから、英文による国際版が情報伝達に重要。No.7はコンタクティー春川正一氏(仮名)の宇宙的体験記事「A Young Japanese Man Visits Other Planets」の連載最終回、アダムスキーの質疑応答を掲載。いずれも流麗な英文による貴重な情報源となるもので、英語学習用テキストとしても最適。両記事とも質疑応答形式なので、UFOや宇宙的思想を話題とする高度な英会話の習得に絶好の資料になります。

編集後記

◆本号はデザートセンター特集号としました。あくなき実地検証の繰り返しを続けていますが、今回は思いがけず巨大母船が出現して目撃者一同を驚喜させました。少々長い記事ですが読みごたえがあると自負します。

◆秋山氏との対談も前号で好評を博し、ぜひ続編をやれという声にお応えして再度座談会を開きました。次号で完結します。内容は濃くまとめて啓蒙的ですが、氏がどのような人物であるかが理解できるというものです。

◆前号での約束どおり反復思念法とイメージ法について本号で詳述しました。実は編者は毎日みずから実践して素晴らしい成果をあげているのです。いづれまたその内容についてお伝えしたいと思っています。

◆アリス・ポマロイ女史の連載も大好評裡に完結しました。女史の真摯な態度はまさにアダムスキーの高弟にふさわしいものです。現在はアダムスキー関係資料の整理で多忙をきわめているということです。

◆UFOは依然として各地に出現し続けています。こればかりは否定のしようのない驚然たる事実です。誰がどのように反駁しても目撃は続くでしょう。UFO現象をオカルトと同一視するのはあまりにも非科学的です。

◆UFO目撃報告、UFO写真、超能力開発体験、宇宙哲学研究実践、宇宙科学等の原稿や資料を募集しています。原稿書きの不得手な人は面談でも結構です。

◆本誌は多数のボランティアにより全国の主要書店に卸されています。この活動に参加希望の方はハガキでお申し込み下さい。説明書をお送りします。(K)

日本GAP機関誌・季刊 夏季号
UFO contactee 117号

編集発行人 久保田 八郎
発行所 日本GAP

〒154東京都江戸川区本一色1-12-1511

☎03-3651-0958

振替 東京 4-359912

一九九二年四月二十五日発行

定価九二七円(本体九〇〇円)・送料二七〇円

※本誌掲載の全記事・写真共、他の印刷物への無断転載を禁じます。

絶賛発売中

※新アダムスキー全集全巻をまとめてご注文頂きますと定価の10%引き+送料がサービスとなります。

新アダムスキー全集

—— 全面改訂・改訳 全10巻 ——

久保田八郎・訳 / 各四六判



中央アート出版社・発行 ①104 東京都中央区京橋3-7-13 三成ビル5F ☎03(3561)7017 ●郵便振替 東京8-66324

超絶した大文明を持つ、太陽系の他の惑星群の人々とコンタクトしたアダムスキーを米政府機関は密かにマークしていた！ UFOや惑星群の驚異的実態と深遠な宇宙思想を伝える本全集は、地球人類に宇宙的覚醒の必要性と真の生き方を示す永遠の古典。UFOと宇宙哲学の研究者にとって必読の名著。旧全集を全面改訂した最新決定版。世界に類書なき金字塔！

アダムスキー

① 第2惑星からの地球訪問者 362頁・定価1980円

UFO研究者として世界的に著名なジョージ・アダムスキーの、1952年11月20日、米カリフォルニア州の砂漠に着陸した円盤から出てきた金星人との会見から始まる驚異的なコンタクト実録。著者みずから円盤や母船に乗り組み、他の惑星の超絶的大文明の実態を明かにする、本全集の中心の書。写真多数収録。

アダムスキー

② 超能力開発法 (テレパシー、遠隔透視その他) 192頁・定価1300円

世間に氾濫する通俗的な超能力開発法とは根本から異なる宇宙的能力の発現法を説いたもの。目、耳、鼻、口、の四官をコントロールして、肉体内部の宇宙の意識から来るメッセージを感じ、真の意味でのテレパシー、遠隔透視その他の超能力を身につける方法を具体的に詳述。類書皆無の重要文献。

アダムスキー

③ 21世紀/生命の科学 208頁・定価1300円

アダムスキーが他界する前年に出した12冊分の講座を一冊にまとめたもの。アダムスキー宇宙哲学の総合的な一大金字塔。特に人体細胞の実態と真実のテレパシー、及び惑星通信の誤り等を科学的に解説した超能力開発指導書。心霊現象への接近を警告する画期的な理論を明快に説く、第5巻の続編として必読のテキスト。

アダムスキー

④ UFO問答100 218頁・定価1300円

1958年にアダムスキーは、世界中から来る質問の洪水を分類して質疑応答集を出した。全部で100問のUFO関係の質問に懇切な回答を与えている。現在の混乱した世界のUFO研究界に的確な示唆と回答を示すものとして、内容は今も驚くほど新鮮で有用である。UFO研究者の素晴らしいガイドブック。

アダムスキー

⑤ 金星・土星探訪記 380頁・定価2400円

アダムスキーが大母船に乗せられて、想像を絶する進歩をとげた金星と木星を訪れた体験記。特に金星人の少女として生まれかわったじき妻メリーとの劇的な対面が圧巻。第2部には1958年以來、日本におけるアダムスキーの代理人として啓蒙活動に専念している久保田八郎宛の多数の書簡を収録。

アダムスキー

⑥ UFOの謎 262頁・定価1980円

UFOの推進原理をはじめ、聖書とUFOとの関連などを詳述して様々なミステリーを解明した重要な文献。第2部はアダムスキーの世界講演旅行記で、各国GAP網の活動状況が「克明に描写されていて1960年代のUFO研究界の実情と一般人の宇宙観がよく理解できる。第1巻の続編。

アダムスキー

⑦ 21世紀の宇宙哲学 148頁・定価1030円

地球人が真に宇宙的な成長をとげるための基本的思想として、マインド(心)と肉体内部に宿る宇宙の意識との一体化を説いた書。既成のあらゆる宗教や哲学では理解し得なかった人間の意識と万物との関係を説いて21世紀の思想を先取りした。第5巻、6巻と合わせてアダムスキー哲学の三部作をなす。

アダムスキー

⑧ UFO・人間・宇宙 370頁・定価2400円

アダムスキー支持活動団体として世界のトップクラスをゆく日本GAPの機関誌に掲載された、アダムスキーのUFOと宇宙哲学関係の論文、講演録等を編集。他界する直前の最後の講演が「圧巻」。第2部には訳者・久保田八郎が「再三渡米してアダムスキーの今はじき高第たちと接したインタビュー記事を収録。

アダムスキー

⑨ UFOの真相 320頁・定価1980円 1991年4月刊 /

アダムスキーの薫陶を受けた人達の論説・講演録等を収録。宇宙の実像と人間味豊かな庶民性をあわせつつ偉人の素顔を多角的に描写。A氏の高弟アリス・ボマロイ、キース・フリットクロフト、ハンズ・ピーターセン、金星文字を解説して画期的な永久モーターを開発したバシル・バン・ゲン、バークラの証言が白眉。「サンビエトロ大寺院の異星人」と題する久保田八郎の体験記も興味深い。

アダムスキー

⑩ 超人ジョージ・アダムスキー 232頁・定価1300円

歴大な新アダムスキー全集の最後をしめくくる定結篇。アダムスキーの宇宙的な活動と深遠な哲学を集約して伝えるとともに、彼の伝記をも加えてこの巨人の人間像を克明に描写。これ1冊でアダムスキー問題の何たるかが理解できる全集のコンパクト版。豊富な写真入り。国際的なアダムスキー研究者・久保田八郎が書き下ろし執筆。

UFO—宇宙からの完全な証拠 480頁・定価2800円

ダニエル・ロス著 / 久保田八郎訳

アメリカの気鋭UFO研究者ダニエル・ロス氏が全力で展開したUFO問題の真相。月・惑星探査結果に関するNASA(米航空宇宙局)の隠蔽工作を暴露し、アダムスキーの体験の真実性を科学的に実証した画期的な内容の本書は、UFOの研究者のみならず、宇宙科学に関心ある人にもきわめて有益な知識情報の源泉となる。写真多数掲載。



オーソン肖像写真

新アダムスキー全集第1巻に出てくる金星人の肖像。目撃者アリス・ウェルズ女史のスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた等身大の油絵の写真。10.5cm×17cm。

¥1,000 送料 ¥120

金星のシンボルマーク

中央の眼は万物を見透すパワーをあらわし、周囲の4層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。9.3cm×8.8cm。



¥500 送料 ¥62



ESPカード

超能力開発練習用としてアメリカのデューク大学で開発されたカード。5種類の図形カードが各5枚ずつ、計25枚1セット。堅牢な厚紙製。重さ40gの軽量。5.7cm×8.9cm。ポケットに入れて携帯に便利なので、どこでも気軽に練習できます。

¥900 送料 ¥120(2~5個 ¥175)

テレホンカード

日本GAP特製のテレホンカード第5弾。今回はアダムスキーの原書からオーソン氏のスケッチを取り入れました。1952年11月20日、米カリフォルニア州デザートセンターで会見した金星人の姿を目撃者のアリス・ウェルズ女史がスケッチしたものです。

¥1,500 送料10枚まで ¥62



GAPキーホルダー

多数の方の要望にお応えて制作したオリジナル・キーホルダー。シンボルマークの周囲を「WITH COSMIC CONSCIOUSNESS(宇宙の意識とともに)」の金文字が取り巻く優雅なデザイン。メタル部分は径3.2cm、全長9cm。

¥1,900 送料 ¥120

会員バッジ

金星のシンボルマークが金色に輝く優雅なデザイン。表面の透明樹脂がキズを防ぎ、光を反射してキラキラ輝きます。男性用は裏の留め金が心棒ネジ留め式。女性用は安全ピン式。ご注文の際は、いずれかを明記して下さい。実物径1.7cm。

¥2,000 送料4個まで ¥120



新アダムスキー全集★★★★★訳・著者 久保田八郎のサイン・捺印入り!!★★★★★

中央アート出版社刊の新アダムスキー全集を日本GAPでも取り扱います。各巻とも扉に久保田八郎の直筆サインと捺印を入れてお届けします。全巻注文の割引はありません。送料はご注文内容によって異なりますので、ご注文の際は書籍代のみご送金下さい。書籍発送の際、送料の請求書と振込用紙を同封します。

申込先

住所、氏名、電話番号、商品番号、商品名、種類、個数等をご明記の上、郵便振替または現金書留でお申込下さい。代金後払いのご注文も承ります。ハガキに必要な事項をご記入の上、投函して下さい。品物をお送りするときに専用振替用紙を同封しますから、現品到着後、それを用いて郵便局よりご送金下さい。振替によるご送金は当

方へ到着するまでに約1週間かかります。この欄の商品はすべて消費税は無関係です。

〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511 ☎03-3651-0958

日本GAP 振替・東京4-35912

日本GAP能力開発テープ

●日本GAP東京本部月例会

毎月開催される日本GAP東京月例研究会セミナーから、久保田会長の解説講義と質疑応答その他のを録音したものです。これを聴けば絶大な信念と勇気がわきおこり、人生の荒波に屈することなく堂々と前進できます。

●テープ① ¥1,300 送料 ¥175
〈内容〉久保田会長による新アダムスキー全集の解説講義。近況報告。

●テープ② ¥1,000 送料 ¥175
〈内容〉超能力開発練習。質疑応答。
※①②一括ご注文の場合は送料 ¥250。
※1990年以前のバックナンバーもあります。往復ハガキでお問い合わせ下さい。

●1991年度日本GAP総会

2巻セット ¥3,900 送料 ¥250
〈内容〉ハンス・ピーターセン氏講演、他。



日本GAPビデオ

臨場感溢れる画像があなたを会場に引き込み、宇宙的な一体感を起こします。全巻VHS。

●東京月例会セミナー 全1巻 ¥4,000
〈内容〉久保田会長の解説講義、他。約120分。(1990年度分から在庫有)

●日本GAP総会 全2巻 各¥3,000
〈内容〉久保田会長の解説講義、他。約120分。(1989年度分から在庫有)

●日本GAP海外研修旅行 全1巻 ¥3,000
〈内容〉旅行のハイライトをまとめた楽しいビデオ。(1989年度分から在庫有)

●デンマークGAP大会 全2巻 各¥3,000
〈内容〉上巻=久保田会長の講演(英語)、他。英文テキスト(和訳付)もついているので英語学習にも好適! 下巻=美しいデンマークの探訪記録。
送料はいずれも1本 ¥360、2本 ¥510。



申込先

「商品名」「〇年〇月分」「個数」「お名前・ご住所・電話番号」等を明記の上、郵便振替でお申し込み下さい。

〒133 東京都江戸川区本一色1-24-3-202 ☎03-3653-9387

松村 芳之 振替・東京0-162644

申込先

「商品名」「〇年〇月分」「上・下巻」「個数」「お名前・ご住所・電話番号」等を明記の上、郵便振替でお申し込み下さい。

〒162 東京都新宿区富久町36-18 富久マンション103 ☎03-3351-9526

伊東 芳和 振替・東京4-13811

平成4年度

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日 時	会 場	会 費	プログラム・テキスト
東京本部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00 ※5月のみ第2日曜日の10日に変更。	港区芝公園3丁目5-8「機械振興会館」地下3F第2研修室。 ☎03-3434-8216。JR浜松町駅下車。東京タワーの正面前。 浜松町駅から東京タワー行きバスで約8分。 連絡先=日本GAP本部 ☎03-3651-0958 ※日曜日は正面玄関が閉じられているので、右へ回って建物の右側面の入口から入る。	会場費 ¥1000 セミナー受講料 ¥1500 計¥2500	1:00→1:30 会員による講演。 1:30→3:00 久保田会長による講義。 テキスト=5月より『生命の科学』 3:10→5:00 超能力開発練習/近況報告/質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00 ※今年度は1月から10月まで会場と日程の変更があるので平塚宛問合わせること。	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」 ☎388-7351。JRまたは阪急電車吹田駅下車。 連絡先=平塚和義 ☎06-436-3478 平成4年1→10月=「尼崎市立産業郷土会館」兵庫県尼崎市東大物町1-1-2	¥500	東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。 テキストその他=東京本部に同じ。
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	新潟市東万代町9「新潟市青年の家」(万代市民会館と同じ建物) ☎025-246-7711。JR新潟駅より徒歩5分。 連絡先=星 富治夫 ☎02579-2-5562	¥500	同 上
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1:00→4:30	名古屋市中区金山1丁目5番1号「名古屋市民会館」特別会議室。 ☎052-331-2141代。 JR東海・名鉄・地下鉄の金山橋より徒歩5分。 連絡先=林 国直 ☎0586-45-6468	¥300	同 上
仙台支部	毎月第3日曜日 午後1:10→4:20 ※当分の間、月例会を休会。	仙台市青葉区米ヶ袋1-1-35「仙台市片平市民センター」会議室。 ☎022-227-5333。仙台駅からお霊屋橋経由動物公園方面バスで約7～10分。東北大正門前下車、真向かいの建物。 連絡先=笠原弘可 ☎022-284-2910	¥300	同 上
山形支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00 ※日時に変更があるため、毎月月例会の前に柴田宛電話で問合わせること。	山形県天童市老野森1丁目1-1「天童市中央公民館」 ☎0236-54-1511。天童駅から徒歩10分、タクシー4分。天童市役所の裏側。 連絡先=柴田光明 ☎0233-25-3261	¥300	同 上
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1:00→4:30 ※日時・会場は不定につき、高野宛問合わせること。	中央区北一条西13丁目「札幌市教育文化会館」会議室。 ☎011-271-5821。 連絡先=高野省志 ☎011-783-6393	¥500	同 上
旭川支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	旭川市五条4丁目「旭川ときわ市民ホール」3F 302研修室 ☎0166-23-5577 連絡先=川上三秀 ☎0166-61-0044	¥500	同 上
沖縄支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	具市川市栄巣野比1213-1「具志川市野外レクセンター」会議室。 ☎09897-2-7722 連絡先=比嘉政広 ☎09893-3-2889	¥500	同 上
秋田支部	毎月第2日曜日 午後1:00→5:00	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。 ☎0188-24-5377。 連絡先=伊藤正治 ☎0188-62-2831	¥500	同 上
横浜支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00 ※5月・6月のみ時間を10:00→17:00に変更。 (研究発表・スライド上映を予定)	横浜市中区万代町2-4-7「横浜市技能文化会館」7F 703号室。 ☎045-681-6511。JR関内駅、地下鉄・伊勢崎長者町駅より徒歩3分。 連絡先=清水 正 ☎03-5951-3518	¥500	同 上
茨城支部	毎月第4日曜日 午後1:20→5:00	水戸市梅香1-2「三の丸公民館」小集會室。 ☎0292-24-6600。水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先=清水勝一 ☎0292-73-1903	¥300	同 上
長野支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	塩尻市大門7番町「塩尻総合文化センター」第1会議室。 ☎0263-54-1253。 連絡先=博田文喜 ☎0263-58-8510	¥500	同 上
紀南会	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00 ※今年2月より月例会を再開。日時と会場については小川宛問合わせること。	和歌山県新宮市新宮6682-1「新宮市福祉センター」1F相談室。 ☎0735-21-2760。JR西日本新宮駅下車、徒歩5分。 連絡先=(副代表)小川隆志 ☎0735-32-2834	¥300	同 上
栃木支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	鹿沼市市役所裏「御殿山会館」1F小会議室。 ☎0289-64-4334。JR鹿沼駅から西へ1.5km。東武新鹿沼駅から北へ1.5km。市内行きのバスに乗り天神町下車。徒歩5分。 連絡先=渡辺克明 ☎0289-62-3319	¥500	同 上
南九州支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	鹿児島市与次郎2丁目3-1「鹿児島市民文化ホール」 ☎0992-57-8111。 連絡先=鶴田清則 ☎0993-25-4398	¥500	同 上
高松支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00 ※日時・会場は変更があるため、関宛問合わせること。	高松市番町1-8-22「高松市立市民会館」会議室。 ☎0878-39-2888。JR高松駅より徒歩15分。 連絡先=関 高明 ☎0875-72-2698	¥400	同 上

お好みのサブリミナルテープ®を 1本 (60分テープ) デジタル録音 無料進呈!

先着
250
名限り

●「記憶力・集中力強化」「魅力的性格」「学力向上」「心のやすらぎ」「最高の頭脳」等々を努力なしに現実のものにしてくれる、アメリカからやってきた「サブリミナルテープ」がNHK等でも紹介され、話題になっています。

●その人気16シリーズの実際の効果を試せるベーシックテープ(60分・デジタル録音)をこの広告をご覧の方、先着250名様に無料で差し上げます。

▶今すぐおハガキ・お電話でお申込み下さい。

下のテープの中から、お好みのテープを選べます!

『自分の能力への自信の強化』	『女性への緊張感の除去』
『自分の可能性への確信』	『男性への緊張感の除去』
『ビジネス能力開発への意欲』	『偉大な成功へのイメージを描く』
『本来の自分を取り戻す』	『幸運な人生をめざす』
『自分自身への自信』	『経済的成功への自信』
『人間関係の苦手意識の克服』	『充実人生獲得への自信』
『人間的魅力を養う』	(詳しくは、お届けする案内書をご覧ください。)
『自分の魅力に気づく』	



サブリミナルテープ®の美しい音楽をBGMとして聴くだけで あなたの人生が変わる!

サブリミナルテープとは、ストレスを解消し、気分をさわやかにする特殊な音楽に、「特定の効果」をもたらす「耳に聴こえない周波数に変換された心理的メッセージ」を同調させた特殊な音楽テープ。BGMとして聴き流しているだけで、自然に潜在能力が開発されたり、理想的な習慣が身につきます。「無料ベーシックテープ引換券」と同時に「能力開発」「心身の健康」「性格の改善」等の各シリーズの案内書をお送りいたします。

■無料サブリミナル・ベーシックテープをご希望の方は、住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記の上「無料ベーシックテープ案内書と商品券」と下記までお電話・おハガキでお申込み下さい。(お申込みいただきま

「サブリミナル・ベーシック
テープ案内書と
商品引換券」希望

- 住所
- 氏名
- 年齢
- 職業
- 電話番号

41
円

郵便はがき
〒107
アメリカン
ライブラリー
社
1554
係

すと、折返し、サブリミナル・ベーシックテープの商品引換券ハガキと詳しい案内書をお送りいたします。)

お電話でのお申込みは
0120-363002
(受付 AM8~PM24、日・祝日も受付中)



私もサブリミナル
テープで絶好調です

▶広瀬綾子(プロテニスプレイヤー)
'91ダンロップ・マスターズのダブルスで優勝し、波に乗って現在人気・実力とも急上昇中の女子プロテニス界の新星。

〒107 東京都港区南青山1-26-4 アメリカンライブラリー社 1554係

先着500名様限り、下記までお電話・おハガキで!!

超高速英語学習

英会話
テープ
(C-30)

無料進呈

サジェストロニクス・ラーニング



『自然に英語を口ずさみ始める』

BGMとして楽しんでるだけで

『短期間に英会話をマスターしたい』『ほんとうにしゃべれる英語を身につけたい』『楽しく聴けて、しかも飽きのこないテープがほしい!』
そんな方にぜひお勧めします。

●BGM感覚で、聴き流しているだけで、自然に英語が身についてしまうという、ブルガリア出身の「バルザコフ博士」の手になる超高速英語学習テープ『サジェストロニクスラーニングテープ』がアメリカからやってきました。
●日常英会話シリーズの第一回目のテープ(デジタル録音・C-30)を、この広告をご覧の方500名様に下記のシステムにて無料で差し上げます。今すぐお電話又は、おハガキでお申込み下さい。



1.バルザコフ博士

サジェストロニクス・ラーニングテープとは、モーツァルト、バッハ、ビバルディ等々のクラシック音楽に、ブルガリアで特訓を受けた

の専門家が独特の技法を用い、音楽と絶妙の「ハーモニー」をかもし出しながら、3パターンのナレーションを吹き込んだ特殊な語学テープ。
「歌の歌詞を憶えるように自然に頭へ入ってゆく」「何度聴いても飽きがこない」「BGM感覚で、心地よく苦痛なしに聴ける」というのがこのテープの特徴。子供が母親から言葉を吸収してゆくように、自然に体が英語を吸収してゆきます。
今回無料でお届けするのは、サジェストロニクスラーニング日常英会話シリーズ(1)「ジョンとエイミーのお茶漬け日記」の序章テープ。
「空港で」「喫茶店で」等々の場面でジョンとエイミーのキャプルの会話を通して、日常英会話のエッセンスが効果的に学べるテープです。

『超高速英語学習』序章テープ申込み要項

サジェストロニクス・ラーニングの日常英会話シリーズ「ジョンとエイミーのお茶漬け日記」の序章テープを、次のようなシステムにて無料でお届けします。以下の要項を良くお読みになり、お電話おハガキにてお申込み下さい。
●序章テープは、日常英会話シリーズの第0回目の頒布テープ、としてお送りいたします。
●お届けする序章テープは、日常英会話シリーズ(1)の、第一回目以降のテープ、購入の有無にかかわらず、無条件で無料です。
●序章テープをお申込みいただきますと、日常英会話シリーズ(1)の頒布費に自動的に登録され、キャンセルの通知がない場合は、翌月より第一回目以降のテープを毎月自動的にお送りいたします。
●第一回目以降は一年単位の会費制の頒布会方式でお届けします。毎月いろいろな場面での基本英会話が効果的に学べるテープを一巻ずつお届けしてゆきます。お支払いは毎月テープ到着後に、4,260円。

第一回目およびそれ以降もテープ到着後5日間の無料試聴期間を設けていますので、気に入らない場合は自由に返品できます。又途中退会も自由です。
●序章テープをご使用の結果、ご満足いただけた場合には、テープ到着より3週間以内に「キャンセル」のご連絡を電話かテープに同封されるキャンセル用ハガキにていただければ、第一回目以降のテープは発送されず、そのまま「退会」となります。
●「キャンセル」の場合でも、お届けした序章テープの返品は必要ありません。そのまま「費用」ください。

郵便はかき

〒107

東京都港区南青山
1-26-4
アメリカンライナー社
1555係

超高速英語学習「序章テープ希望」

- 住所
- 氏名
- 年齢
- 職業
- 電話番号

■超高速英語学習「序章テープ」をご希望の方は、住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記の上、「序章テープ希望」と左記まで、おハガキまたはお電話でお申込み下さい。(序章テープの返品

の義務や商品購入の義務は全くありませんので安心して申込み下さい。)

注意=序章テープのお申込みは16才以上の方に限らせていただきます。

お電話でのお申込みは



0120-363-002

(受付時間AM8:00~PM24:00 日・祝日も受付中)